〔表紙〕

齊彬公史料

市來四郎編

安政五年

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事鞅掌史料（紙数一〇八枚）」の記載あり〕

目録

米国使節登営可否諮詢ニ対ル御意見書
盂蘭盆祭上野増上寺献燈幕令
〔焚〕
焚鐘鋳換詔勅ニ対シ寺院由緒及ヒ寺院数調査
琉球通寶鋳造御目論見古例調査
佐賀侯来覲ノ説
条約調印延期談判書
水戸前納言殿建白
水戸中納言殿建白
京都守護人体中山忠能外十五名建白
〔脱カ〕
〔青木春伐侍医トナル（七月四日幕府日記鈔）
太田備中守辞職セントス
参考　安政記事鈔
参考　水藩及ヒ尾張・薩摩ヘ下賜勅書
参考　間部詮勝上京延期
参考　水戸侯・尾州侯登営
参考　維新史撮要
近衛家所蔵書第一
仝上第二
仝上第三
仝上第四
仝上第五
仝上第六
仝上第七
仝上第八
仝上第九
仝上第十
伊能友歐略歴
大政一変セサレハ外国ト交ヲナスコト能ハス

幕府海軍創設ノ布達
鉄鋳四文銭通用布令
士族所有禄高売買価格制限令
尾・水・越三侯退隠謹慎上奏書
近衛左大臣墨夷約条調印違勅ノ旨演達
日下部伊三次堀仲左衛門ニ与ル書（水戸徳川家所蔵）
齊彬公伊達藍山公ニ与ル書
参考　安政紀事抄
京都大火（非蔵人日記鈔）
参考　福井・土州・宇和島三侯一橋公ヲ儲嗣センコトヲ密奏ス
参考　小笠原長門守ヲ京都町奉行ニ任ス
井伊直弼間部下總守ニ与ル書（公用方秘録鈔）
参考　皇女降誕（非蔵人日記鈔）
主上宸翰ヲ伊勢・加茂・石清水ノ三社ニ納国家安泰ヲ祈リ玉フ
参考　英・佛二国艦隊来港予報（公用方秘録鈔）
藤島山城寛宥達書（非蔵人日記鈔）
井伊直弼松平伊賀守カ行為隠言
井上・岩瀬米国使節ニ応接及ヒ幕議
井伊直弼井上・岩瀬カ復命ヲ聞ク（公用方秘録鈔）
条約締結ノ始末奏聞案（仝上）
諸大名諸役人惣登城ノ形況（仝上）

一八三　米国使節登営可否諮詢ニ対ル御意見書

（別冊参照）

○この文書は、「鹿児島県史料　斉彬公史料」第二巻の第一五八号文書（安政四年十二月二十五日付幕府老中宛島津斉彬建言書）と同文重複により略す。

一八四　盂蘭盆祭上野増上寺献燈幕令

於江戸七月盆、上野并増上寺へ諸家ヨリ被献候御灯篭、頃日軽相調被献候付、大圓寺　御先祖様方、又ハ御当地御寺方へ御進納有之候御灯炉モ、当年ヨリ色紙、又ハ白紙張ニテ、以前ヨリ軽御調被差上筈候条、御家中ヨリ御寺方へ御灯炉差上候面々モ有之候、其御灯炉モ鬼頭七寸角ヲ限リ、随分軽相調可差上候、勿論自分先祖灯炉ハ七寸角以下相調、猶以軽仕立可然候志迄ノ儀ニ候処、様子相変候灯炉又ハ作物抔クタシ金銀ノ箔ヲモ用、別テ手間相掛仕立ノ無益ノ費ニ候間、惣テ結構イタシ候儀無用可仕候、此旨所中へ可申渡者也、

五月廿八日　　御家老座

一八五　梵鐘鋳換詔勅ニ対シ寺院由緒及ヒ寺院数調査

真宗禁制之由来

古来我薩藩ニテ真宗ヲ信仰スル事ヲ禁シタルハ、豊臣秀吉カ薩州征伐ノ際、真宗ノ僧侶カ諸所ノ嚮導ヲ為シタルニヨレリト云ヒ伝フレトモ、或書ニ記載スル処ニ拠レハ、今日世ニ云ヒ伝フル処トハ大ニ相違シ居レリ、而シテ何レカ実説ナルヤ、之ヲ知ラスト雖モ、或書ニ記載スル処全ク虚構ノ説トモ思ハレサレハ、左ニ之ヲ略記シテ読者ノ覧ニ供セン、

南北両朝双立スル事五十余年、戦争息ム事ナシ、後小松天皇深ク之ヲ嘆シ玉ヒ、丹波ノ水澤寺ニ在ル聖僧石屋ヲ召シテ、而シテ頻リニ天下皇統合一ノ策ヲ謀ラセ玉フ（始メ石屋甫十三家ヲ出テ、十八ヨリ唐土ニ入リ、四百余州ヲ経帰シ難行苦業殆ト廿年、廼チ一州毎ニ七日宛座禅ス、唐人褒賞シテ活達摩ト号ス、帰朝スルヤ赤松満政活達摩爾來寺ヲ美作ニ建ツ）、依テ石屋芳野ニ詣リ、南帝（後龜山帝）ニ説ク、忘執ヲ離レ真如ノ月ヲ観ン事ヲ以テス、帝感悟シ切リニ石室（屋カ）カ教法ニ帰依シ給フ、竟ニ明徳（北朝）三年三月八日南北両朝ノ合一成ル（后世朝廷書ヲ福昌寺ニ錫（賜カ）フ時、臘月晦日ト雖尚ホ三月八日ト記ス、蓋シ南北一統ノ慶事ヲ遣レサル所ナリ）、是歳冬石屋檀方大内義弘ヲシテ大和ニ遣シ、南帝ヲ迎ヘ奉ラシメテ、而シテ神器北朝ニ帰ス、是ニ於テ後小松帝石屋カ大勲功ヲ賞シ、西二十三ケ国曹洞禅首ヲ薩摩国鹿兒島ニ　勅建シ、玉体龍顔北朝福昌大禪寺ト号セシム、始メ小松（後脱カ）帝石屋ニ　勅シテ曰ク、賞典貴僧カ望ム所ニ任スト、石屋遽ニ起チ喜悦九拜シテ曰ク、念望皇国惣州妻（帯）対肉食宗ヲ断スルニアリト、帝惘然トシテ曰ク、此事能ハサルナリ、雖然薩隅日三州琉球一向宗ヲ断スル事ヲ許スト、僧隱元石屋カ一向宗ヲ禁スルヲ褒メ、為ニ偈ヲ作テ之ヲ賛ス、后世誤テ島津家ノ藩政厳ニ妻帯不精進宗ヲ禁スト称ス云々、

日本国中寺数

一天臺宗	千八百弐拾ケ寺
一眞言宗	壱万千八ケ寺
一禪宗	壱万七ケ寺
一遊行宗	六万七千六ケ寺

一佛光宗　八千五百弐拾ケ寺
一西本願寺宗　四万五千八ケ寺
一東本願寺宗　八万百弐拾ケ寺
一高田　七千五百廿ケ寺
一法華宗　八万三千五百八拾九ケ寺
一大念佛宗　千八百弐拾ケ寺
一浄土宗　拾四万弐拾ケ寺
一法相宗　五千三百廿ケ寺
一〔ママ〕宗　九千八ケ寺
合寺カ数四拾七万五百六拾六ケ寺

一ケ月一寺銭三文ツヽ、一年分三拾文ツヽ、七ケ年一ケ寺六百三拾六文宛之賦ニシテ、拾七ケ年分銭弐拾九万九千百八拾五貫八百廿四文

右年数之内毎月六千有之賦ニシテ、増分八千八百弐拾三百拾弐文〔貫カ〕

二口〃銭三拾万八千八百八貫九百三拾六文

右ハ大坂天王寺伽藍修復ニ付、日本国中諸寺ヨリ寄進被仰付候帳面寺数之由、

享保十九年寅五月之書付を以写候也、

但寄進ハ止ニ成候由、

以上記ス処ハ、藩内寺院ノ梵鐘仏具ヲ以テ、武器製造ノ料ニ資セムカ為メ調査シタル者ナリ、○藩内調査書ハ第〔ママ〕巻ニ記ス、

古記録中ニ

大坂御陣後落人之事（加治木郷由来ニ関ス）

昔大坂御没落ノ後、上方人三人列ニテ当地ヘ罷下リ、カナタコナタト仕候故、此衆ヲ捕ヘ何故罷下リ候ヤト御尋候ヘハ、秀頼公御亡命ノ御跡ヲ恋ヒ罷下リ候段、堀田大學之介・藤原右京齋ト申者ニテ候ニ付、此両人相搦メ、黒田七兵衛ヲ被下附、板倉伊賀守殿御方迄御引届御披露被成候、今壱人相残リ、吾岡伊左衛門ト申候ニ付、道〔ママ〕原ニ居住ニテ候、今隈元八兵衛屋敷、此人若年ノ時分ヨリ罷居候哉、一生無妻ニテ平生碁ヲ打、書籍ヲ子供ニ教テ、萬治二年六月四日致死去、近所ヨリ家財等相改候処、金子有之ヲ以当地安國寺ヘ葬リ候、祠堂ニ相付衣類、熨斗目上下紋所平生ノ定紋ト相違候故諸物無残所焼捨候、其後志布志大慈寺住持松施岳禅師爰元ニ来テ〔ママ〕ヒ哉、此ノ人薩隅之間徘徊シ、齢ヲ終ニ此地ニ留ムトイヘトモ、結終来由ヲ可知人ナシト云テ石碑ヲ被立候、今其碑ノ銘闕ク、不分明候、

一八六　琉球通寶鋳造御目論見古例調査

加治木錢作之事（加治木古老話記鈔）

於当地錢作候処ハ今錢屋町ト申町ニ相成候、錢作リ方主（ママ）木佐木佐渡入道正ト申者ニテ候由、其時分之書付有之、慶長十一年ヨリ蒲生米丸ノ御蔵水夫屋ノ御蔵ヨリ張米被成下出候由御書付有之、錢作リハ田布施ヨリ壹岐仁助ト申者被召寄、御作ラセ被成候由、子孫ノ者当所町ヘ罷在、母方ノ名カネ二木ニテ候、諸書附ハ折々ノ出火ニ焼失、石道其迄（本ノマヽ）ニ今相残候、其時分惟新様天満宮エ御参被成、八杉十郎左衛門前ニ罷出居候処ニ、錢作方銅子上方ヨリ幾人計罷下候ヤト御尋被成候所、二十人余罷下リ候段御返答申上候、日帳ニ相見得候、依之錢屋町之地ヨリ百文計堀出タル事有之、此錢洪武通寶、裏ニ治ノ字加ノ字有之、加治木錢ト申候、其時分葉流（ハヤリ）歌ニ「今ノ加治木錢壱文弐文カ何ニシヤシニ」トウタヒ候由（龍門司街道吹之事別スニテ）、今之龍門司街道ハ寛永十二年六月七日見分有、鹿兒島ヨリ新納勘解由殿・二階堂城之助殿、加治木ヨリ肥後土佐守・北村平右衛門・伊地知和泉守・長田仁右衛門立会見分有之候、七月五日有川平右衛門ヲ以江戸ヘ被登ルニ街道相直候、有川平右衛門事ハ佐土原ヨリ罷移、其後鹿府ヘ罷移、後八右衛門ト申候、其後伊勢名字罷成十兵衛先祖ノ由、此龍門司海道ハ本（ママ）石原ヨリ当地ニ山田之内本土カ原ヲ通リ、五本松（ママ）護字ノ上ヨリ門田ノ滝ノ上、城ノ大迫ヨリ山ヲ下リ□□（不明）町ニ出、黒川迄（ママ）相通為申由、龍門司ノ方城之前堀ヨリ落ル滝高サ十七八間、横廿間計有之、龍門カ滝ト申有、古歌ニ、

きふさきに遠来近来人の今しばし
立帰りみる滝の白原

以上ノ古文書類ハ藩内ニ於テ琉球通寶鋳造ノ御目論見アリテ、類例先蹤調査セラレタル書中ニアリ、詳ナルハ文久二年ノ条ニ記ス、

一八七　佐賀侯来麗ノ説（道島正亮紀事鈔）

道島正亮記（現在八十三四歳ナリト、明治二十五年）ニ、六月三日朝四ツ時分、知輪島ノ沖小根占地方ニ蒸汽船一艘相見ヘ、先日参候公儀ノ蒸汽船乎又ハ異国船乎トノ評判ナリ、四ツ半過キ頃ニハ沖ノ小島ト櫻島トノ間ヲ乗リ、九ツ時分ニハ前ノ濱辨天波戸沖七八丁ノ所ニ

錨ヲ卸シ、蒸汽ヲ漏シ、程ナク端舟二艘ヨリ下町石燈籠通リ下ニ漕キ付ケ、十人許リノ人船問屋田代カ店ニ立入リ、座敷ニ通ラレ候由、異国船ニテハ無之、皆日本人ノミニテ候由、立揚袴割羽織ナト着候由、町役人・年行司ナト馳セ付、応対ニ及ヒ候処、肥前様御船ニテ、乗リ廻シ稽古ノタメニテ推参致シ候由申サレ候由ニテ頭立候御客様ヨリ薩摩守ハ御在城ナリヤ、此一封御側衆ニ届ケ呉レ候様ニト被相渡候由、然ル処上様ハ先日ヨリ磯御茶屋ニ御滞在ニテ候間、直様差出ヘク申居候中ニ、御小納戸早川務馬ニテ乗リ来リ、田代カ二階ニ上ラレ、稍暫時ク何乎咄被致、程ナク又磯ノ様乗切リニテ帰ラレ候由、町役人共ハ右ノ手紙ハ未タ差出申サス、早川氏参ラレ候ニ付同人ヘ差出候処、ヨシ〳〵ト被受取候由、程ナク二階ノ御客人ヘトテ端舟ヨリ弁当持来リ候ニ付、手伝ト下女取次テ二階ヘ差出候処、程ナク弁当ツカワレ、後右ノ人々六人許リハ、辨天波戸台場ナトノ見物ニ出ラレ、跡二三人ハカリハ田代所ニ残リ居ラレ、早川氏ノ左右ヲ待チ居ラル、体ニ候由、七ツ時分又早川氏・竪山氏両人馬ニテ乗リ来リ、三四人ノ人々ニ何カ談話セラレシト見ヘシカ、直ニ台場見物ニ出ラレ候人々ノ迎ニ出行レ候、其時早川氏ナトハ町役人ニ一緒ニ御迎ニ行ケヨト申付ラレ候由、程ナク皆田代ノ二階ニ帰ラレ候、早川氏・竪山氏ハ戸口ニ出迎ヘ、余程敬礼セラレ候ニ、御客ノ一人ハ指シテ腰モカ、メス、挨拶モソコ〳〵ナルニ、町役人トモ不審ヲナシ居候由、程ナク御客人御迎ノタメ御召舟ノ丸木舟御迎ヒニ来リ、夫ニ御乗込、彼ノ方ノバッテイラ二艘ト一緒ニ磯御茶屋ノ様、早川氏・竪山氏モ被参候由、磯ニテハ錫御門下ニ舟ヲ着ケ、右ノ御客人御案内ノタメ、御側衆・御茶道衆ナト海岸ヘ出迎ハレ、錫御門ヨリト御案内被致候由、上様ニハ望嶽樓ノ屏ノ上ニ御出御覧ナサレ、錫御門内迄御出迎ニモ相成候、鶴ノ間ニテ夜入過マテ御差向キニテ御物語リ被為在、御馳走モ種々被為在、御茶道御膳所等ハ俄ノ事ニテ大混雑ノ由、御客人御供方ト見ヘシ人々、初ハ望嶽樓ニ扣ヘ居ラレ、後御馳走ニハ御茶屋番岩元所ニテ御馳走出候由、其中ニハ集成館見物ナト被致候由、御客様モ中頃上様御案内ニテ集成館ヘ御出被為在候由、其時佐賀様ナルコト相分リ、皆人驚キ候由、重久氏ナトハ江戸ニ於テ能ク存シ上ケラレ、早川氏ト御懇ノ御咄モ有之候由、夜入

過右ノ小舟ヨリ本船ノ様御帰リ有之候、其時モ早川氏・重久氏・竪山氏御見送ノタメ蒸汽船ノ様御供被致候由、翌日朝五ツ時分蒸汽船ノバッテイラ二艘、磯御茶屋下ニ漕キ行キ、無程上様ニハ御供方五六人ニテ、丸木ヨリ蒸気船ニ御乗込ミ被為在、バッテイラハ御跡ヨリ帰リ候、四ツ半時分蒸気船ハ内海國分ノ方ヘ乗リ出シ、新川尻辺・新島ノ辺ヨリ引返シ、櫻島袴腰前神瀬沖ノ小島辺ヲ乗リ、天保山沖大門口台場辺ヲ乗リ、八ツ半時分本ノ下町下ニ返リ、七ツ過時分上様ニハ磯ノ様御帰リ被為在候由、程ナク蒸気船ハ出帆致シ、夜入前ニハ帆影モ見ヘス相成候、昨日ヨリ今日マテ上下町海岸ハ見物人夥シク候、

今日蒸気船ヘ水・薪・卵・野菜等、町役人共ヨリ積入候由、御小納戸方ヨリハ何乎御進物モ過分ニ仕出シ相成候由、昨日田代カ所ニ御客人上カラレ候節ハ、田代ノ亭主ト下女カ御茶ナト上ケ候ニ、下女ハ例ノ通前タレヲマクリ、高菜ノ漬物ヲ御手押ヘニ上ケ候ニ、御客ハ御取ナサル、コトヲ御存シナク、下女ハ何トカ申上候ニ一向御分リナサレス、一同大笑ナサレ、下女ハ顔ヲ赤メテ下リ候由、コノコトハ後日早川氏ノ直話ナリ、

此様ニ折々御珍客御出ニナリテハ、油断ノナラヌコトナリ、何分先日ノ如ク二才トモカ乱行セサルハ、仰渡シノキケタコトニテ、是ノミ幸ノコトナリ、

一蒸気船ヘ被遣用ナラン乎、御納戸蔵ヨリ俄ニ豚壺二本・泡盛壺二本・赤貝塩辛二壺奥上リニテ払ヒ出シ候、

一町役人ノ咄ニ上座ノ御方ハトンスノ立揚ニ割羽織ヲ召サレ、御陣笠ハ外ノ人取ラレ候由、其外モ皆立派ノ支度ニテ候、七八人ノ内四人ハ二階ノ次ノ間ニ扣ヘ居ラレ候由、

一蒸気船ハ先日両度参リ候船トハ少シ格恰違ヒ、大キサハ同様ノ由、

鍋島家質問書

電流丸　安政午十月御注文ノ末来着、十一月六日受取、

同十二日初テ乗試、

觀光丸　同年十二月御預ケニナル、

五年午五月廿七日中　調練場ニテ、志摩組炮術御覧、雨天ニ付延引、六月五日ニ有之候、

一八八　条約調印延期談判書

五月二日ヲ以テ、堀田備中守（正睦、佐倉藩主）殿・松平伊賀守（忠優、上田藩主）殿・久世（広周、

大和守殿（関宿藩主）・内藤紀伊守殿（信親、村上藩主）・脇坂中務大輔殿（安宅、龍野藩主）ノ諸老中連名ニテ、条約調印日延ノ書翰ヲアメリカ合衆国ヘ送リタリ、其文ニ云ク、

自分共今般大君ノ命ヲ以テ、日本国ニテハ井上信濃守・岩瀬肥後守ニ任シ、アメリカ合衆国ニテハ大統領ノ命ニ依テ其許ヲ差越シ、当午年五月二日双方談判ノ上、条約決定有之トイヘトモ、日本ニ（国脱カ）ヲイテ安寧ヲ存スル重大ノ事柄有之ニ依テ、調判ノ儀ハ七月廿七日迄延引セン事ヲ、我望ニ応シ其許承允セラレ、併此事ヲ変改、又ハ其限ヲ延引セラルト（セサルコトカ）疑フヘカラス、且此後其国（貴カ）ノ外ノ外国人ヨリ、条約等談判及候事有リトイヘトモ、アメリカ合衆国ノ条約ニ調判スルノ後、三十日ヲ不経内ハ談判スル事有ヘカラス、

謹言、

安政五年戊午五月二日

（大日本古文書（幕末外国関係文書）にて校訂）

一八九　水戸前納言殿建白

謹テ奉拝見候処、

勅答之趣実以奉始

神宮　御代々ヘ被為対、

神国ノ御為被為悩

叡慮候御至孝之程、一ハ奉感服、一ハ奉恐入候、右ニ付テハ　将軍家ニ被為置候テモ、厚ク（御脱カ）被思召、　東照宮ヲ始（御カ）御代々ヘ御至孝被為尽候様、為天下奉至願候、

但敵国ノ模様古今相違ニ付、為防禦（候テ脱カ）　御祖法ヲ御変通被遊候ハ無御拠儀、征夷府ノ御任ニテ被遊候事故（御脱カ）、品ニ寄リ却テ御孝道トモ奉存候ヘトモ、万々一夷狄ヨリノ願ニ付、スヘテ夷狄ノ勝手ニ相成候様ニ、重キ　御祖法迄被為変候テハ、　公辺御懐合奉承知候者ハ、無御拠トモ可奉存候ヘトモ、天下ノ衆目ヨリハ乍憚被為対

天朝候テモ、　東照宮御始御代々ヘ被為対候テモ、御忠孝ノ処如何ト可奉存ヤ、御忠孝ニ違候様存上候テハ、人心ノ帰向ニモ如何可有御座哉、一体彼ハ海外諸国ヲ例ニ引候ヘトモ、

神国ハ封建ノ国ニ候ヘハ、夷狄ノ事ハ暫ク指置、次第ニ寄リ内地ノ治リ方深ク心配仕候、強テ御施ニ相成候共、御模通リノ程難見抜候故、何共申上兼候、先以是迄数度建白仕候通リ、一日モ早ク（御脱カ）京坂御当地御警衛向何レニモ（幾重ニモ天）御手厚ク被遊、被為安

叡慮、　将軍家ニモ〔テ脱カ〕御安心被為在候様奉至願候、愚昧ノ見、勿論御取用ニハ相成間敷候ヘトモ、御尋ニ付不顧恐奉申上候、以上、

五月三日　　齊昭

井伊等尾州及ヒ水戸納言ノ書ヲ見テ、皆前納言ノ教ル所トナス、

〔大日本古文書（幕末外国関係文書）にて校訂〕

一九〇　水戸中納言殿建白

墨夷御処置ノ儀ニ付、

勅答御書付謹テ拝見仕候、尚又御意之義奉畏候、

勅答ノ趣乍恐御尤ノ義〔御脱カ〕ニ奉存候、実ニ

神州ノ御安危ニ拘リ、不容易事ニ御座候ヘハ、墨夷申立候通ニ而已成行候テハ如何ト心配仕候、扨〔尚又カ〕此上諸夷〔リ脱カ〕ヨ如何様願出候義モ難計、万一願出候迚モ一切為御済無之方御宜敷義ト奉存候、〔乍脱カ〕併公辺ニテモ是迄深御配慮被為在候上之儀〔御脱カ〕ニ候〔其カ〕ヘハ、〔猶更篤ト カ〕猶又厚ク御勘考被為在、〔ハ脱カ〕東照宮思召御継被遊、奉安

叡慮候様被遊候義、肝要之御儀ニ可有御座、　公辺之御為立場柄別テ心配仕候間、不憚忌諱此段奉言上候、以上、

五月　　慶篤

〔水戸藩史料にて校訂〕

一九一　京都守護人体中山忠能外十五名建白

去月二十日衆議之事、

勅答ニ付、岩瀬肥後守・堀田備中守等追々帰府之由、右三家以下衆議之趣言上、

叡慮被為決候迚、彼是時日可相移、夷人談判ノ間自然及異変、摂・播・若州〔舟カ〕并要路ノ近海ヘ軍艦相廻シ候儀難計候間、先達テ備中守（堀田）御返答書之通、早々大禄ノ大名守衛被申候〔付カ〕、人体被

聞食度段、被　仰付候様願度存候事、

四月三日　　中山　忠能

大炊御門　家信

廣幡　忠禮

四辻　公〔續カ〕續

正親町三條

實愛
正親町
實德
甘露寺
愛長
三條西
季知
醍醐
忠順
八條
隆祐
冷泉
爲理
日野
資宗
庭田
重胤
中院
通富
橋本
實麗
野宮
定功

〔大日本古文書（幕末外国関係文書）にて校訂〕

一九二　青木春岱侍医トナル（七月四日幕府日記鈔）

松平駿河守医師
青木春岱

右被召出、奥御医師被仰付、御扶持方三十人扶持被下、

右之者指急御用ニ付、出格之御処置ヲ以テ当人若年寄家来召連御城ヘ罷出、申渡相済候ハヽ、家来指添御城ヘ指出候様ニ可心得事、

一九三　太田備中守辞職セントス

七月十六日以後病ト称シ出テス、書ヲ同僚ニ示シテ曰、外国交易ノ条約開港ノ場所等及規定之処、追々自侭ノミ申立、御不都合ノ廉多ク成行、自然御政道ニ障リ不容易御時節、此上異国御仕置ノ義被仰出方可有之候ニ付テハ、諸家ニ被為命方猶可有之、各方御精意承リ度、外夷ノ事ハ第一

叡念不被為安候程ノ御事故御太切ノ御義、且国主外様ノ内ニモ、外国ヘ具サニ御国体ヲ被見透、残念ノ事ト申者モ有之哉ニ相聞、御政道難立、不服ノ者万一有之節ハ国内平穏ナラス、且又外国人申立候処、御許容難被遊義モ数多有之事故、此上応接不相立節ハ、御手切ノ御挨拶打払被仰出候義モ可有之候処、御連枝御家門并諸大名・御旗本・御家人、其外軽キ者ニ至ル迄、内地混乱不致、御武備不衰、御徳輝之御政道難有、御国恩ニ奉報様ニ被　仰付候上、外夷ノ御処置急度被　仰出可然候、水戸中納言殿御登城御免ノ儀、家老共歎願之趣再応取調申上候処、御許容ノ御沙汰急々無之節ハ、水府国中士民歎願之沙汰、御取調ノ通リ無相違事ニ相聞、人気不穏、且近年外国人舶来ニテ、一体ノ人気ニ拘リ、安意ノ思無之折柄故、前述ノ御事御太切ノ御時節、先以内地御整之義専要ト存候、外国之義是迄各方御談シ申通リ、御法令不相立候テハ御国体ニ拘リ、不肖ノ拙者御役ヲ蒙リ相勤居候段奉恐入候ニ付、此段申上候、以上、

七月十四日　　太田備後守（資始、掛川藩主）

一九四　参考　安政記事鈔（補闕及ヒ正誤）

安政記事（旧幕臣某ノ手記）ト題スル書ニ、水藩受勅ノ始末并返勅ノ議起ルニ及ヒ藩論沸騰セシ詳状ヲ掲ゲタリ、水藩某ノ論中ニ左ノ言アリ、

尾張様ニテハ午七月廿二日勅書御到来ノ処、外山ヘ御隠居御慎ニテ、成瀬（正肥、尾張藩付家老）・竹腰（正富、尾張藩付家老）御側御用人等両三輩ノミニテ、尊封ヲモ切ラス御名宛被為在候段奉申上、御火中御取計ノ上、可然御受被申上候哉ニ承知仕候、又薩州ヘモ同八月廿日頃勅書到来、是ハ中将殿（齊彬）・宰相殿（齊興）両名ニテ御下ケニ相成候処、中将殿ハ其節卒去、隠居宰相殿御請、此月廿六日江戸出立、京都ヘ自分罷出（伏見ノ誤）御請被申上、国許ヘ引取候趣無相違事相聞申候云々、

此言タル水藩某カ返勅ノ事ヲ議シタル語中ニアリテ、且無相違相聞申候云々ト記シアレハ、他ヨリ聞込タル侭ヲ語レルニ過キスシテ、是ヲ以テ尾・薩二藩ニ勅書下リタルノ確証トナスヘカラスト雖モ尾侯ヘ勅命下リシトノ事ハ、本書下文ニ引証セル梅田（源次郎）カ、当時此説アリシコトハ疑フヘキ坪内ニ与ヘシ書翰ニモ見ユ、ニ非ズシテ、正気歌中三名侯トハ薩・尾・水ヲ指シタルコトヲ知レリ、

一九五　参考　水藩及ヒ尾張・薩摩ヘ下賜勅書

先般墨夷仮条約無余儀次第ニテ、於加奈川調印使節（神）ヘ被渡候儀、尚又委細間部下総守被為上京候趣ニ候ヘトモ、先達テ（上京被及言上之趣候得共水戸藩史料）

勅答諸大名衆議被　聞召度被（食）　仰出候詮モ無之、誠ニ皇国重大之儀調印後言上、（之脱カ）　大樹公叡慮御窺ノ御趣意モ不相立、尤勅答ノ次第ニ相背軽卒ノ取計、　大樹公賢明ノ処、有司心得如何ト御不審被　思召候、右様ノ次第ニテハ蛮夷ノ儀ハ暫差置、方今御国内ノ治乱如何ト、殊更深ク（更ニ水戸藩史料）被悩

叡慮候、何卒公武御実情ヲ被尽、御合体永久安全ノ様ニト偏ニ被　思召候処、三家或ハ大老上京被　仰出候処、水戸・尾張両家慎中ノ趣被　聞召、（食）　且亦其余之向（其余宗室水戸藩史料）々モ同様御沙汰ノ由、右ハ何等ノ罪状ニ候哉難計候ヘトモ、柳営羽翼ノ面々、方今外夷追々入津不容易ノ時（御沙汰之由も被聞食及候水戸藩史料）（被脱カ）（衍カ）（当カ）節、既ニ人心之帰向ニモ可相拘、旁被為悩（宸襟水戸藩史料）宸襟候、兼テ三家以下諸大名衆議被　聞召度被（食）　仰出候ハ、全永世安全公武御合体ニテ被安叡慮候様被　思召候儀、外虜計ノ義ニモ無之、内憂有之候テハ、殊更深ク被為悩

宸襟候、彼是国家ノ大事ニ候間、大老・閣老其他三家・両卿・家門・列藩・外様・譜代トモ一同群議評定有之（三卿水戸藩史料）誠忠ノ心ヲ以テ得ト相正シ、国内治平公武御合体愈長久ノ様、　徳川家ヲ扶助有之、内ヲ整外夷ノ侮ヲ不受（御脱カ）（御脱カ）様ニト被　思召候、早々可致商議　勅定候事、（諚）

午八月八日

御別紙　勅諚ノ趣被　仰出候、右ハ国家ノ大事ハ勿論、徳川家御扶助ノ　思召候間、会議有之、御安全之様可有勘考之旨、出格ノ　思召ヲ以被　仰出候間、猶同列之方并両卿家門衆以上隠居ニ至ル迄、列藩ヘモ御趣意相心得様、向々ヘ御達可有之旨被　仰出候、以上、（同列之方々三卿家門之衆水戸藩史料）（列藩一同ニモ水戸藩史料）（候脱カ）（向々ヘモ伝達水戸藩史料）

八月八日

近衛左大臣　忠熙
鷹司右大臣　輔熙
一條内大臣　忠香
三條前内大臣　實萬
二條大納言　齊政

近衞大納言忠房

（水戸藩史料（吉川弘文館）の掲載史料にて校訂）

幕府ニ下レルノ　勅諭モ、大旨此ノ如クナリトイフ、然ルニ幕府ニ下レル者ニハ、公武確執アルニ非ストノ伝奏ノ副翰アリテ、水藩ニ下レル者ニハ之ナキヲ以テ、慶篤（当中納言）モ亦頗ル之ヲ疑ヒ、其処分ヲ二人ニ問フ、蓋シ齊昭幕譴ニヨリテ既ニ老ヲ告ケシト雖モ、藩政多クハ其意ニ決シテ、強項有力ノ臣亦之ニ属セリ、而シテ其幕旨ヲ奉スル藩臣ハ、慶篤ヲ戴キテ齊昭ト説ヲ異ニスルモノ、如シ、故ニ此　勅書ノ下レルハ齊昭能ク其由来ヲ知ルト雖モ、慶篤ハ之ヲ詳ニセス、且　勅ヲ受ケテ之ヲ幕府ニ告ケサレハ、是カ為ニ嫌疑ヲ招カンコトヲ恐レ、サレハトテ之ヲ奉セサレハ違勅ノ責ヲ免レサランコトヲ患フルカ故ニ、資始（太田）・詮勝（間部）ニ向テ此問ヲ発セシナルヘシ、二人乃チ直弼（井伊掃部守、彦根藩主）ト処分ヲ議セント答ヘテ退ケリ、

開国始末ニ曰、今日京都ヨリ飛脚到着、異国ヘ条約調印一条ニ付、御三家大老ノ内上京致候様被仰進候処、上京不致、為御使間部下總守罷登リ候趣ノ処、今以上京不致、異国ヘノ条約何分

叡慮ニ不応トノ趣、厳敷

勅諚之旨被仰下置候、右

勅諚ノ趣ニテハ、迚モ御申解御聞届無之哉ト被存候程ノ御文言ニ候ヘトモ、伝奏衆ヨリ添状有之、右様被仰出候ヘトモ、決シテ御隔意被為在候訳柄ニハ無之旨申来リ候、猶又水戸殿ヨリ御書ヲ以テ

勅命ノ趣モ有之、御為筋申上度候間、同列之内両人罷出候様被仰下候間、此節御慎ノ御方ヘ老中罷越候儀ハ有之間敷事ニ候ヘトモ、

勅命ト承ハリ候テハ、御断申上候事モ難相成候ニ付、自分（太田資始自ラ言フ）下總守同道ニテ罷出候処、中納言殿御逢、綸旨拝見仕候処、老中ヘ被下候ト御同文言ニテ、伝奏衆ヨリノ添状モ無之故、中納言殿ニモ甚御驚如何可致候哉ト御尋ニ付、右

勅諚ノ趣ハ拙者共ヘ被下候ト、御同様ノ御儀奉恐入候、只今右様取計可仕ト申見据モ付不申、誠ニ不容易御儀、此程ヨリ掃部頭モ不快ニテ登城不致候ヘトモ、明日ハ押シテ登城ノ儀申遣、篤ト評議可仕旨申上候処、如何ニモ尤ノ儀自分ニモ深ク心配イタシ候間、何分上ノ御為メ宜敷様取計被呉候様致度、

勅答ノ致方当惑致候間、今日ノ処ニテハ受取同様ノ事

ニ致置候トノ御沙汰ニテ、深ク御案思被為在候　太田資始・宇津木六之丞対話、公用方秘録八月十九日ノ記

一九六　参考　間部詮勝上京延期（開國始末鈔）

二十日詮勝ノ上京ヲ延期スルノ理由ヲ伝奏ニ告ケテ、其事情ヲ陳謝ス、其書ノ略ニ曰ク、

御三家大老之内上京仕候様、先達テ被仰下置奉畏候ヘトモ、無拠訳柄有之、御猶予之儀申上、兼テ被仰付候御使間部下總守近々上京致候段申上置候間、早速発足可仕之処、公方様俄ニ御大病、御内実薨御ニ付、忌服ノ恐レモ御座候間、上京之節旅中ニテ、忌明ノ頃合相考発足可仕ノ心得ニテ踟蹰仕居候儀ニ御座候、中略昨日モ申進候通忌中ニテモ不苦トノ儀ニ候ヘハ、早速上京仕候云々、

一九七　参考　水戸侯・尾州侯登営（督府紀略鈔）

烈公与南山公（慶篤ノ号）及尾公急入請謁不許請面、執政自已至申、時儲君議已定、将以明日立紀公、執政疑三公之意在、儲君乃待其部署已定、徐出見三公、三公責以夷狄盟好之事、且謂汝等以一時苟安之念、壊德川氏数百年之天下可乎、今天子震怒于上、万民憤激于下、内之祖宗之霊与、外之諸侯之議将謂之、何若天地神人俱怒禍延宗社雖万段、汝輩将何辞以謝之、為声色俱厲、執政不能答、伏地辞謝久之曰、是皆備中所為、臣輩始不識也、今已罷備中以謝朝廷、且謝天下、臣輩又将不日西上、以有所陳奏、公等請少寛之、且明日立儲君、其儀重密処分方繁願侯、慶成之後仰聴指揮言畢趨入、三公知言不行而退、越前侯独留論弁、執政不服、侯曰、大事去矣、乃出矣、備中者佐倉侯也、

近史ノ記スル所大抵一様ナルカ、就中督府紀略・尊攘紀事最モ詳ニシテ、最モ事実ニ背ケリ、下ニ引用スル尊攘紀事ノ文ハ、上ニ引用セシ督府紀略ノ文ト、暴徒ノ懐ニセシ素懐痛憤書ノ旨トニ略同シ、惟フニ水藩激徒ノ間ニ伝フル所此ノ如クニシテ、尊攘紀事ハ暴徒ノ書ト督府紀略トヲ襲用シテ、更ニ文飾ヲ加ヘシナルヘシ、而シテ公用秘録ハ之ニ対スル彦藩ノ伝説ナレハ、是等二説ノ真偽ヲ決セントセハ、他ノ伝説ヲ参酌シテ、之ヲ事情ニ照考セサル可カラス、而シテ大久保（一翁）ノ説話ハ、其人ノ出処進退ヲ考フルニ、何レノ党ニモ偏セサルヲ保スヘク、越藩ノ伝説ハ寧ロ水党ノ説ト言フヲ得ヘク、黄粱一夢ノ

説ハ巖瀬震ノ書翰ニ基クトキハ、其彦藩党ニ偏セサルコト論ヲ俟タス（黄粱一夢ノ作者ハ幕府ノ目付ヨリ軍艦奉行ニ進ミタル木村毅ニシテ、此人初メ勘助トイヒ、後ニ摂津守ト称シ、万延元年正月幕使ノ米艦ニ搭シテ合衆国ニ航セシトキ、幕艦咸臨丸ニテ共ニ米国ニ赴キシ者ニシテ今芥舟ト称ス、巖瀬震等ノ友ナリ、黄粱一夢ハ明治十六年、ノ出版ニ係ル、）是等ノ諸説大抵公用秘録（万脱カ）ニ同シケレハ、予ハ本書ニ於テ水藩ノ伝説ヲ捨テ、是等ノ諸説ニ取ラサルコトヲ得ス、但慶永カ彦邸ヨリ帰ルノ途中、急使ヲ水邸ニ遣セシコト、及ヒ齊昭カ掃部頭ニ腹切ラセント大呼セシコト、此二事ハ公用方秘録カ誤伝ヲ其侭掲ケシモノ、如シ、現ニ慶永ノ登営ハ齊昭・慶恕等ニ後レシヲ見レハ、水藩ニ使ヲ遣シテ其登営ヲ促セシニ非サルコト知ルヘク、齊昭等ノ登営スルヤ其意弁論ニ止マリテ、暴ニ相争フニ非レハ、此ノ如ク粗暴ノ言ヲ発スヘキニ非ス、憶フニ当時両党ノ間人心頗ル動キタリシカ故ニ、種々ノ謬伝訛言モアリテ、越ノ藩臣中根靱負カ途上ニ慶永ニ見ヘシヲ、彦人ハ却テ慶永ガ急使ヲ途上ヨリ発セシト思ヒ、殿中坊主等ノ驚キテ言伝ヘシ説ニ拠リテ、齊昭カ此ノ如キ語ヲ発セシト、幕吏并ニ彦人ハ一般ニ思ヒシナルヘシ、世之ヲ推参登城、又ハ殿中ノ大問答ト称シテ、安政年間ノ事ヲ記セル書、皆是ヲ録セサルハナシ、然レトモ一モ其真ヲ伝フル者アラス、而シテ晩出ノ尊攘紀事最其実ヲ失ヘリ、

但慶永ト相見タリシ老中ハ、公用方秘録ニハ久世康周（広）トアリテ、越前ノ伝説ニハ間部詮勝トアリ、今暫ク越前ノ伝説ニ従テ本文ヲ記セリ、

一九八　参考　維新史撮要

七月将軍家定薨ス、是ヨリ先キ勅シテ三家（尾張・紀伊・水戸ヲ三家ト称ス）及ヒ大老ヲ召ス、茲ニ至リ大老井伊直弼等、慶恕・齊昭ノ朝議ニ参センコトヲ恐レ、急ニ慶恕・齊昭・慶永ヲ斥ケ、徳川茂徳ヲシテ慶恕ニ代リ、松平茂昭ヲシテ慶永ニ代ラシム、事了リ奏シテ曰、慶恕・齊昭倶ニ罪アリ、之ヲ禁錮ス、其嗣皆幼弱ナリ、未タ朝議ニ参スルニ足ラス、直弼外務ニ当リ、一日モ江戸ヲ去ルヘカラス、因テ老中間部詮勝ヲシテ西上セシム、請フ諮問ヲ賜ヘ、荷蘭・露西亜ノ旧約ヲ改メ貿易章程ヲ定ム、英吉利船三艘品川ニ来リ、条約二十四条ヲ結ヒ、貿易規程七則ヲ定ム、僧月性死ス、八月将軍家定ヲ葬ル、諡ヲ賜ヒ温恭院ト曰フ、内旨ヲ徳川齊昭ニ賜ヒ、幕府ヲ翼ケ外侮ヲ禦カシム、日（頭）芒（日下部・鵜飼勅書ヲ護シテ東下ス）下部伊三次・鵜飼幸吉其勅書ヲ奉シテ之ヲ水戸ニ致ス、虎狼痢大ニ流行ス、幕府田安慶頼ヲ以テ後見職トナス、

九月権リニ佛国ニ互市ヲ許シ、二十二条ヲ約シ、貿易章程七則ヲ定ム、是ニ至リ英・米・佛・露・蘭条約成ル、之ヲ五国条約ト曰フ、十月間部詮勝京都ニ至ル、疾ト称シテ朝セス、勤王ノ徒小林良典・頼三樹三郎等数十人ヲ逮捕シ、江戸ニ檻致シ、亦其党飯泉喜内等数十人ヲ獄ニ下ス、之ヲ安政義獄ト曰フ、太閤鷹司政通・前内大臣三條實萬ニ逼リ髪ヲ削ラシム、宰相家茂内大臣トナリ、征夷大将軍ニ任ス、詮勝上奏シテ曰、攘夷ノ事幕府固ヨリ命ヲ奉ス、然トモ公武一致ニ非サレハ功ヲ奏スルコト能ハス、故ニ少ク之ヲ緩フセヨ、十一月僧月照海ニ投シテ死ス、十二月家茂尊融親王ヲ幽シ、伊達宗城ニ退隠ヲ命ス、○六年正月日章ノ旗号ヲ定ム、二月山内豊信退隠ス、三月左大臣近衛忠凞・右大臣鷹司輔凞官ヲ辞シ髪ヲ削ル、五月家茂令シテ洋服ヲ禁ス、八月家茂奏シテ関白尚忠ノ禄ヲ増ス、幕府徳川齊昭ヲ水戸ニ禁錮シ、其子慶篤ヲ誚ムルニ、父ノ過ヲ匡救シ、藩士ヲ鎮撫スルコト能ハサルヲ以テス、一橋慶喜ヲ譲メテ退老セシム、山内豊信・太田道醇ヲ幽屏シ、安島帶刀ニ自殺ヲ命シ、鵜飼幸吉ヲ梟首シ、鵜飼吉左衛門・茅根伊豫之介・飯泉喜内・橋本左内・頼三樹三郎ヲ斬ニ処シ、鮎澤伊太夫・小林良典・飯田左馬等十余人ヲ追放ス、梅田源二郎・日下部伊三次已〔頭注〕「梅田・日下部獄中ニ死ス」ニ獄中ニ死ス、勝野豊作曾テ跡ヲ晦マス故ヲ以テ、伊三次・豊作ノ子ヲ流ス、九月家茂蝦夷地ヲ分テ、伊達慶邦・保科容保・南部利剛・佐竹義就・津輕承烈・酒井忠寛ニ与ヘ開墾セシム、十月幕府吉田矩方（虎次郎）ヲ斬ニ処ス、〔頭注〕「吉田間部ヲ刺サントス、橋本書中ニ同説アリ」蓋シ間部詮勝ヲ刺サンコトヲ図ルヲ以テ也、十一月家茂徳川慶篤ニ命シテ勅書ヲ幕府ニ納メシム、○萬延元年庚申正月、外国奉行村垣範正・新見正興等ヲ米国ニ遣ス、蓋シ公使ヲ外国ニ派スルコト是ヨリ始マル、三月佐野光明・有村兼清等十七人、大老井伊直弼ヲ櫻田ニ刺シテ之ヲ殺ス、而テ光明等老中脇坂氏ノ邸ニ至リ上書ス、〔頭注〕「井伊直弼ノ罪状」略ニ曰、井伊中将幼主ヲ挾ミ、私意ヲ恣ニシ、有司ヲ黜陟ス、罪一也、苞苴私謁至ラサル所ナシ、罪二也、幕府羽翼ノ良将ヲ斥ク、罪三也、間部詮勝ヲ遣リ九條殿ヲ詿誤シ、輔弼ノ名卿ヲ退幽ス、罪四也、五夷ノ虚喝ヲ懼レ、擅ニ条約ヲ結フ、罪五也、凡此五罪ハ神人共ニ容レサル所ナリ、某等天ニ代リ誅ヲ行フ、四月幕府一朱二朱貨幣ヲ改鋳ス、六月葡萄牙人ニ通商ヲ許シ、条約二十四条貿易章程九則ヲ定ム、八月徳川齊昭薨ス、謚シテ烈公ト曰フ、家茂皇妹和宮ヲ尚センコトヲ請フ、聴サス、十一月

箱館奉行堀利熙自殺ス、或ハ老中安藤信正ヲ死諫セシナリト云（諫死ノ説真偽ヲ弁セス）、是月和宮降嫁ヲ許サル、十二月家茂村垣範正等ニ教シテ、孛漏生ト条約二十三条ヲ結ヒ、貿易章程九則ヲ定メシム、

一九九　近衛家所蔵書第一

二啓、御端書之趣是又令承知候也、

拝披候、弥以御安全令恐賀候、抑蔵人頭近々補任之儀ニ付、別紙之通各輩可被為推補哉之旨、愚存被尋下之趣令拝承候、先ハ報答迄草々如此候也、恐々謹言、

十月五日　　尚忠〔九条〕

左大臣殿〔近衛忠熙〕

玉机下

二〇〇　仝上第二

尚々、明日ハ不相替御出ノ御事メテ度御待申入候也、

年甫之嘉章目出度忝存候、先々新年益御揃御安全御超歳ニテ、御規式等如嘉例御祝共之御事、目出度祝入存候、当方ニモ不相替賑々敷祝候但御安意可給候、尚々幾千春モ不相替ト祝入存候也、

元日　　忠熙

内大臣殿〔三条実万〕御報奉候

二〇一　仝上第三

封紙

御もふ様人々たそひろう　　敬子

なを〳〵、せつかく時けふ御いとゐあそはし候やうに存上奉候、村岡初御そはの節よろしく御申なかし願上奉候、めて度かしく

中元の御祝儀御めて度申あけまいらせ候、先々御揃被遊、御機嫌よく成らせられ、朝ゆふの御膳等も御ほとよく御手附させられ候御事、御めて度忝くまいらせ候、中元の御しうき相替らす御賑々しく御祝ゐ遊はし候御事、幾久しく万々年御めて度忝くまいらせ候、相替らす中元の御祝儀申上まいらせ候、誠に幾久しく万々年も御長久御はんしやう遊し御めて度、さのみと御祝〳〵申上まいらせ候、まん〳〵年もと、めて度かしく

御もふ様人々たそひろう　敬子

二〇二　仝上第四（薩州本田播磨守申状）

私儀従古来薩摩・大隅・日向三ヶ国社家棟梁職ニ御座候、此度三ヶ国惣大宮司職号勅許之儀相願度、吉田家へ願込置候付、同家ニオイテモ此節取調中ニ御座候、自然右之趣御沙汰御座候へハ、従来御館入仕候儀ニ付、何卒程能御沙汰被成下候様奉願候、尤参殿仕奉願度候へトモ、恒例参殿ノ儀モ献上国産相揃不申、遅引罷成候内、前廉職号願之義此節取調中ニ御座候へハ、先内々貴所様迄願試候間、此段諸大夫中様マテ宜敷内御沙汰ノ程偏ニ奉願候事、

薩州

本田播磨守

二〇三　仝上第五（卽宗院申状）

覚

一東福寺五十世卽宗院開山、剛中玄柔和尚ハ、日州志布施大慈寺開山玉山和尚之弟子ニテ大慈第二世也、玉山和尚ハ東福寺第三世大明國師之弟子ニテ御座候、

一卽心院殿齡岳玄久大禪定門法ヲ剛中和尚ニ御聞被成、自夫禪宗ニ御改宗被成候、剛中之祭文ニ其語相見へ候、

一剛中和尚東福寺入院之後、従齡岳様卽宗院ヲ御建立被成候処ニ、其後致焼失、龍伯様御代当院中奥珊長老旧因縁ノ儀ヲ以、御再建之願申上候処、龍伯様御再建御企之御書被成下、中納言様御代慶長十八年ニ作事致成就候、齡岳様　龍伯様御二方之御牌被為建置候、其後御代々之御牌致安置候、

右之御由緒ニ付、慶長十八年ヨリ毎歳八木(米)七拾石宛被為附置之趣、自伊勢兵部少輔貞昌之書札有之候、

已上、

卽宗院

正徳四年甲午十二月廿五日　菖西堂

二〇四　仝上第六

別紙ニ申上候、

御所様奉始被遊御揃益御機嫌能被為成、恐悦之至奉存

上候、次各様方弥御安全被成御勤仕珍重之御義奉存候、私儀モ御蔭以追々御用向相勤、昨四日年頭御元服御祝儀登城、無滞相勤難有奉存候、明六日管絃、明後七日御暇、来十一日御能之御様子相聞候、最早外御用向モ相済候ニ付、来ル十三四日比ニハ出立ノ積リ御座候、御広敷ヘハ未不罷出、何レ両三日ニハ罷出可申、末日限等モ難相分、右之御注進申上度、宜敷御沙汰可被下候、御一統様御納戸衆始ヘ宜敷被仰入可被下候、

一出立分御内々御沙汰有之候薩州之事、着後早々有馬（礼）相招候処、何カ少々差支有之様子ニ候処、先月廿二日御使相勤候ニ付、其節ニ面会之事申遣置、其節面会之上老女之事得ト申聞候、并昨夏調所笑左衛門上京之節、治我ヘ内談之趣定テ承知之事哉相尋候処、其比笑左衛門トハ掛違不致面会、一向何等之義哉承知不仕、尤溪山（齊宣公）ヨリモ何之沙汰モ無之旨申居候故、荒増ハ様子共申聞、老女・若年寄壱人ツヽ、何分早々ニ附進、一日モ早ク上京有之候様呉々モ申入候処、委細承、猶早速溪山ヘ申聞取計可仕候ヘトモ、右人体之処既御婚礼（郁姫君）之節差登可申之処、其節モ申上候通、三屋敷共無人ニテ無拠御断申上候事ニテ御座候、延引ニ相成候事故、猶人体之処得ト溪山殿ト示談ノ上、猶又逗留中ニ下官迄可申出旨申居候、勿論国元ノ者ニテハ迚モ御間ニ相兼可申間、当地ニテ人体見立候半テハ難相成候間、火急ニハ難相調哉、何分早々申聞取計可仕旨申居候ヘトモ、今日迄ハ何トモ沙汰無之故、何レ出立迄ニ催促可申遣候積リ御座候、何分如何申来候哉難計候ヘトモ、当月末来月ニモ上京ト申義ハ難計哉ト奉存候ヘトモ、何トカ様子承切上京可仕候、昨夏笑左衛門治我ト用之趣溪山殿ヘ被相伺、其節之様子共申聞候様申入置候、定テ間違等之筋モ可有之間、（候脱カ）被相伺可申聞旨申入置候間、上京迄ニハ相分可申哉ト被存候、猶其辺之処ハ上京之上万々可申上候、此間ヨリ可申上ト存候ヘトモ、迚モノ事ニ申来候上ニテ可申上ト見合居、延引仕恐入候、先此段御序之節被仰上置被下候様奉存候、万々上京可申上候、以上、

四月五日　　今大路内藏権頭

齋藤主税頭様
中川山城介様

別紙申上候、弥御安全奉賀候、私儀モ御用向相済、弥来十六日ニハ出立之積罷在候、先便ニ申上候薩州有馬糺ヘ申談置候処、漸昨朝同人旅宿ヘ参致面会候処、過日示談之趣共早速溪山殿ヘ申聞候処、委細承知仕候、乍併先年御婚礼ニモ申上候通、当表三屋敷無人ニ付、其節モ無拠御断申上置候義ニ御座候、此度宮様ヨリモ御内々御噂モ被為在、旁早速人体之処吟味仕候ヘトモ、当時倹約中ニ付三屋敷共至テ無人ニテ能キ人体モ無之、夫故此間早速国元ヘモ申遣吟味被致候、何分早々吟味之上差登可申、乍去遠方之義急々ニハ難相調哉、当秋比ニモ上京致候様相成可申哉、夫迄之処何卒御猶予被成下候様ニ相願度旨申出候、出立之節モ御噂被為在候ニ付、御国之人ニテハ如何可有之哉、折角御差登ニテモ無詮事ニ候間、何卒御当地ニ被勤居候内ニテ、御差登セ有之候様御内々御沙汰モ有之由、段々申入候ヘトモ、此間ヨリモ溪山色々勘弁被致候ヘトモ、無人之上外ニ此度取立候様之者ニテ不都合ニモ有之間、国元ニテモ随分奥向勤候者モ有之、何分両方ノ内ニテ差登候様可仕、遠方之義故延引之義幾重ニモ宜敷御断申上置呉候様申居候、於京都ハ一日モ早ク被附進候様致度候ヘトモ、左様ノ義ニ候ハヽ猶上京之上可申上、如何可有之哉、何分右之趣申上呉候様申候、夫共達テ御急之義ニ候ハヽ、同人迄今一応申越呉候様申居候、扨々火急難相調恐入候、外ニ致方モ無之、何分上京之上可申上、御様子ニ寄又々可申入旨申聞置候、猶上京之上万々委敷可申上候、先荒増申上候間御序之節然ルヘク被仰上可被下候、此段御頼申上候、御一統様御納戸衆ヘモ可然御伝声可被下候、只今下城取込乱筆御免可被下候、以上、

四月十一日　　今大路内蔵権頭

齋藤主税頭様

中川山城介様

以上、郁姫君御結婚ニ関スル書類、

二〇五　仝上第七

水戸烈公戊戌封事

御勝手向ノ儀根本ヨリ御世話被遊、奢侈ノ風御禁シ被遊候儀、当時何ヨリノ御急務ト奉存候所、第一賄賂ヲ御禁シ不被遊候テハ、思召ノ通リ御届キニ相成間敷奉

存候、賄賂ノ儀悪シキト申スハシレタル事ニ候ヘトモ、一寸考候ヘハ、受取マシキ金銀等ヲ受取候故不宜ト存候ヘトモ、夫ノミニハ無之、譬ヘハ御庭内ヘ御茶屋御建可被遊ト被仰付、夫々職人共ヘ申付候ヘハ、一万金ニテ御受合申候職人モ可有之、又ハ二万金ニテ御請合申候職人モ可有之、ソノ時懸リノ御役人賄賂ヲ取候ヘハ、一万金ニテ出来候御普請ヲ、二万金ノ方ヘ申付候様相成候（以下欠失補記スヘシ）

二〇六　仝上第八

蛮夷一件ニ付、段々国忠至誠之趣内々令言上候処、先以叡感之御事ニ候、於
叡慮ハ先頃堀田備中守上京、言上之通ニ相成候テハ実ニ
神国之御瑕瑾被対　大祖皇御始御代々何共無被仰訳且条約通リニ相成候共、行末安穏之見通モ無之候由ニモ　被聞召、諸蛮追々来集シ、巣窟ヲ構、和人ヲ誘ヒ懐ケ邪法ヲ加用候上ハ、実ニ
神国之滅亡ト深被歎　思召候段ハ、同人并本多美濃守ヘモ毎々申入候通之御義ニ候ヘハ、何卒柳営已下役々衆中諸大名已下一同、
叡旨相立、
神国無損失相成候様、幾重ニモ頼被　思召候、其面々真実蛮夷ヲ被退候趣意ニ候ハヽ、誠以
叡願モ　神明ニ相通候義ト、無此上御満足、他ハ少モ御遺念不被為在、御安心之御事ニ候、是迄之枝葉ハ必竟右為国家深被悩
宸襟候ヨリノ御事ニ付、元来之
叡願相立候義ニ候ハヽ、外事ハ御頓着不被遊、関白辞退之一条モ御内意御返答之趣ニ可被出候、唯々国中安全ニテ於諸蛮モ何卒被拒絶候様、幾重ニモ
叡願ニ被為在候、柳営御厚配ハ勿論、夫々不容易義トハ被　思召候ヘトモ、此上偏厚配之程被頼　思召候事、
右御沙汰之上ハ於諸臣モ尤奉遵
叡慮他念無之義ニ候間、可有御安心様存候事、

二〇七　仝上第九　（仝上御結婚ニ関スル書類中ニアリ、何等ノ献立ナリシヤ知ルニ由ナキモ他日考証ノ為メ記シ置ヌ）

御献立

御向皿　鱒
ウト
ツク〳〵シ
二杯酢山葵

御汁　合セ味噌
丸焼豆腐
粒椎茸
沖津鯛薯蕷蒸

御煮物　ワラヒ
ワカメ

御焼物　鯛飴煮

御香之物　スマシ
松露
ハワ生カ

御吸物　キス塩焼
金糸柚

御取肴　アワヒ
百合根
朝鮮饅頭

御□（不明）肴　水栗
香茸

御口取　初昔
上林三入詰

御濃茶

御干菓子　切竹
常盤松
八重梅

御薄茶　別儀

二〇八　仝上第十篤君御方御由緒（天璋院殿）

一御父　右大臣忠凞公
薩摩宰相齊興朝臣女

常興善院殿

一御母　郁君御方興子　薨
実松平故溪山齊宣朝臣女

證常樂院殿

一御祖父　前左大臣基前公　薨
尾張故大納言宗睦卿女

一御祖母　維學心院御方靜子　薨
実松平彈正大弼勝當朝臣女

後豫樂院殿

一御曽祖父　前右大臣經凞公　薨
有栖川故中務卿職カ仁親王女

一御曽祖母　圓臺院宮御方従三位董子女王薨

一御従祖父　大覺寺門跡御隠居　俊心院殿
　　瑜伽定院亮深　薨　　福君御方　逝
一同　奇雲院殿　桂雲院殿
　　甸君御方　逝　　陶君御方　逝
　　實相院故門跡義海　薨　冬雲院殿
　　圓純院殿　　靖君御方　逝
一御従祖姑　峯君御方　逝　大納言忠房卿
　　東本願寺門跡光朗室　　觀如院殿
一同　故前大樹家齊公御台所　一御姉　元君御方（光カ）
　　茂姫君御方　薨　　紀伊故大納言齊彊卿室
一同　寶臺院殿　一同　霊雲院殿
　　享君御方　逝　　早世
　　東本願寺門跡光朗室　至德院殿
　故經熙公御養女実鷹司故准后政熙公女　一同　穀君御方　逝
一同　青霄院殿　一同　雅君御方
　　早世　　一條中納言中將實良卿御縁約
一御姑　常心院殿　一同　備晃院殿
　　姫君御方　逝　　綱君御方
一同　蒙光院殿　　仙臺中將慶壽朝臣室
　　早世　常照院殿

一御弟　早世

孝篤院殿

一同　孝君御方　逝

一乗院起君御方

清雲院殿

一御妹　愛君御方　逝

一同　忠熙公御養女実東本願寺門跡光朗女　靜君御方

廣幡中納言忠禮卿室

一同　信君御方

一御弟　規君御方

有栖川中務卿職仁（織カ）親王爲御実

故内前公御猶子

東本願寺隠居

元上覺院光朗

忠熙公御猶子

東本願寺門跡光勝

故基前公御猶子

廣幡右大将基豐卿

忠熙公御猶子

廣幡中納言忠禮卿

二〇九　伊能友歐略歴

旧宇和島藩国老

故伊能友歐実名永錫（トモ）

文化十四年丁丑十一月十七日生ル、初メ氏ヲ吉見ト称シ、通称ハ元吉、又逞馬、又左膳、又長左衛門、安政戊午ノ獄ニ率連シテヨリ、藩主伊達宗城、伊達ノ能臣ナルヲ以テ氏ヲ伊能ト授ク、通称ヲ松蔭又下野ト改メ、罪ヲ免サレシ際吉見長左衛門ニ復シ、後又伊能下野ト為シ、退隠シテ友歐ト改ム、実名ハ氏就（ナリ）、又永憲（ノリ）、又永弼（タ）、後永錫、実ハ同藩参政中井筑後ノ弟ニシテ、年十三ニシテ吉見氏ニ養ハル、資性才略アリ、言ヲ慎テ漏サス、又己ノ功ニ誇ラス、吉見氏ハ伊達ノ世臣ニシテ、永錫ノ祖父国老ニ登用セラレシヨリ、尓来門葉ノ地位ヲ占ム、世禄ハ三百七石、国老ト為テ三百九十三石ヲ増シ七百石ト為ル、永錫吉見氏ニ養ル、年ヨリ、宗城ノ父宗紀ノ扈従トナリ、天保五年十月宗城ノ祖父村壽ノ扈従ニ転シ、同七年四月宗城ノ附トナリ、江戸ニ陪従ス、同八年五月宗城ニ従テ国ニ就キ、宗城ノ嗣子宗徳ノ附トナル、同十一年三月養父長左衛門退隠ス

ルヲ以テ家ヲ続ク、四月宗紀ニ江戸ニ陪従シ、増長寺火之番出役ヲ勤ム、爾来国事ニ係ル事蹟ノ略ヲ左ニ叙ス、

天保十一年十二月　仙洞（光格天皇）崩御ノ際、京都ニ使シ香典ヲ献シ、謹テ宗紀カ　朝廷ヲ尊フノ微志ヲ徴ス、

同十二年五月、宗紀ニ陪シ国ニ就キ、近習役トナリ、次テ扈従頭助トナリ、宗徳ニ附シ転翼ノ事ニ任ス、

同十四年、目付兼軍使ニ転シ藩政ヲ整理ス、

弘化元年、宗紀老シ、宗城襲クニ及テ其信任ヲ受ケ、密議ニ参シ有志ノ諸藩ニ密使シ、高野長英ノ獄ヲ脱スルヤ、〔頭注〕〔高野長英脱獄〕

宗城ハ島津齊彬ト謀リ、藩医富澤大眠ノ門弟トナシ、名ヲ伊東瑞溪ト変テ之ヲ宇和島ニ潜シメ、又水戸藩ノ変ニ徳川齊昭ノ依托ヲ受ケ、姦党ノ機密ヲ探知セル僕アリ、後日ノ証左ナルヲ以テ、菊地爲三郎之ヲ護テ宇和島ニ潜シムル等ノ機密ハ、国老松根圖書・桑折長愿及永錫ノ外之ヲ識ル者ナシ、而シテ永錫専ラ庇蔭ニ尽力ス、故ニ高野・菊池ト宗城トノ間ニ言ヲ通スルハ、必永錫ノ手ヲ経サルナシ、

同三年、宗城ニ従テ江戸ニ至リ、浅草火ノ番出役ヲ勤ム、

同四年、宗城ニ従テ国ニ就キ、扈従頭鎗奉ト為ル、〔行脱カ〕

嘉永二年五月、持筒頭ト為ル、

同三年三月、宗城ニ従テ江戸ニ至ル、

同四年、宗城ノ密示ヲ受ケ、国事ヲ探ル為ニ江戸ニ留リ、宗紀ニ附テ目付・門支配・奥年寄・元〆ヲ兼ヌ、

同五年、宗城ノ江戸ニ着スルニ及テ国ニ帰ル、

同六年、用人格トナル、此年亜米利加船来ルヲ聞キ、憂慮措ナシ、

安政元年三月、宗城ニ従テ江戸ニ役ス、途次窃ニ小田原ヨリ旅装ヲ商人体ニ改メ、双刀ヲ船底ニ隠シ、豆州下田ニ至リ夷情ヲ探ル、実ニ吉田松陰カ縛ニ就ク前二日ナリ、

四月四日江戸ニ着シ、亜夷ノ居動傍若無人ノ景況ヲ宗城ニ告ク、爾来島津齊彬・徳川齊昭・松平慶永・山内豊信等ノ間ニ宗城ノ密使ヲ担任シ、交ヲ有志ニ広メ、宗城ノ耳目ト為リ、専ラ外国ノ事情ヲ探ル、后チ浅草火ノ番出役ヲ勤ム、

同三年、宗城ノ江戸ニ着スルニ及テ国ニ帰リ、参政ト為リ、会計ヲ整理シ意ヲ海防ニ用ユ、

同五年、宗城ニ従テ江戸ニ至リ、浅草火之番出役タリ、

是時ニ当リ有志ノ論ハ、慶喜ヲ西丸ニ建テ　皇武ヲ和スルニ傾ク、而シテ先眼ノ者ハ隠然開港ニ傾キ、草莽ノ者

ハ専ラ攘夷ヲ主張ス、宗城ハ松平慶永・山内豐信等ト既ニ攘夷ノ不可ヲ識ルモ、陽ニハ攘夷ヲ唱ヘ、京師ノ許可ヲ得サレハ幕府ニテ開港ヲ専断スヘカラスト主張シ、幕吏ノ姦物ヲ除キ、慶喜ヲ西丸ニ建テ　皇武ヲ和スル外他策ナキヲ察シ、永錫ヲシテ有志諸侯及草莽有志者ノ間ニ密使シ事ヲ謀ラシム、永錫其志ヲ体シ、昼夜奔走尽力シ、日下部伊三治（頭注「日下部、橋本、安島、茅根」）・橋本左内・安島帶刀・茅根伊豫之助等ト尤親ミ、互ニ憂憤尽力、一身ヲ　王事ニ擲ツ、宗城カ松平慶永・山内豐信ト謀リ、德川慶勝ヲ説キテ幕府ヲ動サントスルニ及テ、一見シテ心事ヲ説ントスルモ面会ヲ拒マル、依テ永錫ヲシテ安嶋ニ説テ尾張ノ有志者ニ之ヲ謀ラシム、永錫之ヲ安嶋ニ告レハ答書アリ、

御細書之趣逐一拝読、如命連日之濛雨退屈仕候、弥御勇健珍重奉至賀候、扨尾邸へ御扞駕之義御初テ之義ニ付、竹腰へ為御含ニ相成候処、ザット是迄御由緒モ無之、当節嫌疑モ有之候ニ付御断、シカシ角筈之御手寄ニテ御面無御伏臓トノ御事ニ付、福井公ヘモ御相談相成候処、何分御書通ニテハ御行違ノ義モ難計、何卒御直話之方ト被仰進候ヘトモ、又々端ヲ御改、推テ説客ニヒトシク御申立モ御好不被遊候処、彼任藏（校）ヘ申談、尾藩有志之知己ヘ周旋為致、尾公ヨリ被仰進候様ニハ相成間敷哉云々、御示諭之趣委細承知仕候、至極御尤ノ義ニ奉存候、何レ同人ヘ相謀候様可致候処、已ニ此方ニテモ御出之御左右御延引ヲ不審イタシ、昨夜尾藩有志ヲ以テ田宮ノ方ヲ為承候処、田曰ク、此節御嫌疑モ有之、御逢之義ハ御迷惑トノ思召ニテ、竹腰迄御沙汰ニ相成候間、今程龍土（伊達邸）ニテモ御承知ニ相成候半ト申候ヨシ、又其節ノ咄ニ御続柄ニモ有之、追々御出モ御座候義故、常盤橋公（越前邸）ニ候ヘハ御嫌疑モ無之、宜トノ趣ヲ申候ヨリ、其節一有志ヨリ左様ナラハ、貴君ニテ龍土公ヘ御出ハ相成間敷哉ト尋候ヘハ、ヤハリ嫌疑ニ渉リ候間、此節罷出兼候ト申候ヨシ、最初長谷川某ヨリハ御承知ノ通リノ通シ合モ有之、只今ニ至リ右様ノ次第、尚田一有志ヘノ答等ヲ勘考イタシ候ヘハ、貴諭モ御座候通リ何分難解、田ナル者不好処ヨリ右様ニハ無之哉ト被疑申候、任藏事モ田ニ逢度ト申込候処、ヤハリ嫌疑有之候辺断候ヨシ、右様ノ都合ニ御座候テハ、彼ノ輩ノ周旋ニテ尾公ヨリ被仰進候様出来候義、何分安心致不申候、如貴諭閣中御場合等、尾公ヘ御禁言ハ御尤至極、是非御斟酌ニテ御説得御処

置御賢慮被為在候様奉願候、将又昨夜田ノ口気前文ノ趣ニテ、何分御逢ノ義御六ヶ敷ト相察候ニ付、御手紙前福藩中根迄一書相遣云々ノ趣ニ付テハ、龍土辺モ御六ヶ敷候ニ付、御迷惑ニテモ御抂ニ相成、福公ニテ御出御座候様、他ハ暫ク指置一御眼目之一ヶ条ヲ篤ト御熟談、朔日御登城ニハ是非老閣迄御建白御座候様、尤モ無之候テハ勢切迫ニ相見候間、機会ヲ失候程難計旨モ申遣、尚御行違ニ相成候テモ不宜候間、尊藩ヘ御打合御座候上トノ義モ申遣候事ニ候ヘキ、此段ヨロシク御含ニテ可然御取成置ニ仕度、貴酬旁乱筆不文御推覧可被下候、頓首、

（雪江）

元

五月廿六日（安政五年）

尚愚考候ニ、尾公ヨリ御起リ御逢ト申義ハ、何分御六ヶ敷ト奉存候ヘハ、御書ヨリ外被為在間敷、福公ニテ抂テモ御出ニ相成、尊公ニテハ御書ニテ被仰進、御両様ニ相成候ヘハ可御宜哉トモ奉存候、中根ヘモ申遣候処朔日御登城之砌、御別方様ヘハ容易ニ決議不相成様之御建言ヲ御賢考ニテ、尾公ヘ被仰進候様仕度ト奉願候、イカヽ可有御座候哉、

安嶋拝

吉見様

貴酬御直披

右ノ事情ナルヲ以テ事行レス、慶永ハ訪問シ、宗城ヨリハ書翰ヲ以テ事ヲ謀ルニ至レリ、后チ徳川齊昭カ献議改正ノ件モ、永錫ハ安嶋ニ談シテ無事ニ其意ヲ達セリ、六月下旬ニ及テ慶喜ノ件破レ、家茂西丸ニ建ツ、七月上旬徳川齊昭・同慶勝・一橋慶喜・松平慶永ハ譴ヲ蒙ル、宗城ハ山内豊信ト憂慮憤慨、永錫亦憂歎、益奔走シ京師ニ至テ謀ル所アラントスルモ、嫌疑甚シク遂ニ日下部ヲシテ往カシムルコトニ決ス、其冬有志ノ藩臣及草莽ノ徒悉ク縛セラレ、永錫モ十一月廿一日捕ラレ、訊問ヲ受ケ藩邸ニ命シテ幽セラル、廿三日宗城ハ論旨退隠ス、爾来永錫ハ宗城ノ罪ヲ一身ニ引受ケ、死ヲ決シテ幕命ヲ待テ謹慎ス、之ヨリ嚮キ訊問所ヨリ呼出ノ達アルヤ、幕吏即刻来テ寓居ヲ探ル、永錫ノ僕機敏急ニ書類ヲ隠シ、遂ニ之ヲ焼ク、故ニ幕吏一ノ証左ヲ得スシテ帰ル、其后訊問数回ナルモ、他ノ有志ヲ庇蔭シ、宗城ヲ弥縫シ一モ漏スコトナカリシニ、日下部伊三次ニ与ル書翰ヲ証トセラル、翌年二月二十六日山内豊信亦宗城ト同ク論旨退隠トナリ、其十月廿七日永錫罪ニ処セラル、

請証文

一私儀兼テ懇意ニ致シ候日下部伊三次ヨリ御養君之儀ニ付、主人存寄ヲモ承込候趣ヲ以、問合候儀有之候トモ、右ハ不容易儀取合申間敷所、彼是及談判、殊其后於主人ハ右御事柄ヲ此上存寄候筋無之、一已ニ取候テハ猶更携間敷儀ト乍弁、伊三次ヨリ御模様柄治定ノ儀承合候節ニ至リ、今更事実ノ心底申聞、仝人存意ヲ催(摧カ)キ候テハ猶又種々議論相立、主家迄モ悪様ニ可申成哉ト存候迚、西城云々ノ噂見聞ヲ尽シ候処云々、イマタ頼ノ縄ノ切果ト申場合トモ申間敷抔、不軽儀ヲ認書通オヨヒ候段、右ヲ一時ノ心得違トノ申分ハ難取用、且同家来国詰ノモノトモヘモ、不取留時勢ノ風聞等認及書通候、始末旁不届ニ付、重追放被仰渡候、

但御構場所徘徊イタス間敷段被仰渡候、

右被仰渡之趣奉承知候、仍御請書如件、

伊達遠江守家来

安政六年十月廿七日　　吉見長左衛門

御構場所

武蔵　相模　上野　下野　安房

上総　下総　常陸　山城　攝津

和泉　大和　肥前　東海道筋　木曾路筋

甲斐　駿河

右ノ場所徘徊スヘカラサルモノ也、

是ノ時ニ当リ宗城ノ父宗紀(后春山ト改ム)ハ井伊大老ニ重セラレ、且親戚ノ間柄ヲ以テ幕政機密ノ顧問ヲ受ルコトモ少カラス、故ニ慶喜ヲ建ルノ議及条約調印ノ如キモ、一時宗城父子ノ説ニ傾カントスルノ意アリシニ、遂ニ老中カ一橋ヲ建レハ水戸ノ勢力ヲ増シ、我輩遺類ナキノ説ト殿中婦人ノ説ニ勝ヲ制セラレテ、断然紀伊ヲ建ルノ説ニ変シ、条約調印ハ岩瀬等専断シテ之ヲ行フカ如ク、大老ノ意見モ行レサルコト過半、然レトモ当時ノ首座ナルヲ以テ、其政令ハ悉ク其所為ニ帰ス、宗城嘗テ曰ク、戊午ノ秋条約調印ヲ謝スル為ニ何故京都ニ往サルヤト大老ニ問フ、大老曰ク、老中和セス、互ニ間者ヲ容レ居レハ、若シ江戸ヲ離ルレハ政略一変シ、地位ヲ保ツ能ハスシテ素志ヲ果ス可ラス、故ニ止ムヲ得ス間部ヲ往カシムルコトニセリト答ヘシトソ、其証ノ一二ヲ挙ケンニ、大老ノ宗城父子ニ贈レル書状アリ、

拝誦候、弥御勇勝奉賀候、昨夕ハ御出種々御示教ニ預

リ千万辱、不成外御懇意故、極密ノ義迄相洩シ候段ハ小子カ多罪不過之候、努々御他言御断申入候、右ニ付御細書ノ旨至極ノ御論感服仕候、且又三條ヨリ土州ヘノ来書内々御廻シ一覧致候、同所ニハ尤左様可有義ト推察致居候、則返上御落手希上候、猶御申越ノ一儀ハ昨夕御厚談ニ及候次第ニテ、天道マカセト御申之義御尤ニ存候、其余一々貴答ニ不及、略御報御海容希上候、恐々頓首、

五月十四日

御端書中略 御役中都テ文通仕兼候ヘトモ、御近親殊ニ御懇意ニ候ヘハ、御返事及候段御含、御覧後早々御投火希上候、以上、

右封書ノ表ニ御返事秘中之秘トアリ

大暑之節弥御安清奉賀候、昨日ハ早朝ヨリ御扦駕被下、不相替御厚情之程千万辱奉存候、然ハ今日惣出仕之儀御内話申厳敷申談シ、今日御参詣伺済ニ候ヘトモ、延引小子ヨリ相願可申、是非トモ今日惣出仕之義申張、一旦ノ処同意ニテ左様可相成之処、又々例ノ横槍カ入リ、種々ノ指企等申出シ、多分其説ヘ同シ、又々不行心外ノ至リニ候、此段御内々御咄申候、猶又明廿一日ハ御暇不時御礼是モ延シ候テ宜敷事、然ルニ衆議廿二日惣出仕ト相定申候、御尋ノ申廉モ通シノ振ニ取調、小子カ意トハ丸々違候間、夫モ段々討論致候ヘトモ、伊印（松平伊賀守ヲ云）妙々ニ申成シ、備印（堀田備中守ヲ云）モ慢心ニテ実ニ頼ミニ不相成、御役人モ多分同之力ニ及不申候ヘトモ、御厚意御申述ニ相成候テ宜敷訳ニハ可到ト奉存候、只々何事モ小子カ不行届故、御都合悪ク相成候段恐縮ノ至リ候、何分行末全キ御奉公モ（覚カ）挙束ナク、実以心痛仕候、御賢察ノ程幾重ニモ希上候、頓首、

六月廿日　　比子根

宇和島様

極内々用

弥御安清奉賀候、過日ハ御扦駕段々御懇情辱奉存候、兼テ御内話ノ佐印（堀田）・伊印モ何分其侭ニ指置難キ時宜ニ相成、昨夕ヨリ引込ニ相成申候、尤伊印ハ申迄モ無之、佐印ノ義ハ御申越ノ次第モ有之、先跡廻リ（黜斥ヲ云）ニ可致ト心配致候ヘトモ、段々ノ御沙汰モ御尤ノ義ニ候間、一緒ノ御取計ニ相成申候、且又異人ノ

取扱等モ有之候ヘトモ、当人実病ノ節ハ不得已事、人ヲモカヘ可申義、旁此節ニテモ御同然御指問ハ有間敷、入道様ヘモ左様候義宜シキ様被仰候御事ニ候、只管上ノ御為方而已心配イタシ、上慮ヲ以取計候義ニ候ヘトモ、素ヨリ不肖ノ私如何様人口ニ懸リ可申モ難計、兼テノ御懇意此処御含置希上候、且又惣出仕モ生憎御不人ニテ、達方等不都合モ可有哉心配イタシ候、其上案外早々ノ調印小子モアキレ申候、何分致方モナキ次第ニ相成、達シ振不行届大ニ心配イタシ候、何分々々貴君ノ御忠等ヲ力ニ致相勤候事ニ候、先ハ右内々御吹聴旁如斯候、乍末入道様ヘモ宜敷御伝声希上候、委細ハ拝顔ノ上万々申上候、大乱筆早々頓首、

跡ハ御投火

比子根

六月廿二日

宇和島様

内用御返事不及候

拝読候、弥御勇猛奉珍賀候、然ハ今日云々ノ御仰渡ノ趣甚以愚文、素ヨリ御事柄ト申迚モ十分ニハ参リ難ク候処、案外ノ御紙面ニ預リ汗顔ノ至リ候、只々繁雑手間取リ候ニハ無御退屈御迷惑ト存候、如論京師ヘモ不取扱ノ処宿次ニテ被仰上、猶近々所司代ニ遣候トモ、別段ノ上使被差立候共、何レ急度御廉付不申テハ成不申候、明日ハ是非御取極メ発シ可申心得ニ候、桐印（松平伊賀守ヲ云）云々ハ全ク小子カ所為ニハ無之、只々時節到来不得止事次第ニ候、跡ノ処モ御心添御尤至極、実以御大事ニ有之候間、種々論判致候ヘトモ、何分思ハ敷人代モ無之、此節柄御急キニ付、先々両三輩明日ハ御用召ニ相成候、委細明日可申上候、明夕御出ノ義承知仕候、最早明日ノ処ハ御留守居御差出ニ及不申候、猶又丹波（平岡カ土岐乎、考フルニ平岡ナラム）儀転役目出度存候、右ニ付御丁寧ニ御申越シ痛入候、小子カ存意（マヽ）ニハ無之、衆目之見処少モ御斟酌ニハ及不申、何卒々々精忠ヲ被尽候様御伝声下略

六月廿二夜

拝見仕候、弥御安清奉賀候、不相替御懇情之御教示ニ預リ辱、大ニ心得ト相成候、扨昨日ハ尾州殿、水戸前中納言殿営中ヘ御推参、越前迄モ御連被成、此度調印ノ義ニ付私初閣老中ヘ御逢、厳敷御談シニ相成、殊ニ

寄テハ上ヘモ御対顔御願可被成勢ニテ、夫ハ漸々御留申事ニ候、猶又御両卿方ニモ御登城、一昨日昨日ト両日御逢有之、是モ不軽御勢ニ候、尤田安殿ニハ至極御為方ヲ思召候事御尤ニ存候、素ヨリ調印之儀ハ大不出来ト申モノ、京師ヘ早々御使被差立候筈ノ事間部下総守相勤申候、将又兼テ御養君様御発之義、十八・廿三・廿五日ノ内ト御極リニ相成候事ニテ、道中川支モ有之延着イタシ候間、今廿五ノ御極ニ相成候、右之調方ハ御不都合モ有之候間、是亦御延シニ相成候様ニト、御三家方厳敷被仰候得共、最早被仰出ニモ相成候事、右様被仰候トテ御延シト申様ニモ参リ難ク、矢張今日御発ノ事ニ相成候、右ハ第一越前ノ尻押強ク、昨朝モ屋敷ヘ越前参リ厳敷此事申聞候間、志ハ尤ニ候ヘトモ、今更左様ニモ相成難ク段申置候、夫ヨリ御城ニテモ大和守（久世）ヘ又々申聞候趣、何分唯今御延シニ相成候テハ、却テ御不都合出来眼前之義、京師迄モ御伺済ノ義ニ付、今日被仰出候事ニ候、乍去不成穏御時節柄ニ付、惣出仕御礼等ハ延ニ相成候テモ可然上意モ有之、御尤ニ候間、申談候心得ニ候、兼テ貴君ニハ内外ノ義モ御承知ノ事ニ付、此上表方人気立申間敷哉御考被下、遠江守殿ヘモ御相談可然御取計希上候、猶又老公・尾州殿・越前ナト目指候所ハ皆々小子一人、昨日ノ処ニテハ、ナンラモ小子ヲ取テ落シ候趣ハ頭レ居候、上ノ御為ト相成候事ナレハ、身ハ捨候テモ不苦候ヘトモ、右等ノ人々ノ為ニオトサレ候テハ心外ノ至リ、只今乍憚小子退キ候テハ如何相成可申哉、其辺モ兼々貴君遠江殿ニハ厚ク御憐察被下候儀、是全ク上之御為故之事ニ付、何卒々々御辺ノ処急ニ可迫候次第甚以危急ニ候間、此上ノ御芳志ニ右之防方等御相談希上候事ニ候、実ニ昨日営中ノ有様不穏次第御察希上候、サシ急キ乱筆申上候、早々頓首、

右ニ付今日退出ヘ御出被下候様ニハ相成間敷哉、退出遅ク候間七ツ過ニ御出ニテ宜敷奉存候、呉々モ希上候、以上、

掃部頭

伊伊與入道様

右ノ如キ間柄ナルヲ以テ、大老ハ宗紀ヲ信シ、挙テ閣老ト為ントスルノ風説アルニ至ル、徳川齊昭等譴ヲ蒙ル後ハ、宗紀ハ宗城ノ身ニ及テ伊達氏ノ瑕瑾トナルヲ思ヒ、数々大老ニ至テ後事ヲ謀ル、大老モ亦弥縫ニ尽力シ、遂

ニ大老ヨリ諭旨シテ退隠セシムルニ至ル、故ニ永錫ノ処分ノ如キモ、事ヲ宗城ニ及サンメスシテ軽典ニ処セラレシモ、猶重追放トナレリ、若シ宗紀ト大老トノ間ニ此ノ如キ事情ナカリセハ、橋本・安島等ト共ニ骨原（小塚原ノ刑場ヲ云）ノ露ト消ルノ価アルハ、事跡ニ徴シテ明ナリ、

其十一月宗城ノ子宗徳ハ其忠実ヲ察シ、其家ヲ断絶セシメスシテ、養子英次郎ニ氏ヲ伊能ト改シメテ家ヲ継シメ、三百七石ヲ与フ、永錫ハ十二月二十五日宇和島ニ帰リ村落ニ屏居ス、

翌萬延元年幕府ヘハ所在不分明ト届置キ、氏名ヲ伊能下野ト改メ、密ニ参政ニ任用シ、藩政ヲ整理セシム、

文久二年十一月罪ヲ免サル、

申渡

伊達遠江守元家来

吉見長左衛門

行衛不知身寄無之ニ付

同家来

志村庄次郎

右長左衛門儀、先達テ不届有之、重追放申付置候処、京都ヨリ被仰出候厚御趣意モ有之候ニ付、此度御免被仰付、然ル処行衛不分ニ付其方ヘ申渡ス間難有可奉存、尤此以後行衛相分次第右御免之段可申聞、

右

伊達遠江守家来

柘植萬作

右ハ水野和泉守殿依御差図申渡間、得其意主人ヘ可申聞、

戌十一月

右ニ付讃岐国丸龜ニ於テ発見シ、放免ヲ申渡セシト幕府ヘ届出、氏名ヲ旧名吉見長左衛門ニ復シ、再ヒ戸主トナリ、養子英次郎ハ嫡子タラシム、然レトモ其氏ヲ改シメシ主意ハ一身ノ栄ナリト思量シ、更ニ請テ又伊能下野ト改ム、

三年正月、宗城　勅命ヲ蒙テ京都ニ在リ、時ニ攘夷期限ノ論盛ニ起ル、宗城其間ニ奔走尽力シ、永錫ヲ呼テ其議ニ参セシム、永錫至リテ諸有志ニ旧交ヲ温メ、新交ヲ結ヒ奔走尽力スル所アリ、四月宗城ト共ニ国ニ帰ル、五月時勢急務用掛ト為ル、其職ハ専ラニ国事応急ノ事ヲ司リ、時事ヲ探リ、会計ヲ整ヘ、兵食ヲ足シ、藩ノ機ニ応シ運動スルニ差支ナカラシム、

元治元年十月、長州征討ノ際宗徳ノ参謀トナリ、国境ニ出陣シ、僧晦巖ヲシテ徳山ニ開城帰順ヲ説シメ、内談既ニ纏リ、清水・飛彈等数十人ヲ密ニ徳山ニ潜伏セシメ、宗徳ノ徳山ニ着スレハ、徳山侯ハ直ニ開城帰順シテ、宗徳ヲ城ニ入レ、清水等ハ起テ質ヲ取ルノ謀成リ、清水等既ニ渡航シ、宗徳ノ渡航一両日ノ中ニ迫リシニ、尾張総督ヨリ解兵ヲ令シテ事遂ニ止ム、

慶應二年六月、再ヒ長征ノ参謀トナリ、国境ニ出陣スルモ、英吉利ノ軍艦パアクスヲ乗テ宇和島ニ来ルヲ以テ永錫ヲ召還、其事ヲ処弁セシム、永錫信義ヲ以テ之ヲ待チ、親交ヲ厚シテ国体ヲ辱メス、

明治元年正月、着座トナル、着座ハ座席執政ニ次ク者ナリ、十二月執政松根圖書・櫻田數馬等ノ京都及江戸ニ在テ、箱館出兵ノ期ニ後レテ譴ヲ蒙ルヤ、永錫ヲシテ急ニ京師ニ往テ之ヲ処理セシム、永錫能ク　朝命ヲ遵奉、機敏事ヲ処シ藩声ヲ墜サス、其四月国ニ帰ル、五月執政ト為ル、同三年七月退隠ス、

同八年四月三十日、病テ家ニ没ス、其時ニ功ヲ賞シ物ヲ与フ、枚挙ス可ラス、其　国ノ為ニ尽力シテ戊午ノ獄（安政五年）ニ万死ヲ脱シ、爾来宇和島ニ在リ、会計ヲ整理シ、数々難局ニ当テ宇和島藩カ　勤王ノ精神ヲ徹セシムルニ、宗城カ外ニ在テ尽力シテ内顧ノ憂ナカラシムルハ、宗徳カ内ニ在テ兵食ヲ足シ、人心ヲ鎮メ、方向ヲ定ムルノ力ニヨルト雖モ、永錫カ能ク難局ヲ処スルノ力与テ力アリ、嚮ニ高野長英ヲ潜伏セシメテ外国ノ事情ヲ聞キ、後村田藏六ノ宇和島ニ投スルヤ、永錫亦庇蔭保護シテ兵制ヲ聞キ、宇和島ニ於テ宗城ヲ輔翼シ、　王事ニ尽ス者永錫ヲ初トス、爾来風ヲ聞テ興起スル者亦少カラス、

二一〇　大政一変セサレハ外国ト交ヲナスコト能ハス

安政五年ノ春ヨリ夏ニ至リテ天下益騒然、幕府措置ニ苦ミ、各藩ニハ有志勃興シ、物議擾々帰着ノ途ナシ、中原尚介江戸ニ在リテ予テ奉命ノ趣モアリシ故、幕府及ヒ各藩ノ情状、外夷ノ挙動等詳ニ江夏十郎ヘ報知致シ、江夏之ヲ入　尊覧、公反復御覧、　御憂歎之　御様子顕レ、御沙汰之趣、此様内外ノ混雑一時差起リタル上ハ、断然天下ノ政事ヲ一変シ、第一人心ヲ纏メ、本ヲ据ヘ、而シテ外国処分ノ方向ヲ変セサレハ、皇威ヲ外国ニ輝スコト能ハサルヘシ、天下ノ政事一変

ノコトハ昨年下国前ヨリ決心シタリ、此上ハ急ヒテ事ヲナスニアリトノ御言ナリシニ、江夏言上シケルハ、天下ノ政事一変トノ　御言ハ寛猛ノ二ツニ極リタル欤ト存ス、其御手順ハ如何ント上申セシニ、其事ナリ、昨春迄ハ成ルヘク寛ナルヲ主トシタルモ、兎角変シテ猛ヲ先ンスルニ外ナシ、此上ハ　京都ノ御都合ヲ窺ヒ、叡慮ノ在ル処ヲ諸大名ニ知ラシメ、人心一致臨機ノ処分ニ外ナシ、遠カラス決心ノ次第申聞ル時来ルヘシト、大ニ御案シノ御様子ニ被窺タリト、江夏ニモ甚タ心配シ、右之趣窃ニ清水源兵衛・磯永喜之助等ヘ申聞ケタリト、之レ安政五年戊午六月末頃ノ事ナリシト、

二一一　幕府海軍創設ノ布達〔安政四年〕

大目付ヘ

海軍御取建ニ付、今般築地講武場御構内ニ於テ、御軍艦教授所御開、和蘭陀ヨリ献上之蒸気船〔観光丸〕ニテ操練相始候間、御旗本・御家人（司カ）并悴厄介等ニ至迄、有志之輩罷出、真実ニ修行被致候、委細之儀ハ、御目付（尚志）永井玄蕃頭ヘ可被承合候、且亦万石以上以下（陪）倍臣之儀モ、主人々格別見込之者ハ、稽古御差許相成候間、是亦玄蕃頭ヘ申立候様可被致候、

（其主人主人之格別見込之者〔薩藩史料斉彬公〕）

右之趣向々ヘ可被相触候、

〔安政四年閏五月十一日、老中達〕

閏五月

別紙之通従　公義被　仰渡候条、組中支配中ヘ不洩様可被申渡者也、

六月晦日　　御家老座印

〔薩藩史料斉彬公（東大史料編纂所所蔵）にて校訂〕

二一二　鉄鋳四文銭通用布令〔安政四年〕

今般箱館表ニ於テ鉄銭鋳立被仰付、文字ハ箱館通寶ト相記、箱館・蝦夷・松前ニ限リ此節通用之筈候、尤右三ケ所之外通用不相成段従　公義被仰渡候条、向々ヘ可通達候、〔閏五月四日〕

閏五月　　御家老座印

二一三　士族所有禄高売買価格制限令

一上通之高場壱石ニ付、代銭三拾四貫文（今時ノ金価ニ比シテ凡ソ三円四五拾銭ニ当ル）

一中右同　　代銭三拾弐貫文

一下右同　　代銭三拾貫文

右ハ給地高之儀夫々分限ニ応シ、高上リ（所有ノ制限リ

ヲ云）等ノ御格式被定置、御軍役可致手当事候ニ付、猥ニ売買有之間敷儀ニ候処、無拠売片付、又ハ取納借（年々ノ納額抵当ヲ云）可致儀モ可有之候ニ付、高場所上中下之位分ヲ以テ、上位弐拾弐貫文、中下之儀ハ弐貫文下ニテ、以来右之通高直段被相定候条、向後御定直段外ニ祝儀（物）者代等之名目ニテ、内密之致取引候儀屹ト不相成候、右ニ付テハ見聞ヲモ掛置候ニ付、以来御法違ノ儀共於有之テハ、高并売代銀取揚双方共ニ可及沙汰候、尤高譲渡候ハ高場所書付郡方ヘ差出、高下之位相記、張紙ニ座印相渡置候通可相心得候、此旨高奉行・郡奉行ヘ申渡、向々ヘモ不洩様可致通達候、

但取納借之儀モ夫々高上被究置候通、過上有之間敷候、左候テ上中下高壱石ニ付、弐貫下リニテ致引結候儀共、是亦去ル戊年（嘉永三庚戌年）申渡置候通可相心得候、

四月　下總島津久徴　登島津久包
駿河島津久仰　伊織桃山久成

二一四　尾・水・越三侯退隠謹慎上奏書

七月六日台命ト称シテ、尾張中納言殿（徳川慶恕、名古屋藩主）・松平越前守殿（慶永、福井藩主）ヲ退隠セシメテ謹慎ヲ命シ、水戸老公（徳川斉昭）ヲモ同ク謹慎セシメテ駒籠（駒込）ノ邸ニ移シ、一橋刑部卿殿（徳川慶喜）ノ登営ヲ留メ、水戸中納言殿ニモ謹慎ヲ命シテ、京都ヘハ左ノ勅答ヲ上ラレタリ、

六月廿一日奉書ヲ以テ言上ノ（昨夢紀事参照）儀ニ付、御三家並大老ノ内早々上京可有之様被遊度、此旨被仰進候段叡慮ノ趣御領掌被遊候、然処御三家之内尾張中納言殿（尾張殿）・水戸前中納言殿ニハ、不束ノ事共被在之、隠居之上（ハ脱カ）、下屋敷ニ居住、急度慎罷在（水戸脱カ）前中納言ニモ下屋敷ニ居住、急度慎罷在（等脱カ）候様被仰出、水戸中納言殿ニモ慎罷在、其外ハ若輩ノ仁体ニ付、イツレモ上京難被仰付（候脱カ）、大老井伊掃部頭儀ハ、御守護御警衛向一体ノ取締為取調、兼テ上京被仰付候御含モ被為在候折柄、旁以早速上京被仰付度思召候、然処魯・亜・英三国ノ船（魯亜両国「天」）神奈川・品川ヘ入津、猶英・佛ノ軍艦数十艘追々渡来可致趣ニモ相聞、当務諸般引請罷在候間、暫時御猶予（「当節之要務」天）ノ儀被仰進度候、尤廿一日言上之儀ニ付テハ、問部下總守為御使上京被仰付、委細之事柄言上候様去月廿六日被仰出、酒井若狭守儀モ差急罷登候筈ニ候間、先ツ下總守被差登ニテ可有之候間、委細之事柄御垂問被為

在候様被遊度思召候、此段両卿御心得候テ、宜被達叡聞候様被遊度候事、

〔大日本古文書（幕末外国関係文書）にて校訂〕

右ノ勅答ヲ捧ケ置キ、英国使節ノ談判ニハ水野筑後守・永井玄蕃頭・井上信濃守・堀織部正・岩瀬肥後守・津田半三郎ヲ委員トシテ応接セシメ、七月十二日露国使節ノ登営ニハ未タ将軍家ノ喪ヲ発セサルヲ以テ、慶福君将軍家ニ代リテ謁見ノ礼ヲ行ハセ、七月十八日ニハ英国トノ談判ヲ終リテ条約書ニ調印シ、同ク二十日ヲ以テコレヲ公示シ、八月二日ニハ将軍家ノ御病気ヲ披露シ、同ク八日薨去ノ旨ヲ布告シ、将軍家ノ御遺命ト称シテ、田安大納言殿慶頼卿ヲ慶福君ノ後見トシタリ、然ルニ京都ノ形勢ハ益々烈シキ有様ニテ、此日水戸家江勅諚ヲゾ下ダサレタリ、抑モ幕府ハ既ニ水戸老公ヲ謹慎セシメタレトモ、尚ホ京都ニ通シテ計画ヲ施サル、事モヤアラント気支ヒテ、高松・守山・府中ノ三支藩ニ命シテ駒籠（駒カ）ノ邸ヲ警固セシメ、又尾州ノ竹腰兵部少輔・紀州ノ水野土佐守ヲ以テ水戸ノ藩政ヲ監督セシメ、視察頗ル厳密ナリシカレトモ、水府党ト其派ノ公卿トノ憤激ハ益々熱度ヲ加ヘテ、遂ニ勅諚ノ御沙汰トハナリタリ、事ノ此ニ至レルハ畢竟幕府カ前ニハ勅命ヲ奉セスシテ、米国ト仮条約ヲ結ヒ、次ニハ三家若クハ大老ヲ召サセタルニ、是ヲモ其命ヲ奉セスシテ、京都ヲ激シ奉レルコト再応ニ渡リタルカ故ナリト雖トモ、抑モ京都ヨリ斯ル大事ノ勅命ヲ諸藩ヘ下サセラル、事ハ、未タ曽テ有ラサルノ例ナリ、然ルヲ敢テ此ノ御沙汰ニ及ハセタルハ如何ト尋ヌレハ、当時水戸ノ領地多賀郡櫻井村ニ寓居セシ日下部伊三次（頭芒）〔日下部伊三次上京云云〕トイヘル薩州ノ侍カ、窃ニ京都ニ上リテ諸有志ト共ニ周旋セシ中ニ、水藩ヲ称揚シテ大事ヲ託スルニ足ルヘシト、語タルヨリ起リシ事トソ知ラレタル、賜勅始末ニ云ク、諸藩有志ノ徒西上セシ中ニ、薩藩日下部伊三次ナル者アリ、曰ク、吾素ヨリ三條公ヲ知ル、公大老ト縁アリ、公ヲシテ大老ニ諭シ、罪ヲ謝シ、自ラ退カシムル欤、然ラサレハ尾・水・越三侯ヲ宥スル欤、三ツノ者其一ヲ成ント意気頗ル慷慨セリ、始メ伊三次（頭芒）〔日下部伊三次履歴ノ概要〕故アリ、水戸ニ生レ、久シク水戸ニ在リ、藩士ト相識ル者多シ、西上スルニ及テ安嶋帯刀・荻清右衛門・鮎澤伊太夫・加志村準蔵・木村三穂介ノ徒ト市店ニ餞宴ス、途ニ安中ニ泊シ、其藩山田三郎ト相識ルヲ以テ、其意ヲ告テ去ルト云フ、他日余（著者鈴木大氏）帯刀ト談、伊三次ノ事ニ及フ、帯刀曰ク、伊三次人ヲシテ来リ、告テ曰ク、急ニ面謁ヲ請フ、然レトモ願クハ邸外ニ

謁セント、乃チ出テ之ニ会セシニ、其餞宴席ニ招カレシナリ、抔盤狼藉審ニ其真情ヲ聴カス、彼何ノ計ヲ以テ目的ヲ達セント欲スルヤト、伊三次既ニ京師ニ至ル、薩藩伊地知龍右衛門（正治君）・西郷吉兵衛（隆盛）其他来リ寓スル者多シ、曰ク、薩侯以為ク、幕府ノ為ス所正理ニ乖戻シ、皇国ノ為メニ非ス、黙視ス可ラスト、因テ議シテ曰ク、参覲ノ期九月ニ在リ、然ルニ八月初旬ヲ以テ国ヲ発シ、精兵三千ヲ率ヒ大坂ニ着シ、勅命ヲ得テ直ニ入朝、京師ヲ護シ、而後幕府ヲシテ叡旨ヲ奉セシメント議既ニ決シ、処分既ニ定ル、日々侯上途ノ報ヲ待ツノミ、子ノ輩徒労ヲ為スコト勿レト、伊三次驚喜啻ナラス、共ニ淹留セリ、是ヨリ先キ伊三次京師ニ在リ、相識ル者多シ、徒然ノ余互ニ往来ス、故ニ其来ルヲ知ル者多シ、七月下旬（二十四日朝）（頭注「寄輸甲第　号参看、近衛家秘書第　号・第　号参看、吉井友実紀事参看、宮嶋誠一郎紀事参看、石室秘稿参看」）（頭注「斉彬公兵ヲ率ヒテ上京セントス、寄輸甲第　号参看」）（頭注「斉彬公訃音」）薩ノ飛報アリ、京師有志ノ士争テ其報ヲ問フ、曰ク、本月八日侯少ク病アリ、然ルニ病勢益進ミ、十六日卒去セシト（斉彬公ノ卒去ハ七月廿日ニ、在ルカ如シ（十六日曉天））、人皆之ヲ聞テ愕然タリ、事既ニ去ル、為ス所ヲ知ラス、或ハ伊三次ニ就テ江戸ノ事情ヲ問フモノアリ、伊三次云フ、水戸ノ気勢頗ル事ヲ為スニ足ルアリト、於是勅書ヲ水戸ニ下シ、力ヲ尽サシムヘシトノ議起ルト云フ（高橋多一郎口話）、八月五日主上深ク叡旨ヲ悩マサレ、曰ク、（頭注「寄輸甲第　号参看」）朕天下ノ形勢如是ナルヲ傍観ス、此レ皇座ヲ汚スナリ、祖宗ヘ対シ奉リ恐懼シテ措ク所ヲ知ラスト、乃チ勅使ヲ伊勢ニ発シテ神宮ニ其由ヲ告ケ、皇位ヲ避ケ給ハントス、三公諸卿争テ之ヲ止ム、主上聴給ハス、且曰ク、然則国ノ為メ計アリヤ、皆曰ク、外ニナスヘキモノナシ、唯一事アリ、勅書ヲ水戸ヘ下シ且ツ有志ノ諸侯ニ命シ、共ニ力ヲ尽サシメハ、或ハ又国勢ヲ挽回スルコトモアラン欤、高座ヲ下ラセ給フ事ハ是事ノ成否ヲ待セラル可シト、主上之ヲ許ス、於是水戸邸ノ留主居鵜飼吉左衛門ヲ召シ、其旨ヲ命セリ（鮎沢伊太夫口話）、同八日吉左衛門子幸吉ヲシテ勅ヲ奉シテ江戸ニ赴カシム、諸藩有志ノ徒モ亦皆東下シテ、是事ヲ周旋セントス、於是伊三次モ江戸ニ帰レリ、伊三次余ニ語テ云、京師ノ議ニ曰ク、勅書ヲ以テ水戸ヨリ幕府ノ罪ヲ責メハ、大老必ス罪ヲ謝シテ退クヘシ、其機ニ際シ将軍宣下ヲ一橋公ニ下シ、紀公ハ官位ヲ進メ元ノ如ク儲弐タラシムヘシ、且ツ水戸ノ力足ラサルコト有ンカ為ニ、勅ヲ水戸ヨリ諸藩ニ回示シ、諸藩皆水戸ニ左袒セハ、大老傲且暴ナリト雖勢ヒ退カサルヲ得サルヘシト、始メ西郷吉兵衛伊三次ノ為ス所ヲ見テ之ヲ殆シトス、昼夜馳ルコト五十四時（四日半）、江戸ニ来リ、

安島帶刀ヲ見テ曰ク、足下何ソ伊三次ノ輩ヲ以テ京師ニ〔頭注〕「日下部ヲ見テ難詰ス」周旋セシムルヤ、必ス大事ヲ誤ラント告ルニ其事ヲ以テス、帶刀驚テ曰ク、我カ命スル所ニ非ス、吉兵衛曰ク、〔頭注〕「実歴史談参看」然則其為ス所ヲ格止セント直ニ馳テ去ル、復タ五十四時ニシテ京師ニ反ル、其前日既ニ出テ之ヲ止ムルコト能ハストソ茅根伊予介口話、按スルニ賜勅ノ事吉兵衛既ニ之ヲ殆シトス、水戸ノ事情ヲ知ル者ヲシテ京師ニ在ラシメハ、必ス別ニ之ヲ処スル所アラン、吉左衛門水戸藩ト称スト雖、実ハ京師ノ人水戸ノ籍ニ入ル者ニシテ、素ヨリ水戸ノ事情ヲ知ラス、是ノ進退アル所以ナリト記セリ、左レハ此ノ賜勅一件ハ水戸ノ重役モ関係セス、有識者モコレヲ危ミタルヲ知ルヘシト雖トモ、綸言一タヒ出テ復タ返ラサルノ場合ニテ、鵜飼幸吉ハ八月十六日ノ夜、小石川ノ水戸邸ニ着シテ勅書ヲ中納言殿ニ捧ケ奉レリ、其勅文ニ云〔頭注〕「勅書水戸邸ニ達ス」ク、

○以下の文書は、本文第一九五号文書（安政五年八月八日付孝明天皇御趣意書および御沙汰書）と同文重複により略す。

二一五　近衛左大臣墨夷約条調印違勅ノ旨演達

墨夷等調印之儀ニ付被悩叡慮、先達テ勅諚モ被為在候処、調判致候（印カ）段益被悩宸襟候、実以徳川家而已ナラス天下ノ御一大事ニ有之、是迄水戸・尾張・越前等ニテ精忠被尽候段ハ、弥御満足ニ被思召候、然処違勅之儀（深カ）（追々脱カ）不容易被思召候ニ付、此度之叡慮之趣屹ト相立、徳川家之御輔助有之度、雖為慎中無御斟酌、厚被為尽奉安（精忠脱カ）宸襟候様可被致候（行カ）旨、被仰含候事、

（水戸藩史料にて校訂）

右ノ如ク水戸家ヘ勅サセラレ、尚又尾張・越前・加賀・薩摩・肥後（熊本ハ幕府ニ密告シタルノ説アリ、本書ニ記シタル誤レリ）・筑前・安藝・長門・備前・阿波・土佐ノ十三藩ヘ水戸家ニ力ヲ合セテ、叡旨貫徹スヘキ旨ヲ勅シ玉ハセケルカ、越前・薩州・長州・土州・備前ノ五藩ハ命ヲ奉シタレトモ、其他ハ或ハコレヲ幕府ニ告ケ、或ハ黙シテ答ヘ奉ラス、中ニモ尾州ノ家老鈴木丹波守ハ開封タニモセスシテ火中ニ投シ（竹腰兵部少輔ト、イヘルハ誤ナリ）主君ニ告ケサリシトハ聞ヘシ、水戸家ニテモ幕府ヲ補助スヘシトノ勅旨タル以上ハ、先以テ幕府ニ告サルヘカラストノ衆議ニテ、翌十七日老中ヲ其邸ニ招キタルニ、十八日ハ将軍家ノ御葬送ニテ繁用ナレハ参リ難シトテ来ラス、十九日ニ至リテ太田・間部ノ両閣老水戸殿ニ来リタレハ、中納言殿ハ勅書ヲ示サレ、且ツ列藩ニ回示スルノ可否ヲ問レタルニ、大老ト協議ノ上ニテ御答ニ及フヘシトテ、其日ハ退出シ

翌日再ヒ来リテ評議未タ決セサレハ、諸侯ヘ示サル、事ハ姑ク見合サルヘシ、ト告タル但数日ヲ経レトモ、何ノ沙汰モナカリケレハ、中納言殿ハ頻ニコレヲ促カサレタルニ、二十四日ニ至リテ、御家門ニ限リテ示サル、ハ苦シカラストノ旨ヲ書面ニテ沙汰シタリケレハ、即日其手続ニ及ヒタレトモ、外様諸侯ヘハ未タ幕府ノ許可ヲ得サルヲ以テ示サレサリキ、水戸ノ有志ハ斯テハ時機ヲ誤ルヘシトテ、〔山内豊信〕松平土佐守殿・〔宗城〕伊達遠江守殿ヲ水戸邸ニ請テ、〔頭注〕「伊達宗城・松平慶永親話記参看」「久木山行達親話記参照」中納言殿ヲ輔ケ参ラセント謀リタレトモ、遠江守殿ハ来ラレス、土佐守殿ハ規格ノ為ニ妨ケラレテ、危速ノ間ニ合ヒ難キヲ以テ、徒ラニ時参ヲ送リタリ、是ヨリ先キ掃部頭殿ハ間部下総守殿ヲ上京セシメテ、条約調印ノ事情ヲ奏聞セシメントテ、既ニ上京ヲ命セラレタレトモ、将軍家薨去ニ付忌服ノ畏アルヲ以テ、上京ヲ見合サレケルカ、八月廿二日長野主膳ヨリ申越セシ趣ニハ、去ル七日九條関白ノ参朝アラサルニ乗シテ、鷹司・近衛等ノ諸卿俄ニ朝議ヲ決シテ、幕府及ヒ水戸家ヘ勅旨ヲ下サセラレタリ、九條殿モ間部公ノ上京ヲ待テ、コレニ応スルノ謀ヲ為ント欲シ玉フナレハ、御忌服中タリトモ、早々上京セシメラルヘシト報シ、〔開国始末ニ拠ル〕同キ廿七日酒井若狭守殿ヨリハ、水戸家ヘ下サレタル勅旨ハ水戸ヨリ来リタル者ノ手ヨリ請ヒ奉レルカ如シトアリテ、如何ニモ忽ニ為シ置キ難キノ形勢ナリト思ハレタレハ、急キ下総守殿ヲ上京セシムル事ニ決シ、同キ廿八日太田・間部ノ両閣老ヲ水戸殿ヘ遣ハシテ、下総守ハ先キニ上京ノ仰ヲ蒙リナカラ今日マテ延引シタルハ、将軍家ノ大喪ニ際シテ憚リタルカ故ナリト雖トモ、最早不日上京シテ、条約調印ノ事情ヲ奏聞シ奉ルヘシ、〔頭注〕「幕府勅書廻達抑止ス」且又水戸家ヘ下サレタル勅書ハ甚タ怪ムヘキ所アレハ、諸侯ニ示サル、コトハ必ラス見合サルヘシトノ趣意ニテ、中納言殿ヲ説伏セ、夫ヨリ上京ノ支度ヲ為シテ、九月三日ニ江戸ヲ発シテ中山道ヨリ上ラレタリ、是時諸藩有志ノ徒ハ頻ニ勅書回示ノ事ヲ臨シテ、議論紛々タリケレハ、安嶋帯刀・茅根伊豫介等ハ、〔用脱カ〕閣老ノ言ヲスシテ諸侯ニ示スヘシト中納言殿ニ勧メテ、評議已ニ一決シタルニ、中納言殿ハ心中尚ホ安カラサル所ヤアリケン、再ヒ側用人桑原治兵衛ニ謀ラレタルニ、治兵衛ハ其事然ルヘシトモ思ハレス、元来勅旨ハ幕府ヲ輔翼スヘシトイフニ在ルニ、閣老ノ言ヲ用ヒスシテ諸侯ニ示ス時ハ、恐クハ不測ノ害ヲ引出スヘシトテコレヲ止メタリ、衆議ハ又々一変シテ如何ニモ治兵衛ノ説モ一理

アリ、今ヤ諸藩ノ形勢ヲ見ルニ、未タ事ヲ為スニ足ルモノアリトモ見ヘス、然ルヲ前後ヲ顧スシテ勅書ヲ示シ、幕府ノ譴責ヲ受テ大難ヲ生スル時ハ、總州ノ上京ニ依テ異変アリトモ、復タ力ヲ尽スコトヲ得サルヘシ、想フニ京都ノ形勢此ノ如ク盛ンナレハ、總州モ必ス狼狽スヘキニ付、暫ク国力ヲ養ヒ、後日ノ模様ヲ見ルヘシトテ、諸侯ニ示サヾル事ニ決シタリ、

二一六　日下部伊三次堀仲右衛門（左）ニ与ル書（水戸徳川家所蔵）

前略、野生事九朝発云々、晏中ヨリ一書呈候ヒキ、定テ御入掌被下候事ト奉察候、其後仙蹊無滞、去ル十九夜桂枝ヘ登挙、二十日水邸鵜飼氏ヘ相尋、模様相分リ、夫ヨリ　参殿之富織可相尋被存候処、東ヘ内命ニテ微行、留守カノヨシ失望候処、諸大夫之内丹羽某忠正ノヨシ承リ、ソハ先年公ヨリ拝領品伝達之事有之、旁以幸ト鵜氏ヨリ書中問合モラヒ候処大悦、昨念一届之上ニテ出張、於或方得対話事情委細陳説仕候処、○ニモ実ニ深ク御配慮被為在、既ニ富氏モ御差下シ云々、野生迄モ御尋之ヨシ候ヘ共、居所不相分空敷帰桂ニ相成候折柄ニ付、早速言上為致トノ事ニテ相分レ、今日ハ鵜氏ヘ之書中○（鵜飼父子ナラン）ニモ甚御大慶ニテ御逢モ可被下置候、暮天迄ニ富氏宅ヘ罷出、案内受候様ニト御申越御座候、依テ後刻何レ詳ニ建白可相成、御模様ハ追便可申上候、

一道中日々早飛之上下（幕府ノ急報）見受申候、当表ニテ承リ候得ハ、

九殿（二十七）ヘ諺（彦根）ヨリ節々輪ヌケ早報到来之ヨシ、

一六月念七、去ル十九日墨夷ヘ調印之儀奏聞ニ付、

御逆鱗被為在候処、太・九両殿（太閤及ヒ九條ヲ云）（廣司政通・九条尚忠）是ハ尤ノ次第ト御取成ニ付、益　御逆鱗、此上ハ御三家并御大老ノ内、上京可被仰付外無之ト被仰候外御沙汰無之ヨシ、然ル処七月十二日夜間・泉・内三閣ヨリ奉書禁裏附ヘ到着、五夜ノ御一条云々相分リ、是ハ雲上誠ニ御当惑被遊候御事之由、御尤至極奉恐入候御儀奉存候、尤　大樹公御脚気御衝心之御事モ被仰越候欤之由、此儀虚実未詳也、然シ近殿ヘハ御早ク御分リニ相成候由承リ伝候、

一七月十八日六角氏到着、御養君之儀奏聞、且従二位権大納言兼右大将御願、是ハ其通相済候ヨシ、但即日御

（頭芒「三浦・藤田・水野・宇都木・島田往復書参照」）

（頭芒「宸翰甲第号・第号参看、近衛家秘書第号参看、東久世伯日記参看、近衛家奥表日記参看」）

（間部下総守・松平和泉守・内藤紀伊守）

暇、十九、廿日休息、念一発駕之筈承及、将先例ハ拝〔頭注〕「宸翰中第弓参看」天顔、其後御饗応有之来候処、今般ハ　出御無之、御饗応モ無之ヨシ、如何様ノ首尾カ未相分リ不申候、一参○ヨリ再三諗ヘ御内書被遣候得共、更ニ一報モ不呈、比々ト九殿ヘノミ往復有之間、○甚御憤リ之由、扨拝謁之上ハ例之御内談之一条極言可仕ト奉存候、雲上ヘ御序宜敷奉願候為、吉見・小南両氏ヘ御序宜敷奉希候、是又発前之御模様モ言上可仕、何分機会可然御周旋可被下候、

後略、

七月廿二日　　鶴澤拝（日下部伊三次雅名）

輔理盟兄（堀仲左衛〔門脱カ〕雅名）

仝上第二

先書申上候通リ、十九夜到着、念日（二十）雨海ヲ訪ヒ模様承候テ、二十一日丹羽豐州ヘ得寛話、同夕此人ヨリ言上、廿二日来書、薄暮ヨリ登殿ニテ寛々拝謁、事情詳陳仕候処、是迄夫々時情モ相響候得共真偽混雑、別シテ五日云々、深ク御配慮被為在候折柄、委細相分リ大ニ力ヲ得云々、廿三日両氏周旋ニテ阿野少将殿ヘ拝謁、是ハ　参公之庶流彼八十九卿中傑出之御方ニテ、是又暮六半時ヨリ八時迄寛々委細陳情仕候、然ル処既ニ此日先ツ両氏ヨリ承リ候廉ヲ以、　参公ヘ建白イタシ置候間、尚又明日御逢可被遊トノ御事御伝達ニ付、則廿四日参上之処前日之事其外廉々委細御尋、且誠ニ秘々之御咄モ有之難有奉存候、後略、

一条約調印一条、先月念七　上聞ニ付、念九エイリヨ（叡慮）之御旨ヲ以、御三家・大老之内是非上桂候様被仰出候処、右ハ多分四日比着候筈、然ルニ暴発之事、万一右ヲ防キ奉リ候策ニ御座候哉、御請ノ奉呈ニハサンケ（三家）ハ不束之儀有之ニ付云々被仰付候故為差登兼候、大老ハ魯・諳・佛三夷舶渡来応接中ニ付、暫ク御猶予可被下、其内間部為差登候間、先ツ何事モ是ヘ可被仰聞ト申上候由、依之朝廷ニモ誠ニ一旦御当惑被遊候由、然シ亦畏クモエイリヨ（仝上）ハ益赫然御盛ニ被為入候間、必々挽回之期亦不遠ト奉視察候、此儀御含ニテ諸公　エイリヨ不孤様ニト、御奉行御周旋奉祈候、将乍恐直丈（勅諚）云々必至建白、参公ニハ先ツ尤ト被仰下、夫ニ付又富

田ヲシテ委敷御詰問被成下、直丈出候ハヽ、諸藩一致上下合体シテ可被行見込有之哉ト被仰付、方今御三〇ハ不及申上、　当〇・土・遠三藩之儀、右ハ別テ慥成儀ヲ申上置候、此儀乍憚能々御含御周旋可被下候、

一九関（九條関白）不除候テハ、迚モ大道通シ兼候半ト、此儀桂枝之第一策ト御座候御模様ニ御座候、廣橋モ甚不宜様子ニ有之間、客（閣）之上桂ヲ待居申候、

七月念五（二七）

仝前ノ名　　仝前

扨貴書云々条件一領承、夫々取計可申候、　御三家大老ヘ云々ハ無相違六ノ念九、

（頭注）「宸翰甲第　号参看」念七例之宿次相違シ、大ニ御逆鱗中一日過候テ此日発、

御発ッ別紙之通御座候処、夫ナリニ致候事可悪事ニ御座候、是又違　直（勅）ノ一罪増シ、彦（彦根）ヨリ九関（九條）ヘワイロ、是又無相違比々ト御直書往復有之候、　参公ヨリモ再三彦ヘ御諭書被遣候所、一報無之ニ付大ニ御憤被為入候事奉存候、越公（越前）之御赤心云々、巨氏ヘ申聞承知仕居候旨宜敷申上候、尤此藩于今奉待　直命致処置云々御尤之儀奉存候、然シ別紙ニモ申上候通リ、若直出候上ニテモ当侯（水戸）ハ幕徳ニ安ンシ、家中モ夫ヲ悦候、要路多候ハヽ、大切ノ直命モ孤ニ相成候様ニハ有之間敷哉、此儀再三御詰問有之候間、先ツ野生丈ニハ御受合申上候得共、弥此儀御見込急々被仰下候様仕度奉存候、

一大社モ愈念一御発駕之旨、是ハ誠ニ大賀、早々　参公ヘモ可奉入　御内聴候、定テ御満悦ト奉存候、実ニ此程ハ乍恐天朝モ御当惑被遊候テ、唯々内外列侯ノ忠義ハ如何ト御内々御案シ被遊候事ニ御座候、西・伊両氏（西郷及ヒ伊地知龍右衛門）エ今夕ハ面晤ト存候処、如何ニモ烈風雨、伏水マテ参リ雨休云々、

天下之大機会云々、　直命云々、必再興ノ気運モ到来不可疑ト奉存候、必至尽力可仕候、御模様分リ次第神速可申上候、其表之御事情時々相伺候、伊氏ト同帰之事承知、何モ大社ヘ拝謁、後桂枝之御程合次第ニ可仕候、云々、

一勝野（勝野豊作）モ念二巨要ヘ着、

七月念七（二十七）

二一七　齊彬公伊達藍山公ニ与ル書

○この文書は、本文第一四一号文書と同文重複により略す。

二一八　参考　安政紀事鈔

六月朔日

将軍養嗣ノ事ヲ発シ、堀田備中守以下御用掛トナル、西丸ノ事ハ既ニ紀州ニ決ス、然レトモ外廷有司ノ沸騰ヲ慮リ、陽ニハ一橋ヲ擁立スルト称シ、欺テ衆心鎮ス、以テ公論ノ一橋ニ傾クコト知ルベキ也云々、以下略、

二一九　京都大火（非蔵人日記鈔）

一六月四日午刻許南方有火（頭注）「近衛家日記及ヒ東久世伯日記参照」、諏訪町・松原下町火勢益々盛、而火走縦横、東本願寺炎上、其余至東南焼亡、北風限（凡カ）松原或萬壽寺通、南限七條鹽小路、東限柳馬場或高瀬川筋、西限新町、数千戸焼失、到翌朝卯刻過鎮火、

一就出火伺御機嫌、王公方御一列有御使、諸家同列馳参書付上之、

一同事入夜、関白（九條尚忠）殿・左大臣殿（近衛忠熙）・内大臣殿・二條大納言殿（齊敬）・近衛大納言殿（忠房）・九條大納言殿（道孝）・左衛門督殿等御参、

二二〇　参考　福井・土州・宇和島三侯、一橋公ヲ儲嗣センコトヲ密奏ス

六月四日

京師ニ奏ス、旧例将軍ノ嗣子ヲ立ル、皆決シテ而後ニ上奏ス、朝廷賀辞ヲ賜フノミ（芽出度ノ三字ナリシト云）、松平越前守、松平土佐守・伊達遠江守ト謀テ書ヲ三條内府（実カ）ニ致シ、特ニ勅ヲ下シテ一橋ヲ立ンコトヲ奏請セシム、關東ノ奏ヲ待ズシテ朝廷勅ヲ下シテ一橋ヲ立ルヲ請フ也、内府近衛殿ト謀リテ上奏ス、九條関白之ヲ沮ム、議（行脱カ）ハレス、云々、

二二一　参考　小笠原長門守ヲ京都町奉行ニ任ス

六月五日

京町奉行浅野和泉守（長祐）ヲ召ス、大目付トセントス、伊賀守（松平）一意ヲ以テ之ヲヤメ、小普請奉行トナス、御小姓竹中長門守先手頭ニ転ス、直言ノ士ナリ、浦賀奉行小笠原長門守ヲ以テ（カ）、京町奉行トス、後日京囚ヲ捕フル者此

人トス（齊彬公福井侯ニ送ル書中ニ此事ヲ記ス、参照）、此頃賀州井伊ト和セス、互ニ異論アリ、賀州ノ初メ井伊ヲ薦メシハ己レガ上京ヲ避クルガ為ナリト、後日将ニ井伊・堀田ヲ除キテ己レ独リ政権ヲ専ラニシ、兄ノ子酒井雅樂頭ヲ以テ大老トセントス、伊賀ハ酒井氏ノ子出テ、松平氏ヲ嗣クガ故ナリ、久世（大和守広周、関宿藩主）ハ称病出デス、井伊ハ堀田ノ京事ヲ誤ルヲ以テ自ラ上京セントス、家臣等固ク諫ム、脇坂（安宅）ヲヤラントス、脇坂窮乏ヲ以テ辞ス、因テ酒井修理太夫ヲ新ニ命シテ所司代トナシ、之ヲシテ京師ニ上奏セシメントスル也、後別ニ松平肥後守（容保、会津藩主）ニ命スルニ決ス、未タ発セス、云云、

二二二　井伊直弼間部下總守ニ与ル書（公用方秘録鈔）

六月十二日

間部下總守様へ御自翰被進、六之丞（宇都木）御使相勤、御逢可有之間篤ト御談申帰リ候様被仰付候、

但御側役ヲ以御自翰差出候処、程ナク御逢有之、今日仮条約約定相済候処、　天朝ヨリ被仰進候御次第ハ御尤之御儀ニハ御座候得共、今更違約モ難相成、此後被喰込不申様御取締致方モ無之思召、夫ニ付天朝ヘノ御使ハ酒井若狭守被遣候テハ如何哉之旨御内意申上候処、御尤之御儀今更条約取縮候テハ不宜ニ付、一旦仮条約差免シ置、追テ本国ヘ此方ヨリ使者差越シ、迷惑之筋ハ及掛合候方可然、御使ハ京地功者之事ニモ有之、若州ニテ可然旨御返答有之、

二二三　参考　皇女降誕（非蔵人日記抄）

六月十四日

（頭注）「近衛家日記、全奥日記参照」（右府公脱カ）

皇女御降誕、為恐悦左府公・帥宮・内府公・德大寺前内府公・三條前内府公・二條大納言殿・九條大納言殿・近衛大納言殿・中納言中将殿・左衛門督殿・鷹司三位中将殿等御参、自余御不参有御使、

一諸家参賀、晩頭書付上之、同列同之、

一姫宮御七夜依御潔斎中二十八日被仰出之旨、議奏衆被申渡、令壁書了、

一来二十八日姫宮御七夜ニ付、当日　禁中　准后御方姫宮ハ御本殿殿下等江可有参賀、於重服者翌日可有参賀之旨、奉行日野殿被申渡、令壁書了、

一御誕辰ニ付、小豆・餅・土器・小串干鱧・塩貝・香物

・焼豆腐等両番所江被出（但以壱台兼之）、小豆・餅・干鱧・香物等壱台端番所江被出、如毎年、

二二四　主上宸翰ヲ伊勢・加茂・石清水ノ三社ニ納国家安泰ヲ祈リ玉フ

六月十七日

〔頭注「宸翰第　号・全第　号・全第　号・全第　号・秘書第　号」〕宸筆ノ宣命ヲ伊勢・加茂・石清水ニ上リ、幣使ノ発シテヨリ御膳ヲ廃セラレ、飲食ヲ絶チ玉フコト七昼夜、清涼殿廷ニ出テ、遙拝アラセラル、三條内府其玉体ヲ損シ奉ランコトヲ恐レテ之ヲ諫ム、上曰〔頭注〕〔近衛家日記・全奥日記、昨夢紀事第　巻参看〕ク、二千五百年来国体儼然、朕世ニ当リテ始テ之ヲ辱シム、何ノ面目カ祖宗ニ対セン、躬ヲ顧ミルニ遑マアラズト、内府感泣シテ退ク、此奏（条約調印）ノ至ルニ及ンテ逆鱗甚シ、云々、

二二五　参考　英・佛二国艦隊来港予報（公用方秘録抄）

六月十八日

一左之御書付御持帰リ、

去ル十三日、下田湊ヘ亜墨利加国之蒸気船二艘入津（昨脱カ）致候、（ンカ）同所滞留之官吏乗組、右船一艘十七日小柴沖ヘ入津致、（候脱カ）魯西亜船モ一艘一昨十六日下田ヘ渡来、引続入津可致趣相聞候、且又英吉利・佛蘭西モ近々江戸近海ヘ渡来可致哉之由申立候間、為心得相達候、（大日本古文書（幕末外国関係文書）にて校訂）

二二六　藤島山城寛宥達書（非蔵人日記鈔）

六月十八日　　藤島山城

去十五日御池庭廻リ者之一件恐入候儀ニ候、従来御塞之儀ハ厳密ニ可心得勿論之処、両人モ入込居候儀不心得段不容易事ニ候、急度咎ニモ可被及之処、先達テ以来墨夷一条ニ付為国家深被悩　叡慮、公卿　勅使モ被立候程之御時節柄、何事モ惣テ寛宥之御沙汰ニ候間、於此度ハ咎不被申付候、以来軽卒之儀無之、（様脱カ）厳重ニ可心得事、右以一紙奉行西洞院（信堅）殿番頭正登江被申渡、御礼之儀ハ当番議奏計可申上、其余里亭行向等モ一切不及之旨、同卿被申渡、即刻召役可申渡之処、及深更明朝申渡（翌朝本人出頭申渡）

二二七　井伊直弼松平伊賀守カ行為隠言

六月十八日

井伊ハ堀田・賀州ヲ除クノ命ヲ受ク（将軍ノ命ナルモ之ヲ構成シタル、言ヲ俟タス）、此頃井伊ノ越前侯ニ語レルハ、伊賀抔ハ小身ノ分際トシテ此頃ハ権威ニ誇リ、傍若無人ノアリサマ、此度条約ノコトナドモ我意ニ任セテ京都ヲ押付ントスル条言語同断ト罵レリ（昨夢紀事ニ記スル処ヲ以テ、井伊カ両侯ニ羅織シタルノ姦黠ナル知ルベシ）、由是観之、井伊之意ハ専ラ勅裁ヲ待ニ在テ、違勅決行セシハ伊賀守ナルコトシルベシ云々、下略ス、

二二八　井上・岩瀬米国使節ニ応接及ヒ幕議

六月十六日

〔清直、下田奉行〕井上信濃守・〔忠震、海防掛目付〕岩瀬肥後守ニ命シテ応接セシム、ハルリス曰ク、英・佛・魯等ノ国軍艦四十隻、将ニ来リテ内海（江戸海）ニ入リ、交易ヲ請ハントス、殊ニ英・佛ノ如キハ廣東ノ戦ニ打勝タル勢ニ乗シ、即チ其戦艦ヲ以来リ迫ラン、我其請ヲ許サズンハ戦端必開クヘシ、今其未タ来ラザルニ先ツテ条約ニ調印セバ、彼後来リ請フモ、其上ニ出ルヲ得ズ（米国条約ノ上ニ）、且英・佛ノ来ル必貴国ニ利アラジ、早ク調印以テ其難ヲ避ンニハト、井上・岩瀬江戸ニ帰リ之ヲ大老及ヒ老中ニ告ク、大老井伊曰ク、条約ノ事勅允ヲ経ズシテ調印ハ宜シキニアラズ、若年寄〔忠徳、泉藩主〕本多越中守之ヲ賛ス、堀田ハ是非スル所ナシ、賀州曰ク、長袖輩ノ望ミニ叶フヲ求ルモ限ナキコトナレバ、關東ニ於テ断然裁決セズシテハ幕府ノ権モナク、又大ニ事機ヲ失ヒ、天下ノ事ヲ誤ラン、井伊詞ヲ尽シテ之ヲ阻ム、海防掛等謂フ事機甚迫レリ、之ヲ許サズシテ必ス大難ヲ生セント、遂ニ勅裁ヲ待ズシテ調印セントス、井伊猶之ヲ諸大名ニ諮詢セント欲ス、事行ハレズ云々（此論井伊ヲ徳スルモノ、説ミシテ、実際ハ之レニ反セリ、宸翰及ヒ近衛家秘翰ニ就テ其実ヲ知ルヘシ）

二二九　井伊直弼井上・岩瀬カ復命ヲ聞ク（公用方秘録鈔）

六月十九日

例刻御附人ニテ御登　城、七ツ時御退出、

今日応接掛リ井上信濃守・岩瀬肥後守、金川ヨリ罷帰リ申出候ハ、近々英・佛之軍艦数十艘渡来致候趣、尤清国ニ十分打勝、勢ヒニ乗シ押懸リ候事ニ付、応接方甚御面倒ニ可相成、乍去仮条約書ニ御調印済御渡シニ相成候ハヽ、如何様ニモ骨折、御迷惑ニ相成不

申様取計可申旨申聞候間、三奉行始御役人中一同御評議ニ相成候処、軍艦数十艘渡来之上御免シト相成候テハ、御国威モ不相立ニ付、唯今御免ニ相成候方可然旨、異口同音ニ御申立被成候間、　天朝ニ御伺ニ不相成内ハ如何程御迷惑ニ相成候共、仮条約調印ハ難相成旨被仰候処、御尤ト御同心被成候ハ、若年寄本多越中守計ニテ、其余之衆ハ何分数十艘引請候上之応接ト相成候テ、仮条約丈ケニテハ相済不申様相成可申、実以不容易儀、　天朝ヨリ被　仰進候儀モ、御国体ヲ穢不申様トノ御趣意ニ付、古制ニ泥ミ居候テハ憂患今日ニ十倍可致、無拠御訳柄御申解ハ如何程モ可有之候得トモ、一旦争端ヲ開キ候テハ、皇居初治海御手当モ行届不申事ニ付、調印致相渡候ヨリ外無之旨御申立ニ付、尚御考可被遊旨被仰、御用部用（屋カ）へ御帰リ、尚御評議被成候処、堀田備中守様・松平伊賀守様ニハ素ヨリ御許可被成御底意、其余ノ方々様ニモ指当リ致方モ無之ニ付、成丈為引延候方可然趣ヲ以井上・岩瀬両人御呼出、如何様ニモ骨折　天朝ヘ御伺済ニ相成候迄引延シ候様被仰候処、信濃守被申候ハ、仰之趣奉畏候得トモ、不及是非ニ節ニハ調印可被仰付哉ト御伺被成候間、其節ハ致方無之候得トモ、成丈ケ相働候様被仰候得バ、肥後守御申ニハ、初メヨリ左様之了簡ニテハ迚モ行届不申ニ付、是非トモ引延候覚悟ニテ応接可致趣御申被成、則其趣ヲ以御伺済ニ相成、両人ニハ御出立被成候由、御帰館之上再御前ヘ罷出、譬　公方様ヘ伺済ナリトテ、　天朝之御沙汰ヲ不被遊御待条約書ニ御調印御達被遊候ハ、全隠謀方之術中（堂上諸侯及ヒ有志ノ諸士ヲ云）ニ御落入被遊候ト申者ニテ、御違勅ト申唱ヘ讒奏可致、実ニ御家之御大事、其罪　御前御壱人ニ御引受被遊候様可相成ニ付、急速加（神）奈川ヘ御使ヲ以調印御差留被遊候様申上候処、　公方様ヘ伺之上、既ニ相達候事ニ付、今更私ニ差留候訳ニハ難相成ト之御意ニ付、猶又平常　天朝ヲ御尊敬被遊候　御前ニテ、京都之御沙汰ヲ不被遊御待、右様被遊御達候ハ、如何之御次第ニ御座候哉ト、段々御迫リ申上候ハ、其方共申処一理尤ニハ候得共、事危急ニ迫リ、勅許ヲ待候余日モ無之（井伊ノ本旨）、猶又海外諸蕃之形勢ヲ考察致候ニ、昔ト違ヒ航海之術ニ達シ、万里モ比隣之如交易通商ヲ開キ、其外兵器軍制等皆実

戦ニ試ミ、国富ミ兵強ク、強テ之ヲ拒絶シ兵端ヲ開キ、幸ニ一時勝ヲ得ルトモ、海外皆敵ト為ル時ハ全勝孰レニ在ル哉量ルヘカラス、苟モ敗ヲ取リ地ヲ割キ償ハサルヲ得サル場合ニ至ラハ、国辱焉ヨク大ヒナルハナシ、今日拒絶シテ永ク国体ヲ辱ムルト、勅許ヲ待タスシテ国体ヲ辱メサルト、孰レカ重キ、唯今ニテハ海防軍備充分ナラス、暫時彼カ願書ヲ取捨シテ、害ナキ者ヲ択ミ許スノミ、且　朝廷ヨリ被仰進候義ハ、御国体ヲ穢サヾル様トノ御趣意ニ有之、〔頭注〕「幕吏ノ常套如此、井伊家臣ハ殊ニ主張スル処」抑モ大政ハ関東ヘ御委任、政ヲ執ル者臨機之権道ナカルヘカラス、然トイヘドモ　勅許ヲ待サル重罪ハ甘シテ自分壱人ニ受候決意ニ付、亦云フ事勿カレトノ意有之、夜モ追々更候ニ付、御休息可被遊様申上、直様奥ヘ被為入、

二三〇　条約締結ノ始末奏聞案（公用方秘録鈔）

六月廿一日

京都ヘ被遣候下案

西夷条約之義段々御配慮之御次第、一々御尤之御儀ニ付、再応諸侯之赤心御尋ニ相成、追々考意書（当時ノ諺ニ御調文建白ト唱フ）モ差出、今少シニテ書付出揃候間、其上篤ト御評議猶御伺可被成思召ニ候処、今度魯西亜国之船渡来申立候ハ、英・佛之軍艦近々渡来可致、清国ニ十分打勝候勢ヒニ乗シ押懸リ候事ニ付、御応接方甚御案思申上候、併仮条約之通御承知ニ相成調印済候ハヽ、英・佛ヘハ如何様ニモ申諭、御迷惑ニ相成不申様取計可仕旨、兼テ滞留之使節申立候ニ付、厚ク御評議御座候処、

朝廷ニテ御配慮被為在候御儀モ、全御国体ヲ思召候テ之御儀、忽争端ヲ開キ、万一清国之覆轍ヲ踏マセラレ候様相成候テハ不容易御儀ニ付、海防掛リ之者共調印之上約条書御渡ニ相成申候（掛役人其罪ヲ負フ）、誠ニ無御拠御場合ニ付、右様之御取計ニハ相成候得トモ、朝廷ニテ御配慮之段ハ実以御尤之御儀ニ付、此後之御取締方沿海御手当等充実ニ相成、被為安　叡慮候様可被遊思召ニ候、委細之儀ハ猶追々可被仰進候得トモ、先此段可被遂（怒カ）　奏聞候事（不遜不敬ノ極神人共ニ怒ル）

諸大名ヘ御達之下案

亜夷条約之次第　朝廷ヘ御伺ニ相成候処、深ク叡慮被

為悩候御次第被仰進候段、御尤之御儀ニ付、再応各赤心御尋ニ相成、今少シニテ存意書モ揃候間、其上篤ト御評議之上御決定可被遊思召ニテ、精々御差急キ被為在候折柄、今度魯西亜国之船渡来申立候趣ハ、英・佛之軍艦近日渡来可致、尤清国ニ十分打勝、其勢ヒニ乗シ押懸リ候事ニ付、応接方甚御面倒ニ可相成ト御案思申上候、併仮条約之通御承知相成、調印モ相済候ハヽ、英・佛ヘハ如何様ニモ申諭、御迷惑ニ相成不申様取計可申旨、使節申立候ニ付、評議致候処、如何程御迷惑ニ相成候共、

朝廷ヘ御申上済ニ相成不申候テハ、御取計難被遊御儀、乍去忽争端ヲ開、万一清国之覆轍ヲ踏ミ候様之儀出来候テハ不容易御儀ニ付、海防掛リ井上信濃守・岩瀬肥後守於神奈川調印致シ、使節ヘ相渡申候、誠ニ無御拠御場合ニ付、右様之御取計ニハ相成候得共、　朝廷ニテ御配慮之段ハ実以テ御尤之御儀ニ付、此後之御取締方沿海御手当等充実ニ相成、被為安　叡慮候様可被遊思召ニ候、此度之御一条不取敢飛脚ヲ以京都ヘ被仰進、委細之義ハ追々被仰進候事ニ候、此後之御所置ニ付考意モ有之向ハ、無覆臓可申聞候事、

一諸大名惣登　城之義ハ廿三日、京都ヘハ明日立ニテ被仰進候様御評決之趣、御退出之上被仰候、

一御持帰リ之御書付左之通、

井伊掃部頭

京都表御警衛向之儀、猶亦御手厚ニ被成度旨被仰進候趣モ有之候ニ付、此度松平讃岐守（頼胤、高松藩主）・松平出羽守（直貴、松江藩主）・松平越中守（定猷、桑名藩主）儀増御警衛、藤堂和泉守（高猷、津藩主）儀ハ臨時出張致シ、援兵（口々之脱カ）被仰付候間、諸事可被申合候、尤御守護之儀ハ是迄之通可被心得候、（頭注「名ヲ警衛ニ反リ、其実検束ニアリ」）

（大日本古文書（幕末外国関係文書）にて校訂）

二三一　諸大名諸役人惣登城之形況（公用方秘録抄）

六月廿二日

今日惣出仕、於席々左之通被　仰出御持帰リ、

亜墨利加条約之次第　朝廷ヘ御伺相成候処、深ク被為悩　叡慮候御次第被　仰進候段御尤之御義ニ付、再応各赤心御尋ニ相成、今少シニテ存意書モ揃候間、其上篤ト御勘考之上御決定可被遊（着カ）　思召ニテ、精々御差急キ被為在候折柄、今度魯西（裕カ）・亜両国之船渡来、申立候趣ハ、英・佛之軍艦近日渡来可致、尤清国ニ

十分打勝、其勢ニ乗シ押懸ケ候事ニ付、応接方甚御面倒ニ可相成ト御案思申上候、併仮条約之通御承知ニ相成、調印モ相済候ハヽ、英・佛ヘハ如何様ニモ申諭、御迷惑ニ相成不申様取計可申旨、亜国使節申立候ニ付、御勘考被遊候処、如何程御迷惑ニ相成候トモ、

朝廷ヘ御申上済ニ相成不申候テハ、御取計難被遊御(候脱)義(カ)、乍去忽争端ヲ開、万一清国ノ覆轍ヲ踏候様之義御出来候テハ不容易御儀ニ付、井上信濃守・岩瀬肥後守於神奈川調印致シ、使節ヘ相渡シ候、誠ニ無御拠御場合ニ付、右様之御取計ニハ相成候得共、

朝廷ニテ御配慮之段ハ、実以御尤之御儀ニ付、此後之御取締方沿海御手当等充実ニ相成、被為安叡慮候様可被遊　思召候ニ付、此度之御一(条カ)候不取敢宿継奉書ヲ以京都ヘ被仰進、委細之義ハ追々被仰進候事ニ候、此後之御所置ニ付考意モ有之向ハ、無覆臓(被脱カ)可申聞候事、

右於席々大和守申達書付渡之、掃部頭老中列座、

但備中守可申達処、病気ニ付如右、

六月廿二日

扣六月廿二日之次飛脚ニ遣之、

伝奏衆ヘ相達候趣、

一筆致啓達候、外国御取扱方之義ニ付、御使備中守被差登、委細之事情及言上候趣(処カ)、勅答之趣モ有之候ニ付、猶又三家以下諸大名ヘ御尋有之、追々差出候御答書等入　叡覧、其上御所置有之思召之処、最早亜米利加条約御取結無之候テハ難相成場合ニ至、実ニ不被為得止事次第ニ付(テカ)、再応被仰進候日合モ無之、無余義御決着相成候ハ、深ク御斟酌　思召候得共、先般被仰進候趣ヲ以、今度条約為御取替有之(候脱)右(カ)無御余義次第、委細別紙之通リ候、此段先不取敢宜有　奏聞旨被仰出候、恐惶謹言、

六月廿一日　　老中連判

廣幡(橋カ)大納言殿

萬里小路大納言殿

別紙

亜米利加条約之次第、先達テ別段御使ヲ以被　仰進候処、深ク被為脳(悩カ)叡慮候御次第被仰出候段、御尤之御義ニ付、再応御三家以下諸大名ヘ赤心御尋ニ相

成、今少シニテ存意書モ揃候間、其上篤ト御勘考之上御決定可被遊思召ニテ、精々御差急キ被為在候折柄、今度魯亜（西脱カ）・亜墨利加両国之船渡来申立候趣ハ、英吉利・佛蘭西之軍艦近日渡来可致、尤清国ニ十分打勝、其勢ニ乗シ押懸リ候事ニ付、応接方甚面倒ニ可相成ト御案思申上候、（併脱カ）仮条約之通御承知ニ相成、調印モ相済候ハヽ、英・佛ヘハ如何様共（ニモカ）申諭、御迷惑ニ相成不申様取計可申旨亜国使節申立候ニ付、御勘考被遊候処、如何程御迷惑ニ相成候トモ、朝廷（御カ）ヘ御申上済ニ相成不申候テハ、御取計難被遊候義、乍去忽争端ヲ聞（開カ）キ、万一清国之覆轍ヲ踏候様之義出来候テハ不容易候義（御カ）ニ付、井上信濃守・岩瀬肥後守於神奈川調印致シ、使節ヘ相渡候、誠ニ無御拠御場合ニ付、右様之御取計ニハ相成候得トモ、朝廷ニテ御配慮之段ハ実以御尤之御義ニ付、此後之御取締方沿海御手当等充実ニ相成、被為安叡慮候様可被遊思召ニ候、委細之義ハ猶追々被仰進候得共、先此段可被遂奏聞候事、

六月

別紙

禁裏附ヘ申遣候趣、

伝奏衆ヘ呈奉書候間可被達候、且又右奉書ハ昨廿一日差出候積之処及今日候間、備中守・伊賀守連名有之候得共、其侭差立候事ニ候、此段為心得相達候、以上、

六月廿二日　老中連名

（豊常、京都町奉行）岡部備後守殿

（忠良、禁裏附）大久保大隅守殿

猶以、伝奏衆ヘ呈候奉書差急候義ニ付、東海道・中仙道両道ヨリ差立候間、跡ヨリ着候方ハ追テ可被相返候、以上、

〔大日本古文書（幕末外国関係文書）にて校訂〕

昨日一橋様御逢被成度ニ付、御屋形（一橋邸）ヘ御出可被下哉、御城ニテ御逢可被成哉之旨候付、御家老ヲ以被仰入候間、此節御用多ニ付、御屋形ヘ罷出候猶予無之、御登城被成候ハヽ、御目通リ可仕、何等之御用向ニ候哉相弁不申候ヘトモ、初テ御逢之儀（一橋公ト）ニ付、御斟酌御座候テハ不宜、無御遠慮十分ニ御談御座候様被成度旨申立、今日御逢有之、色々御談之上、

西丸ハ殿方〔ママ〕ニ御治定相成候哉ト御尋ニ付、紀伊殿ニ御取極相成候旨申上候得ハ、御血筋ト申、御様子モ宜御方ニ付、重畳之御儀、紀伊家之御相続ハ如何相成候哉ト御尋ニ付、アナタ様御出被成候テハ如何哉ト申上候得ハ、大藩之義自分抔参リ候テハ迚モ納リ不申ト御申被成候迚、御一笑被遊候（昨夢紀事参照）、田安様ニモ御逢被成候処、国家之儀真ニ御案思、是又西丸之事御尋ニ付、紀伊殿ニ御治定ニ相成候段申上候処、偖々恐悦至極、先頃ヨリ一橋ニ可相成トノ風説有之、自然右様ニ相成候テハ乱之基ト潜ニ心配致居候処、右様御極リニ相成候段承リ安心致候迚殊之外御歓、国家大厄難之折柄ニテ、甚心配致居候処、其許ヘ御役被仰ニ付、上之御力ニ成、是迄之弊風御挽回ニ可相成ト、大慶致居候次第ニ候得トモ、松平越前守儀不所存者ニ付、毎々異見致シ候得トモ、中々相用ヒ不申、国家之御為ニ候間、御手前ヨリ厳敷御示被下度、実ニ国家安危ニ拘リ候御大切之御場合、偏ニ御忠勤被下候様致度旨、御落涙ニテ染々被仰述、一橋殿御談トハ雲泥之相違ト御噂御座候（田安ノ甘言、其為人知ニ足ル）

〔表紙〕

齊彬公史料

市來四郎編

安政五年

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事鞅掌史料（紙数七六枚）」の記載あり〕

目録

七月八日大砲操練ヲ天保山ニ覧玉フ
御不例御危篤ノ布告
御遺言之条
御内葬並御葬式
御遺言ノ趣山田壮右衛門筆記（本書新納駿河秘蔵ス）
御病症御診断書（本書黑田長溥公ヨリ廻送セラレ伊達家所蔵）
参考　伊地知季安記事抄
齊彬公御逝去天璋院殿御忌服布達（幕令ノ部ニモアリ）
伊勢国皇大神宮社官御師太夫カ祭文
御上下年月日
黑田長溥公御凶報ニ御驚ナカリシ譚
男女御子順次
男女御兄弟順次
福岡侯宇和島侯ヘ与ル書
黑田長溥公伊達宗城公ヘ御書翰（伊達家所蔵）
黑田長溥公伊達宗城公ヘ御書翰九月十三日
参考　江夏干城記事抄
黑田長溥公市來廣貫ヘ御親話（明治十八年春）
参考　在京某氏（原田才輔）在江戸某ヘ寄書
齊彬公御簾中御逝去布告
齊彬公薨去後ノ形況
江戸風説記
当時江戸流布ノ説
三條實萬公ヨリ齊彬公ヘ送ラレシ御下書写
順聖公御三回忌懐旧詩歌

二三二　七月八日大砲操練ヲ天保山ニ覧玉フ

〔安政五年〕戊午七月八日操練場（砂揚場又ハ天保山トモ唱フ）ニ於テ、

横目・蔵方目附両役人等ノ大砲遠撃調練ヲ覧玉ヘリ、酷熱ヲモ厭ハレス　御出馬、大砲ノ遠撃ニハ、高低ノ度合薬量ノ多少等ヲモ指揮セラレ、暑熱ニ御傘モ　召サレス御勉強アラセラレタリト（両三日前ヨリ御不快、少シク御瀉下アリシモ押テ御出馬アリシト云フ）、畢リテ同所ヨリ小舟（丸木舟）ニ召、御帰途釣ヲ垂レ玉フノ予定ナリシト、去ル六日ヨリ少シク瀉下セラレシカ、弥増ニ御不快ヲ感セラレ、御釣魚モシカトナシ玉ワス、晩景ニ御帰城、　御寝ニ就カセラレ、九日ハ予テ御達ノ如ク琉球王使登城謁見ノ式ニ臨マセラレ、御儀式滞ナク済セラレ、大奥ニ御引入リ、程ナク御寝蓐ニ就セ玉ヒ、是ヨリ荏苒御病苦増進シテ遂ニ御大事ニ及ヒタリトナム、御診察御薬剤ハ侍医坪井芳洲ナリ（琉球王使伊江王子、此秋江戸ヘ召列レ玉フ予定ニテ上覲、此日初メテ登城御目見被仰付タリ、此日モ前日ヨリ御不快ナリシモ、押シテ御出座、御儀式残ル処ナク済マセラレタリトソ）

二三三　御不例御危篤ノ布告

太守様御事御不快被遊　御座候ニ付、諸役人並月次御礼罷出候面々今日登城、謁　御家老可奉伺　御機嫌候、

七月十六日　登久包、戊午七月十六日四時至急布達

十六日暁　御逝去、当朝ヨリ世上何トナク恟々タリ、斯ク布告セラレタルハ御先規ニ拠リ、順序ヲ踏ンテ布達シタル者ナリ、

世上一般恟々、上下老幼トナク悲嘆ニ沈ミ、人色ナキニ至レリ、其形況筆舌ニ尽スヲ得ス、御危篤ノ説忽チ伝播シテ神仏ニ祈ルモノモ寡カラス、中ニハ飲食ヲ絶テ霧島神社・鹿兒島神社・新田宮等ノ如キニ、遠道ヲ厭ハス走テ参詣セシモアリ、真ニ父母ノ如ク三尺ノ児童ト雖トモ声ヲ放テ悲歎、寝食ヲ忘ルニ至レリ、御徳沢ノ洽キコト如此、噫々、

太守様　御不快段々被為尽　御療養候ヘ共、不被為叶御養生、今朝卯刻被遊　御逝去候、此旨奉承知候様、諸士並諸組与力等夫々支配頭於宅、今日先例之通可申渡候、

七月二十日　駿河七月十六日暁寅ノ上刻　御逝去

公ハ文化六年己巳三月二十八日江戸芝邸ニ　御誕生、嘉永辛亥二月朔日　御家督御年四十三、御知政僅ニ八ヶ年、安政五年戊午七月十六日暁　御逝去御年五十一

太守様　御病気御大切ノ砌、　御遺言ノ趣ハ、此節ノ御病気万一モ　御養生不被為叶節ハ、若殿様哲丸公（忠義公旧名）　御義御幼少ノ御事故、　暐姫様ヘ又次郎殿御聟養子ニテ、　若殿哲丸公様ニハ御順養子被遊候段承知仕候ニ付、宰相様斉興公　達　御聴候上、　公辺御願被　仰上筈候、此旨可奉承知候、以上、

七月二十日

下総島津久徴　伯耆島津久福
龍ノ口川上久齢　筑後川上久封
駿河新納久仰　伊織樺山久成

右布達アリシニ、一般少シク心ヲ安ンシタリ、　哲丸公ハ僅ニ二歳ノ御幼児ナルカ故、天下多事ノ際、加之　皇室ノ御為メ御大志ノ程モ稍推察シ奉レルカ故、　御遺志残ル処ナキヲ感戴セリ、

順聖院殿英徳良雄大居士

太守様御法号右通奉称候、此旨御役人限罷出拝見可仕、奥掛御勝手方ヘハ右ノ通相達、　御法号写可相渡候、

七月廿日　　駿河

御法号ハ福昌寺ヨリ取調上申シ、御記録奉行再撰御治定アリシト云フ（二三通リ取調上申シタルヲ、尚ホ御徳行ニ基キ定メラル御先規ナリト云フ、実ニ御法号ノ如ク聖賢ノ二字ニ違ハサル不世出ノ明君ナルハ、誓言ヲ俟タサルナリ）、当時福昌寺住僧ハ應山ト云フ、

二三四　御遺言之ヶ条

御遺言ノ御ヶ条、第一条ニ　又次郎公（忠義公）　御相続、　暐姫様御結婚云々

哲丸公御順養子ノ云々、第二ニ　王室御尊崇大政御一変ノ云々、第三、旧南林寺ヘ御遺髪ヲ納メ奉ルヘシト、

此外下ニ記シタル数条ナリシト、

御実弟周防公ヘ（久光公旧名）御遺言アリシト、而シテ御盃御取替シ、御瞑目　遊ハサレタリド（御盃ハ兼テ御口ニ適ヒシ梅酒ヲ御差図ニテ御用ヒアリシト云フ）周防殿ハ御召ノ御使ニ接シ、俄ニ登城、直ニ御前ニ伺公セラレ、山田壮右衛門周防殿罷出ラレタル旨言上シ、御枕許ニ召サセラレ御遺言拝承セラレ、而シテ上文ノ如ク御離杯アリシトナム）

其他御手許御秘蔵ノ御書類焼捨ツヘシトノ御言ハ、山田壮右衛門及ヒ側女須摩ナル者ノ両人ヘ命セラレシト、茲ヲ以テ両人議シテ、翌十六日二ノ丸浩然亭ノ山中ニ於テ

箱入レノ侭焼捨タリト云フ（久光公親話）（是ト同時ニ江戸邸御手許ニ在リシ御文庫二三個モ、御遺言ニ依リ焼棄タリ）

二三五　御内葬並御葬式

戊午七月二十日、御先規ノ如ク　御遺骸福昌寺ヘ被為入、全夜御内葬、御入寺ノ式ハ御先規ノ如ク諸士惣御供、一同悲哀ニ沈ミ、愁々トシテ幾千ノ諸士奉随ス、御通街ニハ貴賤男女老幼出頭、啼泣悲嘆ノ形状、実ニ言語筆端ニ述ルコトヲ得ス、　本日御内葬、以後御忌日ニ定メラレタリ、而シテ同月二十五日御葬式執行（齊宣公御例ニ依ル）、祭主ハ　御遺命ノ如ク又次郎殿ナリ（通俗ニ御位牌御守リト云フ）、御葬礼ノ式ハ御先規ノ如シ、茲ニ略ス（舊邦秘録ニ詳記ス）

二三六　御遺言ノ趣山田壯右衛門筆記（本書新納駿河秘蔵ス）

十五日夜中八ツ半時頃、私事被為　召（山田ハ当宿直ナリシト）御病床江罷出候処、御待被遊居候トノ

御沙汰ニテ、　御口ノ涯江私耳ヲヒタト御引寄被遊候テ、此節ノ御不快迚モ　御全快不被遊ト　思召候、依之明日左衛門（島津久徴、家老）・駿河・竪山兵武衛三人被為　召、

御直ニ御遺言被遊候　思召ニハ候得共、壯右衛門ヨリ三人江急度申聞候様ニトノ

御沙汰ニテ、左ノ通奉承知候、

哲丸様御幼少ニ付、御跡ハ周防殿（忠教）又次郎殿（忠德）ノ間（周防殿ハ辞セラレ、又次郎殿ト定メラレタリト）宰相様（齊興公）江奉伺候テ御取究申上候様、尤暐姫様（公ノ御長女）　江御聟養子ニ被遊、　哲丸様（公ノ御長男、御年二歳）御順養子ニ被遊度思召候事、

御石塔ハ福昌寺・南林寺江モ、小サ成御石塔建候様（福昌寺ヘ御骸、南林寺ヘ御遺髪ヲ埋メラレタリ）

御用櫃江水・剣・小判金千両・壱歩金千両御入附致候様、

御内用諸御書附類、江戸・御国元・大奥表等江御格護被遊置候間、壯右衛門（山田壯右衛門為春、当時御小納戸頭取）幸衛（百幸衛御小姓役ナリ）両人ニテ都テ見分ケ、大抵成御書付ハ御焼捨ニ致可申候事（翌十六日二ノ丸内浩然亭ノ山中ニテ、山田・百立会函ノ侭焼捨タリト）

御道具ノ内差立タル御品

御城江（御城江云々天璋院殿）差上候様、尤御国許ニモ

有之候得共、江戸ニ多分被召置候間、一人早々江戸へ
差越見分ケ候様、
智鏡院（土佐侯ノ御婦人、公ノ御妹君ナリ）江モ宜敷御道
具ノ内差上候様、
おすま事（すま女ハ哲丸公ノ生母）方ノ字早々被下度、左
候テ千両被下候テ、
哲丸様御部屋江被召置、追々御部屋様ト迄御引上被遊
度事、
於ユキ・於タカ（ユキ・タカ共ニ御側女中）両人ハ三百両
ヅヽ被下、御暇被下候事、
萬年丸（軍艦萬年丸）ハ是非御成就ニ致候様、
集成館モ頓着ハ有マヒ、十郎（江夏十郎直義）モ混雑、
先日京都ヨリ申参候次第ニテハ、兎角大変、丁度ヨヒ
ハ人モヲシムデアラフ（京都御召ノコトナラム、御切迫伺
ヒ兼ネタリト云フ）
右ノ通御平日ニ御替リナク御慥ニ　御沙汰奉伺候、
其後周防殿（島津周防忠教、久光公御旧名）御上リ、何
欤御一口　御密々　御沙汰被遊候御様子ニ候、右跡
ニテ又々私江、
宜敷時計ハ江戸へ、舟時計（御秘蔵ノコウノメードル）ハ
伊達（伊達宗城公）へ遣ハセ、
琉球人ノ事ハ
宰相様（齊興公）江伺候テ、ヨロシキ様ニ
忠孝ニ有ルト思ヘト（京都ヨリ御召ノコトナラムト）、此
御沙汰ノ節ハ何分別シテ御幽カニテ、初末伺取レ不申
奉恐入候、只々御受ハ申上置候事、
右ノ通ニ御座候間、為念相認申上置候、以上、

右ハ七月十六日暁、
御勝不遊段申来、早々罷出候処、最早極々
御大切ノ御様体被為成、恐入罷在候処、左衛門殿（御家
老島津左衛門久徴）並拙者・武兵衛（竪山武兵衛利武）三人
御次ノ間へ罷出候様、山田壮右衛門ヨリ相達、本文ノ趣
イマタ　御事切レ不被為成内ニ御伝達イタシ候間、急度
承知仕候様被申達、誠ニ以恐入承知仕候、左候処無程
御事切レ被為成奉絶言語候、
但夜中壮右衛門江
御沙汰被為在候節、格別成御用筋ニ付、御次ニテ早
速頭書被致置候処、追々
御大切ニ被為成候付、早々右ノ頭書ヲ以被相達置、

本文ハ十六日昼認替、三人共同案ニテ被相渡候事、
安政五年午七月十六日　　久仰謹誌新納駿河

二三七　御病症御診断書（本書黒田長溥公ヨリ廻送セラレ伊達家所蔵）

御容体並御薬法

七月九日夜拝診候処、時候当リ之御模様ニテ、御寒熱被為在、御舌胎厚ク御腹部拘攣、御大便少宛御催有之候得共御快通無之候、
御泡剤接骨花・加密列・蜀葵花・珊篤里・小茴香・二磠砂二氐（七カ）宛加ヘ調進候、
仝十日
御熱気強ク被為入、御腹痛下痢数行被為在候、御腹部定所之劇痛等無之、痙攣痛之御模様ニ奉診候、
御煎剤サアレツフ煎ニ加密列・接骨花・小茴香・甘草泡出差上申候、蜂蜜アルタア煎ニテ浣腸被遊候、
仝十一日
御容体御同様ニテ御下痢昼夜四十行、御熱候少シ薄ク被為入候、御小水御通不宜候、
御薬前方夜分御安眠無之候テ、
ヒヨシヤエキス五氐御腹用ニ相成候、
毎日数回サアレツフ煎ニテ御浣腸被遊候、
仝十二日
御下痢昼夜三十三度、御赤痢ニテ血交リ、御滑便被為入候、裡急後重御強ク、御熱候御同、様御脈搏一（レ脱カ）密扭篤ニ八十七八度、或九十四五度御食機不宜、サアツフ煎ニ藿香・木香砂仁・加密列少宛泡出調進候、
仝十三日
御下痢昼夜三十二度、御赤痢血便薄ク、御熱候軽ク、裏急後重モ御少ク御舌胎薄ク、御小水御通不宜候、御煎薬前方御散薬ニ格綸撲・越幾私・亜刺比屋護謨調進、
御腹部ニ緩和蒸剤差上候、
仝十四日
御肌熱薄ク、昨夜ヨリ時々御便中赤白相交リ、御完穀モ相交リ、御安眠不被為入御労倦被為在、御音声モ無御力、サアレツフ煎ニカスリルラ・水楊梅・加密列・泡出コロンボエキス、御散薬ニ龍脳加ヘ調進候、
今日昼夜御下痢二十三度ニ減少、御本便交リ御通被為

入候得共、御食事至テ御少、益御労倦被為入、御脈状（脈カ）細数ニ奉窺候、

仝十五日

今朝ヨリ御脈益御細数御労倦増加、御手足微冷、御下痢昼十度被為入候、其中御本便四五度御通有之、御小水両三度御快通、御食事御宜敷、稍御整復（復）之御模様ニ奉伺候処、晩方ヨリ御疲労相増、御虚煩之御模様ニ奉診候、コロンホエキス、龍脳、御散薬ニ幾那塩配調、御腓腸ニ芥子・琶布差上申候、何分御気脱之御容体被為在候故、ホフマン液・麝香・硇砂精等之御薬剤頻ニ奉調進候得共、至極之御難症ニテ御薬剤奏効無之、御大切奉恐入候御容体ニ奉伺候、恐惶謹言、

七月十六日　　坪井芳洲

愚按ニ、初日三日単純善性御痢疾御容体ニ奉伺候処、終末転変御虚脱御症状ハ、全ク当時流行性之コレラ病状ニ可被為入候欤ト奉存候、

二三八　参考　伊地知季安記事抄

七月八日公如調練場覧大小砲備、九日臨対面所受琉球王子朝賀、此日公嬰疫痢、中外惶憂、薬禱竭力微効日鮮、時哲丸君生未周年、先是令弟周防忠教君嫡子又次郎忠徳君（忠義公旧称）、於公為令姪、以故欲令嗣又次郎君、妻暐姫君、使哲丸君立其世子以襲封国而未宣言、十五日城代島津左衛門久徴、国老新納駿河久仰等皆趨掖宮、就侍医女官候公安否、侍医曰、診脈赴衰、亦痢減食進如微効、頼此旨夜帰宅、唯山口直記利紀等代直近侍、而公疾大漸知叵復起、乃顧命須磨（世子生母）及山田壮右衛門爲政（正）等述其所欲、可以明日夙召左衛門・駿河等伝此遺命、素汝等亦宜銘乎肝、於是爲正等駭懼与利紀議、乃遣御小納戸馳告周防君、又利紀鈂左衛門・駿河・登及竪山利武等檄各一通告以趨召、周防君及左衛門等直馳造城、入謁寢室親承遺命、乃觴誓約時因駿河等卒移剋達遅檄雖鞭馬馳及候、気息殆垂属紘泣聞顧命於其席、十六日命国老島津伯耆久福徇公顧命馳如江戸、啓諸老君宰相（齊興公）公以請大家、十九日久福発宅、二十日（実ハ十六日脱）公竟薨于府城、二十三日忠徳君進謁殯主於御座間、左衛門久徴・駿河久仰・竪山利武等侍座其席、久仰乃述公遺命以伝忠徳君、竣令諸士亦

如之、而諸士皆奉靈柩出自府城入福昌寺、八月五日行殯葬礼於其道場、法謚曰、順聖院殿英德良雄大居士、時世子哲丸公生僅二歲、令弟忠教君応官所議摂主葬祭、

維時安政五年歲次戊午秋七月

順聖院殿故従四位上左近衛中将、薩隅日三州主兼領琉球国、英德良雄源公遽嬰疫痢、薬禱不効、至二十日癸巳之曉奄然易簀於本府城宮、越八月五日丁未随浮屠法行殯葬礼於福昌禅寺、儲君哲丸公生僅二歲、喜悲未弁、由是族臣忠教応官所議臨中陰筵、代儲君虔陳薄奠以恭祭于源公之靈、其辞曰、

嗚呼哀哉

英明遠照　德化皆謳　爵陞四品　名冠諸侯
識貫和漢　文亜孔丘　威震夷狄　沢及琉球
惟智惟勇　誰不懐柔　礼楽射御　無一不周
嗚呼哀哉
俄罹微疾　棹涅槃舟　忽渡彼岸　何促遠遊
靡聽不駭　無視不惆　泣涕如雨　挙国沈愁
音容難尋　泉下悠々　此歲何歲　遭斯不休
嗚呼哀哉
結南柯夢　月冷霜浮　霊柩欲絆　昇魂叵留
風払虚壁　香薫空樓　臣今揮涙　代幼孩候
蘋蘩雖薄　謹陳庶差　吊詞雖短　恭述心憂
嗚呼哀哉　尚饗

此日久福亦陪法筵、献祭文、如左、

安政五年戊午秋七月

邦君順聖源公遽嬰疫痢、　世子哲丸公時尚乳孩、故至其大漸　顧命令弟及国老等、欲立嗣　令姪又次郎君妻暐姫君教　世子公為其世子以襲封国、使執政大夫臣藤原久福銜　命、兼程趨如江戸啓諸
老公以請　大家、　大家乃聽、授臣檄、令徴姪君服父喪衣以趨江戸、十月齎還報事、十五日姪君拜命、時公既薨於輓推任男久徴代而奉焉、将及百日、於是二十五日不堪哀慕之情、使食邑西福寺虔陳薄奠恭陪法筵、以祭于　源公之靈、其辞曰、

自公襲封　八載未移　惟徳革俗　百官遵儀
受衆挙直　無吏狹私　愧窒其慾　懲守其規
恵露逾沾　仁風益吹　天何促齢　邦人忽悲
嗚呼哀哉
夙歲聡明　典墳受師　学渉倭漢　芸邃槍騎

旁該蛮煩　欲尽窮奇　精思達旦　練兵躬麾
三楢創艦　水軍備夷

二三九　齊彬公御逝去天璋院殿御忌服布達（幕令ノ部ニモアリ）

午九月二日只今酉上刻、山口丹波守（直信、大目付）様ヨリ内藤駿河守（頼寧、高遠藩主）様・黒田伊勢守様御連名之以御切紙、内藤紀伊守（老中、信親、村上藩主）様御渡被成候由ニテ、御書付写一通被差越候付、右写以御手紙来ル、

内藤紀伊守殿御渡候御書付

御詰衆
大目付へ

松平薩摩守七月二十日於国許卒去ニ付、
天璋院様御定式之通、今日ヨリ五十日十三月之御忌服被為　請候事、

九月二日

二四〇　伊勢国皇大神宮社官御師太夫カ祭文

飯高の縣造称ゑ奉る祝詞のひと巻を、神葉にゆふかけ御前に捧け奉れとかけくはりてさゝけ奉る榊葉の栄ゑゆく如く高天原に清く明らけく、神御功績かゝかせ給（や脱カ）ひて、常盤に堅盤に大御国を守り、幸ひ給ゑと　管原の明義恐美恐美申、

皇朝の遠の政所と薩摩国の大隅の国の日向国の国領知食しく　中将の殿の御前に、天押帯彦命の遺裔飯高県造の親彦恐み恐みまをつく、掛巻もかしこき　御神と、大八洲知食つせ給ふ
天皇の勅承らせ給ひて、近き御守り　仕ゑまし〳〵てたくひなく　御名は春　の精、しけく、秋津洲の外まてもかほりわたり、余りある
御威徳は青海原に塩沫の凝るてふ島の八十島をつゑ圧し鎮め給ひ、千万の人草の心の中にも沖津浪立騒く時わありとも初の海にわこの君ましませりと、大　の思ひたのみ奉り、をのれ親彦の輩か
皇国の御為にをちなき申尽しまつる御奴も、御陰によりてそ心操しをもい、さためて願を掛て千里の海山を越ゑ来ぬる事を聞し召れ、御心のはしに懸させ給ひしわ、よろつよりもかしこく侍らひき、此みかつくしはしも、高千穂の山と高く仰き、薩摩の海と仰くをもひ

むせふ計りに辱くこと、いとや　御目のあたり許させはゑらむをりとて、　ひ聞ゑ上け侍らわめとをもひ給ひ侍らひしを、木綿してのかけても知らぬまかつ神のしわさこそすゑるけれ、君は初秋の有明の月の影とゝもに雲陰れさせ給ひぬと承り、丈夫の佞心もよわり果て、只仰いて思ひ狂いふして泣沈むより外の事そなき上に、申さる如く、君の御事しらせ玉いし三つのくぬちの御民のみかはこの下の人草の頼みをかけまつるたれは斯くと伝ゑ聞らん限り、孰れか力を落さゝさらん、かなしきかな、大凡世の間のことわり斯く計りにすへなきものか、怨しきかな、親彦をふけなくも

皇大御のみやつことして、　大御国のをほし為に

御家の福厚くましまさん事を、年比いのり奉るいさおにもたかひて今かく歎きの露に伏沈み侍ふは、いかなる浮世の様そや、それ謹みてをもひたく奉るに、あらけき道もて申さは、

君に功績しき御福を守り給ふ神こそ、天地の間にみち〳〵てましまさめ、されはこま〳〵に御功績を妨けまつらんとする禍津日ありとも、守り給ふ天津神地津神の御光りに争ひまけて、朝の露と消かへき理りなるををもかけぬ　御雲陰れまし〳〵けん、深くおもひみれはこ度の　御登わしかあらて協わぬ御契りのをわし座すらん、そも〳〵今西東のゑみしとも穢き心もて　大御国うかゝひまつる時なれは、心あらん輩わをほろけにをもい侍るへき事にならね、いかにせん久しきゆたけき　大御世の御恵みになれまつりゝたる国民とて、人の心怠りに怠り、様々に分れてかしこけれと、　公にもいまた定たる

御深謀ましまさむか如くなれは、年比　君の思召よらせ玉ひけん

御忠策も、知らせ給ふ　御国の外ゑ広く遠くは及はせ給ふ事かたくて、御心の中にわかなわすや、履もてへたてゝ庠をかゝせ玉ふ　御憤りもまし〳〵けむ、その御心を　皇大御神の　大御心に明らけく、照しみそなり給ひ、天津神となしてたくひなく　御功烈を建させ玉わんとて、高天原に参り登り給ゑと、

神勅せさせ玉ひしにこそ、然しわ今わしも久方の天にましまして、

皇大神の　大みことのり蒙らせ玉ひ、　大御世を守り給ふ軍の大神となりてそをわしまさむ、親彦力をもひ

奉る処に違いて、かくましまは世々事あらんゑみし事を残りなくことむけ給ひ、　大御国の御厚福を遠長ニ御うみの児の〔マヽ〕々に、　大御世のつけつかゑさせ給ふ　御家の臣たちもます〳〵に忠孝々々、功烈に堪ゆへき人を生れ出さしめ給ひ、其人々をも安らけく恵み幸ひ給ひ、

朝廷を仰まつろひ、　大将軍の御のりをかしこみまつる国民の心をも安め玉へと、かくあらは親彦か年頃をもひめくらしたる心の〔マヽ〕を聞く上けまつらむと、はる〳〵の海山を経て、　大城の下に旅宿せしか、愚かなるをも虚しからすして、わか

大御　の祚登まさに天地と共に究りましませし、かくてそかつゝ世にましませる御時の

御情願にも、大かたわ違わせ給いて、いかて〳〵愚心に考へ、わかりまつりしか如く、高天原にまい登らせ玉ひて、　大御世を守り給ふ軍の

大御神とまし〳〵

大御世を護り玉ひ、国民を恵み幸ひ給へと恐美恐美もまをす、

御炊大夫カ来麗シタルハ、京都ヨリ御内使ナリシト、故ニ拝謁ヲ允サル、御内示モアリシト、京都ヨリ云々、粟田宮ノ御密使ナリシト（粟田宮ハ青蓮院尊融法親王ヲ云フ）

二四一　御上下年月日

第一回御上下（御政務御見習ト唱フ）

天保六年乙未四月二十七日、江戸芝邸　御発駕、仝六月二十三日　御着城、之レヲ御政事　御見習御下国ト唱フ、御年二十七、従駕国老格調所笑左衛門広郷、御側役圖師崎源兵衛・種子島六郎時昉、御礼使赤松主水、

翌天保七年丙申二月十九日麗城　御発駕、仝四月十日江戸　御着邸、

第二回御上下

弘化三年丙午六月八日江戸芝邸　御発駕、仝七月二十五日　御着城、琉球国ヘ異国船渡来、太守齊興公　御名代ニテ　御下国、御年三十八、従駕国老ノ場ニテ御側詰碇山將曹、御側役種子島六郎、御礼使山口舎人、

翌弘化四年丁未三月十五日　御発駕、仝五月十二日江戸ヘ　御着邸、

第三回御上下

嘉永四年辛亥二月二日御家督、同月十五日御家督ノ御

礼、同月廿七日御下国御暇賜リ、三月九日江戸邸　御発駕、仝五月八日　御着城、之ヲ　御家督御初入部ト唱フ、御年四十三、従駕国老島津将曹久徳（旧碇山）、御側役竪山武兵衛利武・山口直記利紀・名越彦太夫、御礼使小松相馬清猷、

嘉永五年壬子八月二十三日　御発駕、仝十月九日江戸御着邸、従駕国老末川近江久平、御側役竪山・山口・名越、

第四回御上下

嘉永六年癸丑五月二日江戸邸　御発駕（木曾路御通行）、

仝六月二十三日　御着城、従駕国老川上筑後久封、御側役竪山武兵衛・山口直記・名越彦太夫、御礼使鎌田圖書（在邸番頭ニテ勤ム）

嘉永七年甲寅（安政元年ト改ム）正月二十一日　御発駕、

仝三月六日江戸　御着邸、従駕国老島津豊後久宝、御側役竪山・山口・名越、

安政二乙卯年ヨリ同三年間、特旨ヲ以テ御滞府（篤姫君御結婚、及ヒ外国事件多端ナルヲ以テナリ）

第五回御下国

安政四年丁巳四月三日江戸邸　御発駕、仝閏五月二十五日　御着城、国老ノ場ニテ御勘定奉行側役勤竪山、御側役山口・名越、御礼使樺山相馬久要、

安政五年戊午七月十六日暁御逝去、御祭日廿日ト定メラル、

一以上御下国五回、　御参府四回、御部屋栖ノ内二回、御家督後三回ノ御下国ナリ、御知政僅ニ七年、乃至八年ハ充タサルナリ、

二四二　黒田長溥公御凶報ニ御驚ナカリシ譚

御近親ノ中ニモ福岡侯ハ殊ニ御親睦、御互ニ胸襟ヲ明カサレタル御間ナリシトソ（福岡侯ハ重豪公第十三男ニマシマシ、御幼名ヲ桃次郎ト称ス）、戊午ノ夏　御病気御大切ノ御知ラセアリシ時、少シモ御驚ノ御容子ナク仰ニ、コレハヤツタトノミ仰セラレリシ故、御近習ノ輩大ニ怪ミ、何故斯ク仰セアリヤト言上セシモ、御信用ノ体ナキ故、御内実ハ御逝去ノ趣、御使者（前葉伊達公ヘ御書簡参照）ヨリ承リタリト申シアケシモ、尚ホモ御疑惑アラセラレ、吉永源八郎ナル者ヲ御使ニ立ラレ、其ノ時ノ仰ニ、病気ナルニ於テハ見舞ノ挨拶、死去ナラハ悔ヲ申セトノ御言ナリト、而シテ追々ノ報知吉永カ復命ヲ聞召シ、夫ヨリ御悲歎ニ沈マレタリトソ、而シテ後宮堂上方並尾・水・越、

其他各藩有名ノ人士禍ニ罹リタル際ノ仰ニ、薩摩守モ存命ナレハ此ノ禍ニ罹ルハ必定ナリ、病気ノ報ヲ聞キタル時ヨリ、今日ノ事アルヘシト思ヒシ故、賢キ人ナレハ死ヲ以テ謀ラレシナラント思ヘリトノ仰アリシトナン（此ノ説加治木郷ノ士松葉甚助カ福岡ニ於テ吉永ヨリ親聞ノ趣ナリ、吉永ナル者ハ当時福岡侯御近習奉職ノ人ナリ）

二四三　男女御子順次

男女ノ御子六男五女御順次左ノ如シ、

第一　菊三郎君

文政十二年己丑八月三日御誕生、御正腹、

文政十二年己丑九月十三日江戸芝邸ニ夭シ玉フ、

御法号　観光院殿玉影電明大禅童子

神諡　玉籬稚菊彦命（タマカキワカキクヒコノミコト）

第二　寛之助君

弘化二年乙巳七月二十八日御誕生、母ハ横瀬三郎兵衛克巳女、

嘉永元年戊申五月五日江戸芝邸ニ夭シ玉フ、

御法号　麗光院殿天質惠明大禅童子

神諡　心裕寛國主命（ウラヤスヒロクニヌシノミコト）

第三　盛之進君

弘化四年丁未十一月二十九日御誕生、母ハ田宮安知女、

嘉永三年庚戌十月四日江戸芝邸ニ夭シ玉フ、

御法号　盛光院殿廓然慧照大禅童子

神諡　月盛麗光彦命（ツキサカルウラテルヒコノミコト）

第四　篤之助君

嘉永元年戊申十一月二十三日御誕生、母ハ伊集院仲二兼珍女、

嘉永二年己酉六月二十日江戸芝邸ニ夭シ玉フ、

御法号　篤入院殿實相起信大禅童子

神諡　篤志入木雄命（アツコロイリキヲノミコト）

第五　虎壽丸君　初儔次郎

嘉永二年己酉閏四月二日御誕生、母ハ田宮安知女、

同四年三月三日虎壽丸ト御改名、

嘉永七年甲寅閏七月二十四日江戸芝邸ニ夭シ玉フ

御法号　學法院殿直空自證大禅童子

神諡　葦原角美彦命（アシハラノミヒコノミコト）

第六　哲丸君

安政四年丁巳九月九日鹿兒島城ニ御誕生、母ハ伊

集院仲二兼珍女、
安政六年己未正月十日夭シ玉フ、御年三歳、
御法号　哲惠院殿玉客靈明大禅童子
福昌寺ニ御埋葬
神諡　哲稚照彦命（アキワカテルヒコノミコト）
第一　澄姫君（スミ）
天保八年丁酉八月六日御誕生、母ハ酒井主殿忠藎女、
天保十一年庚子六月晦日江戸芝邸ニ夭ス、
御法号　蓮相院殿實法幻鑑大禅童女、
神諡　紐鏡常縣姫命（ヒモカヽミトコカヽスヒメノミコト）
第二　邦姫君（クニ）
天保九年戊戌十一月二十四日御誕生、母ハ酒井主殿忠藎女、
天保十一年庚子五月二十四日江戸芝邸ニ夭ス、
御法号　淨臺院殿玉露蓮香大禅童女
神諡　眞秀邦玉城姫命（マホクニタマキヒメノミコト）
第三　暐姫君（テル）
忠義公御簾中
嘉永四年辛亥正月十六日御誕生、母ハ伊集院仲二兼珍女、
明治二年己巳三月廿四日逝、
鹿兒島常安嶺ニ神葬ス（国中寺院ヲ廃シ神葬祭ニ帰シタル故、新ニ葬地ヲ撰ヒ神葬ニ革メタリ）
神諡　稚櫻豐暐姫命（ワカサクラトヨテルヒメノミコト）此時ヨリ神葬ノ始トス
第四　典姫君（ノリ）
島津珍彦妻
嘉永五年壬子五月二十七日鹿兒島城ニ御誕生、母ハ前ニ同シ、
第五　寧姫君（ヤス）
忠義公第二御簾中
嘉永六年癸丑十月晦日御誕生、
明治十二年己卯五月廿四日逝、
鹿兒島常安峯ニ神葬ス、
神諡　綾御衣裏寧姫命（アヤミソウラヤスヒメノミコト）
篤姫君（天〔璋〕院殿）
実ハ島津安藝忠剛女、母ハ島津左膳女、御実子ニ御届、
近衛忠熙公御養女トシテ将軍家定公ノ御台所ニ御入輿
天璋院殿ト称ス、
○将軍家ヘ御入輿ハ安政三年丙辰十二月十八日、

○明治十六年癸未十一月二十日於東京外山邸御逝去、
御年四十歳、

二四四　男女御兄弟順次

長男　齊彬公
初菊三郎忠方、兵庫頭、齊彬豊後守、修理大夫、
薩摩守、

二男　齊敏公
初治五郎、文之助、久寧（ヤス）、
文化八年四月八日、母ハ齊彬公ニ同シ、
文政九年十二月四日備前岡山ノ城主松平上總介齊
政公ノ養子ト為リ、従四位下侍従ニ叙任、伊豫守
ト称ス、後左近衛少将ニ任ス、
天保十三年四月二日岡山ニ卒ス、年三十二、
法名　雄國院殿威山常光大居士

三男　諸之助君　初壯之助
文化十四年三月十七日、母ハ公ニ同シ、
文政二年四月十八日夭亡、
法名　瑤池院殿緑臺淨慧大禅童子

四男　久光公
文化十四年丁丑十月廿四日鹿兒島城ニ御誕生、生
母岡田氏（遊羅）、従三位宰相齊興公第三子、幼名
普之進（カネ）、島津山城忠公ノ養子トナリ、又次郎（忠
教）ト称シ、後山城、周防、和泉、久光、三郎、
大隅守、従四位下左近衛権少将、従四位上左近衛
権中将、従三位参議、従二位権大納言、左大臣、
従一位大勲位、明治廿年十二月八日薨去、国葬ヲ
賜フ、年七十一歳、

女子
順姫（ミチ）君
文化十年十月十二日生、母關根助右衛門常忠女、
天保七年二月二十五日江州膳所本多隼人正康融ニ
嫁ス、薙髪紫雲院ト称ス、後順貞ト改ム、

女子
祝姫君
文化十二年九月十四日生、母公ニ同シ、
文政五年十二月十五日土佐国高知ノ世子對島守豊
熙ニ嫁ス、智鏡院ト称ス、後ニ常侯ト改ム、
外ニ男一人女一人、共ニ夭亡（他腹）、故ニ御届ニ及ハス、

二四五　福岡侯宇和島侯ヘ与ル書

○この文書は、本文第一六三号文書の安政五年七月二十六日付黒田斉溥書翰（伊達宗城宛）と同文重複により略す。

二四六　黒田長溥公伊達宗城公へ御書翰（伊達家所蔵）

○この文書は第一六一号文書の安政五年七月三日付黒田斉溥書翰（伊達宗城宛）と同文重複により略す。

二四七　黒田長溥公伊達宗城公へ御書翰（九月十三日）

〃

別紙

八月五日之貴翰相達致拝見候、秋冷相催候得共弥御安寧奉大賀候、然ハ其御地之御都合明細被仰下共ニ仰天、何共申上様無之仕合ニ御座候、扨又小子参府之事極秘申上候処、万事厚ク御心配被下、秘密之事共被仰下、御厚情御礼難申尽候、扨又薩摩守参府之事段々御心痛（何等ノ点ニ御心痛アリシヤ知ルニ由ナシ）被下難有奉存候、然処同人事最早御承知可相成、不及是非次第（既去ヲ云）ニ御座候、一体同方之儀、近国ニ居候小子サヘ不快ト承候時、最早跡事ニ御座候、六月頃迄文通等モ致居候処、七月廿八日同方家老ヨリ小子家老迄表向掛合参リ、七月十七日之日付（既去翌々日）ニテ、薩摩守事此程中ヨリ不快之処、大切之容体ニ付、公辺御医（頭巾「宸翰」）者御願被成候旨申来候、尤側向初ヨリ掛合モ不参、何分不審ニ存候得共、兼々当冬参府之事ニ付、色々工風（甲第号参看）イタス旨、極秘直書（多人数召列ラレ御上京ヲ云、後巻吉井友実及ヒ宮島誠一郎カ記事参照スヘシ）ニテ申来居候間、右位ニ申立ノカレ候心得ニモ可有之哉、然シ大切ノ容体トハ余リ之事、　公辺御医者願候ト申事ニテ、又実病ニモ無之哉（前葉松葉甚介カ親話ニ参考スヘシ）共存候得共、何分不安心至極ニ付急々源八郎（吉永）事見廻トシテ薩州江遣申候、其後長崎表小子留守ヨリ早便ヲ以テ、薩摩守事七月十六日死去之旨、長崎奉行所江届有之候旨申来、誠ニ以仰天残念至極ニ御座候、然ニ薩州ヨリ一向不申来、八月十五日ニ家老ヨリ掛合来、右之事申来候、然ニ容体書薬方等モ不参、其上跡式之儀（相続ヲ云）等是非共小子ヘハ可申遣之処、其儀モ無之、甚以不審之至、早速ニモ同方家老ヘ直書ヲ以万事可申遣哉存候得共、無程源八郎（仝上）帰着之上ト存見合申候、八月廿六日ニ源八郎事帰着、委細相分申候、七月九日頃ヨリ時候ニ相障リ痢病之由、薬ハ坪井芳洲之由、容体書（前葉参照）同人出申候、随分同人モ出精イタシ

〔由脱カ〕候ニ候得共、何分薬功無之、残念至極ニ御座候、跡事ニ候得共、キナ塩等十一二日之頃用候ハヽ、万一ハ可宜哉共存申候、跡事ニ候得共、右容体書差上申候、此節源八郎薩州江着之所、表向之取扱ニ付色々尋申候テモ、表向計ニテ一向不相分候ニ付、山田壮右衛門ヘ対面致度存候得共、其事モ出来兼候得共色々申候テ対面致出来、右ニテ実事相分申候、一体何之申分モ無之候得共、夏以来余リ多用ニ付、側役共心配仕、磯之茶屋江滞留スヽメ、余程長ク滞留ニ参リ居、日々調練等世話イタシ、九日ニ大調練有之、磯ノ一里計之所ニテ昼過迄有之、帰路船ニテ釣等イタシ獲物沢山有之、夕方帰リ候由、其日ヨリ少々腹中不宜トノ事之由、其後容体書之通ニ有之候、一両日過壮右衛門江申候ニハ、殊外之草卧之由申候ニ付、芳洲ヘモ壮右衛門事心配ニテ承候処、先格別トモ容子ハ不申候由、然ニ何分心配ニ付、家老共ヨリモ漢法ニモ為見候様申候得共、薩摩守事キライニ付（漢法ノ薬ハ近代用ヒ玉ハサリシハ事実ナリ）、側向モ如何ト存候得共申候処為見候由、薬モ漢法ヨリモ出候得共、余リ用ヒ不申候由、一体御存之通京・江戸之御都合深ク致心配、病中モ其事極々心配イタシ（朝幕ノ間、外国処分其他ノコトニ就テ御苦心ハ御書面ノ如シ）、不快ニモ余程相障リ候様ニ壮右衛門ナトモ存候由、然処十五日之朝（朝ニ非ラス、夜入過頃ナリシト）火急ニ壮右衛門事呼候ニ付出候処、極側近ク呼、此節之不快トテモ不宜候間事々申置候旨申候ニ付、壮右衛門ヨリ左様ニ心配イタシ候テハ不宜、心長ク養生イタシ候様申候処、左リ之脈ヲ見候様最早脈無之候間、長キ事ハ無之ト申候ニ付見候処、脈無之ニ付、壮右衛門モ当惑仕候由、夫ヨリ色々委細申談等有之、昼前ニ同人ノ詰所ヘ下リ候由、直ニ一門初家老共ヘ薩摩守逢候テ、万事之事委シク申付、跡目ハ又次郎江相極メ、昨年出生之男子順養子ト申置候由（哲丸公）、其外申談候事ハ、壮右衛門モ下リ居候間存シ不申候得共、又次郎事ハ無相違候、尤当時世幼年之者ニテハ不安心ニ付、又次郎ニ極メ候旨呉々モ申候由、周防（久光公旧名、御辞退）江モ委敷申候処、段々断候得共聞入不申候ニ付承知仕候由、其後夕方ヨリ次第ニ疲労相増、十六日朝事切候由、何共以当惑至極之事共ニ御座候、年来

貴君ニハ格別ニ御懇意被成下候儀ニ付、右之〔始脱カ〕末実事不残申上候儀ニ御座候、嘸々御当惑ト奉存候、薩摩守事

平日之如気象必死ヲ悟リ、死去前ニ万事申置候事、誠以感心仕候、且又小子江ハ同人是迄秘蔵イタシ居候分離術道具、不残（御花園内ニ在リシ分析器械、皆舶来品ナリキ）無間違早々遣候様呉々申置候由ニテ、此節長持五ツニ入組参申候、其内ニ第一之秘蔵之品ハ、当年長崎ニテ取入候ホトカウヒー（ラカ）（撮影器）一式有之候、右ハ当年中ニ是非仕立候積ニテ、極々楽ミ居候処、大病ニ付小子へ遣候ハ、出来上リ可申トノ存念ト存候間、早々仕立薩州へ備へ可申存申候、然シ工合至テ六ケ敷、色々工風仕居申候、一枚写候得ハ百枚モ出来仕候品ニ付、出来致候ハ、入貴覧可申候、薩州事誠如夢仕合、万事火急相談相手無之、当惑之仕合ニ御座候、

一当年参府之儀（長溥公御参府）、段々御深切被仰下難有奉存候、猶又得ト相考ヘ重役共ヘモ追々相談可仕候、京都御召之御都合（齊彬公御一同御召ノ密勅下リタル事実）、何分日夜痛心此事ニ御座候、実ニ此先如何之御都合ニ相成可申哉、何共以勘弁ニ不能候、其上京・江戸之儀（朝幕ノ間和セサル説、当時ノ説甚シカリキ）、遠国迄モ種々風説被行、夫ヨリシテ何トナク人気一統不宜心配此事ニ御座候、其上コレラ今以流行、近国大流行可恐事ニ御座候、弊国ハ先無之、端々少々有之候得共、死亡之者十ニ一二位、誠以仕合御座候、尤国中ニハ少々死亡之者有之候得共、皆他国者ニ御座候、如何之訳ニ候哉不相分候、右等之都合極秘申上度如此御座候、不相替多用ニ付極々乱書落字書損多分ト奉存候、御推覧可被下候、頓首、

九月十三日　　福岡

宇和島明公

尚々、時候御自愛御専一奉存候、ケウエールニテ御手少々御痛メ被成候由、厚御用心可被成候、右御痛所候処（ノヲカ）御細翰被下候儀呉々モ奉（多謝カ）候、猶其内万々可申上候、以上、

緘

御一覧後御投火奉願候、

他見御断

宇和島明公　　福岡

極々秘密用御直披

〔照国公文書ならびに島津家書翰集（日本史籍協会編）にて校訂〕

二四八　参考　江夏干城記事抄

安政五年ノ秋八月末、　琉人被召列御参府ノ賦ニテ、

琉球ヨリモ其手当ナリシニ、内実ハ京都迄御出掛ノ御密定、其御手当被為在御参内ノ御行装ニモ被為及、御衣冠ノ御調モ有之候ヨシ、就中武器ノ御手当御手堅ク被仰付、大小砲弾薬等ノ事ナト昼夜ニ被仰付候、

其前同年四五月頃、幕府ヘ外国処分御見込ミ御建言被為在候様御達ノ折、伊達宇和島侯ヨリ如何ノ御見込ニ被為在候哉、御建言被遊候哉否哉ノ趣、且幕府当時ノ形況伺、侯ヨリ御書状ヲ以御尋越相成リシニ、御建白ハ於爰無用ニ存ルトノ御答ニ被為及、夫ヨリシテ御上洛ノ御手当モ被為仰出タリト、其前西郷隆盛江戸ヨリ罷下リ、幕府ノ挙動、井伊氏カ専ラノ成行、或ハ水戸・尾張・越前・長州等ノ事情詳ニ申上、救フニ道無キ旨申上セシニ、仰ニ曰ク、其方ハ如何ソノ計謀アリヤト、西郷申上ルニ、計策トテハ無之、右ノ成行言上致、貴慮奉伺度罷下候趣申上シニ、仰ニ一大策アリ、三四千〔頭注〕「兵ヲ率テ御上京」ノ兵ヲ（吉井友實ハ五千ノ兵ト語レリ、何レカ是ナリヤ）引テ上洛イタシ、其意ヲ堅フシテ後幕府ニ　勅諚ヲ以処分スルノ心得ナリト被仰ノ事アリタリシト云々、

外国船ハ鹿兒島ニ御引受ノ御内慮ニテアリシト、夫故各所ニ砲台ノ御築造昼夜ニ掛テ被仰出、山川兒ケ水辺ノ場所ハ松木弘安ヲ被遣御見立、神瀬ハ「ハントウエーン」ガ申立タル趣ニヨリ、江夏十郎ヘ被仰付、仮築被仰付、三四昼夜ニ仮ニ小築形ヲ顕シ、天保山ヨリ打試被仰付候ヨシ、風月亭ノ砲台ハ祇園砲台ノ上ノ岩ヲ電気地雷ヲ以、肥後七左衞門・宇宿彦右衞門等ヘ被仰付、其外櫻島辺ハ各郷ノ受持分ニ被仰付候、是安政五年五六月比ノ事ナリ、

江夏十郎長崎ヘ被遣候前、宇宿彦右衞門一同被召出被仰聞ニハ、不遠九月末比ニハ琉人召列参府致ニ付入用アルニヨリ、長崎ニテ小銃ノ近代式ノモノ弐千丁余、野戦砲モ十丁計、蒸気船一二艘都合致セトノ御事ニテ、其時分天下ノ事切迫シ、諸大名ヨリモ追々申来趣モアリ、若出立後ニ相成タラハ、直ニ大阪ノ様乗廻サセ、大小砲モ同様ニ致セトノ御事共ナリシトソ、又諸大名カ武器ノ事共能々気ヲ付ケ、ソ方ハ何ノ〻（ママ）入レタリ、（ママ）其利用ケ様〳〵ト申事マテ、能ク聞合セ申遣ヨトノ御事ナリシトソ、

鹿兒島ヘ勝安房・松元良順等蒸気船ヨリ廻漕ノ時分、〔頭注〕「勝安房ト御密話」磯茶屋ニヲイテ初ハ勝一名ヲ被召、幕府政体上ノ事ヲ

御談話被遊ンニ、勝言上ニ兎角幕役中ニハ一人モ当時ニ的セル人物無之、願クハ御前御引受被下スハ、日ニ月ニ衰ヘ行ク段申上シニ、仰ハ不調法ナカラ随分御相談相手ニ可罷成、今テハ御国威ハ素ヨリ将軍家ノ御為宜シカラス、又今形ニテハ京都ノ御都合宜シカラス、終ニ内乱ト可相成候間、於此方御相談ハ御辞退不致抔陰密ノ御咄被為在候ヨシ、其時分迄ハ慶喜公モ立派ナコトニテ、此人ヲトノ尊慮ニ被伺シ旨云々、後松元・赤松等一同ヲ被召出、松元ヘハ何分医術ヲ開ク所専一ニ有之度、古ヒタル漢法ノ人命ヲ誤ル少カラス抔ト、或ハ此方ヨリモ門人ヲ段々可遣候間、教育頼入ル抔ト〔頭注〕〔軍艦ノ数〕ノ御咄モ被為在タリト、其時又勝ヘ仰ニハ、差向キ日本ヘ此様ノ軍艦カ弐百艘、商船カ三四百艘、風帆船カ四五百艘モアラハ、可也ニ手弘キ事モ可調トヲモヘリ、此方ニ蒸気帆前三十艘位ハ、近年中ニ可求見込ナリト被仰タリトソ、

齊彬公御逝去後、天下ノ事内外物騒ノ向ニ成立、其時分近衛公ヨリ極密ニ福岡公ヘ御問合セラルヽ趣有之、齊彬公ノ御見込ハ如何ノ所ニ御聞定相成居候哉、

〔頭注〕〔主上ノ御痛嘆〕主上ニモ甚御痛嘆被遊、御寝食モ常ナラス被思召上トノ御事ナリシカトモ、　福岡侯此近年江戸御国ト御互ニ御行違ニ相成、御書通迄ノ事ニテ大略ノ事ハ承知候得共、入組タル見込ノ趣ハ不存候故、其旨御返事申タリ、水戸・越前等ヨリモ内密使抔ヲ以、聞ニ遣シタル事モアリシカトモ、何分井伊大老ノ権威厳敷折カラ、迫シトノコトニテモアラント、聞込居タル事抔ハ全ク不存トノ返答モ致置候タリ、果シテ無程死去後、　近衛殿初水戸・尾州・宇和島抔モ押込ラレ候事ニ相成タリ、薩摩守存生ナラ、アノヤウノ事ニハ不及カトモ被存候、薩摩守ハ家康抔ノ如ク智恵アリテ、物毎仕損シノ無ヒ人ナリシ故、能ク取計ノ道モアリタルナラン、却テ井伊抔ヨリ手便リデ相談スル場ノ事モアリシナラントノ御噺ナリ、如何ニモ仰ノ如キ事モアラントヲモワレタリ、又仰ニ我等カ養子抔モ薩摩守ヘ付ケ置クト立派ナモノニ可成ト存候、能ク人ノ信用ヲスルヤウニ教示スル人ナリ、大広間抔ノ付合ト云フハ、誠ニ無暗ノ人ノミ、乱暴人ヤラ愚昧人ヤラノ集リ所ナルニ、薩摩守カ登城スルト是迄カヤ〳〵ト云ヒタルニ、チヨイト鳴ヲ止ント云フヤウニテ、誠ニキマリカ能ク

付ヒタモノ、様ニアリタリ、不思議ニ徳望ノアル生レ付ノ人ナリ、　大信院様常ニ思召、他ニ替リタリト仰モアリシ、

御逝去ノ虚実ハ判然セス、井伊ハ頻ニ探索ヲ入レタル評判モ取々アリ、天璋院殿ヘ女ノ手ヲ以虚実ヲ伺ハセ初テ信ヲ措キタリトノ評判モ有リタリ、薩摩守ヘハ何トナク大老初メ大小役人皆恐レヲ為シ居タリ、不思議ノ徳アリシ人ナリ云々、

二四九　黒田長溥公市來廣貫ヘ御親話（明治十八年春）

福岡老公ノ御話ニ、薩摩守カ早ク死シタルニハ、我ハ手足ヲ失ヒタルニ同シ、我モ養子ニ行キテ政事向万端ノ相談相手ニテ、重役ノ進退等ハ一々相談セサルハナシ、在国ノ時ハ書状ヲ以テ申遣セハ、家来共ノ行状旁迄我ヨリモ能ク被心得居驚入ル事多ク、又疑ハシキ様ノ事ハ重テシラヘルト、其実ヲ得ル事ノミナリ、維新ノ頃迄存命ナラハ、アノヤウ面動ナル恥ケ敷事モアルマシトヲモエリ、又薩摩ノ事モ我等ニ相談シ被遣事トモ多シ、就中家督一件ノ混雑（近藤・山田・高崎等所刑ヲ云）ニ付テハ殊更心配セリ、三四人ノモノトモカクマヒ置事モ我等一人ノ存慮ニナク、実ハ老中阿部ヨリ我等ヘ内意ノ趣モアリ、薩摩守モ厚ク頼ミタル訳アリテ為忍置タリ、其時大隅守（斉興）ヘモ其時分ノ事申入タル事アリシカ、全ク不存事ノミナリ、因テ全ク家来ノ奸物共ガアノヤウノ大事ヲ引キ出シタルナリ、大隅守ニモ迷惑ナル事ナリ、又阿部カ其辺ノ事能ク存居候所、能ク取計ニ出タル事ナリ、筒井大ニ尽力シタリ、筒井ハ又トナク薩摩守ヲ存シ居テ、将軍家ノ後見職ニ出サントノ事ハ、毎々阿部ト及密談タル事アリショシ、是レハ阿部ヨリヲレガ度々聞タル事アリ、然共我モ辞退申タリシガ中々聞入レス、都合ヲ以引出スノ都合ニ致シ掛ケタリ、或時其ノ咄ヲ薩摩守ヘ申遣タルニ、随分政事ノ改革ハ受合ナリト押切テ申シタル事アリ、中々決断ハ能キ人ナリ云々、

京都ヨリ御内勅ノ後書状ヲ以申遣タル事アリ、我等ハ驚入、幕府ノ処如何ント存シ、時節少シ早クハ無イカト申遣タルニ、其返事ニ早クハナシ、其機会ニ臨メリト返申シタリ、薩摩守カ此程ニ迄申遣事故安心イタシ、

（頭注「内勅云々、宸翰甲第　弓参看」）

手初被致タル上ハ、我モ同ク跡ヨリ加勢可致決心イタセリ云々、

外国ノ処分ハ薩摩守カ存生ナルニヲヒテハ面白ク、京都ノ処モ能ク御解ケ合ニ可相成ハ必定ナルニ、何分時勢無致方、早世セシハ不幸ト云フモノ云々、

井伊カ尾張其外公家中抔ヲ暴ニ取計ヒタル事モ考フニ薩摩守カ存生ナラアノヤウノ事ハ不致、又井伊モ気ノ聞ヒタモノ故相談イタシ、品能ク取計ノ都合ナランカトヲモヘリ、井伊ハ中々一ト通リノ人物ニハアラサリシ故、味方ニシテ相談スルハ必定ナリ云々、

常ニ気小シト咄シニ、家老中大身ノモノニ一人モ用立モノナイ、丁度入組タル使テモ遣スモノ寡シ、是ニハ差支ルト被申タル事毎々ナリ、弟周防（久光公旧名）ハ学問モアリ、咄相対ニナルハ此一人ナリ、江戸ヘ四五年モ出シ取馴レルヤウニイタシ度心得ナリト被申タル事アリ、如何計リノ人物カ一度モ面会セサル人故、如何ノ人カトヲモヒ居タリシカ、果シテ見込通リニ死後ノ処、維新ノ次第共ヲ以見レハ、見込居ラレタニ違ハサリシトヲモヘリ云々、

大隅守ハ正直ノミノ人ニテ、一篇ニ聞込ムト信用シテ疑念ナキ人ナリ、何分口上ガ下手故咄カ少ク、逢フテモ取付ガ悪シキ人ナリ、

〔重豪〕大信院様・〔斉宣〕大慈院様薩摩守ヲ御賞被成、我ニモ毎々御咄被成タル事アリ、相談相手ニシテ宜キハ諸大名ニハ外ニ少ナシト被仰シ事モアリタリ、一緒ニ御前ニ出候折、子供ナカラ種々ノ御物咄ニモ乙名同書ノ様ニ、是ハ如何カヲモフカナド御尋被成様ノ事ナリ、夫レニ一々相応ノ御答申、中々我々カ追付才ニハ無カリシ云々、

以上記ス処ハ明治十八年ノ初夏、廣貫肥後七左衛門ト深川ノ御別邸ニ出頭、廣貫カ質問ニ対セラレ御物語ノ筆記ナリ、

二五〇　参考　在京某氏（原田才輔）在江戸某ヘ寄書

一筆致啓上候、然レハ大樹公薨去ニ付、当家ヨリ納経使者宣衛被差立候、右ニ付二十三四日ノ内ニ致発足候、此度之儀ハ何卒御参向之

勅使方ニ致随身用人共ニテ参府之心得ニ有之候処、御頼ニ相成御家モ無之、不得止事拙子ヘ被申付候、准后使久世三位様・交野少納言様、

勅使三條様ヘ御沙汰之処、十二三日以前ヨリ実ノ御所労ニ有之、久我右大将様御断ニ相成、華族前内府様之

中へ　御沙汰ニ相成候処、御一同ニ御断之由、先年正親町一位様ニテノ御例有之由、昨日ヨリ唯今ニ至リ御治定無之、誠ニ珍事ニ御座候、久世様・交野様ハ昨日午後御請ニ相成候処、

勅使ノ御人体彼是今ニ御治定無之候、右様ノ次第ニ候ハ、廣瀬（幡カ）大納言様へ落込可申哉之下評ニ御座候、依之当方之使モ日限疑ト不分為メ見合居、時刻移候ニ付後野生ニ被申付候、

此度ハ

勅使三條前内府公（實萬）へ被仰出候処云々有之、因テ享保正親町一位殿ノ例ヲ以テ、坊城一位殿前大納言御沙汰之処、御老体御年七十七ニテ御断、其後摂家之大納言（九条殿御息二条殿・近衛殿御息摂ナルヘシ）二人ナルヘシ）へ御沙汰ノ処、是又御断、無拠廣橋（幡）殿へ被仰出候処、是亦御断ニ候得共、御受不被申候得ハ除官可仰出旨厳

勅、無拠御受也、尤久我右大将殿へ右大将辞官之義御内意有之、廣幡殿（忠礼、贈経勅使）關東下向中右大将ニ可被為任之処、久我殿更ニ御辞退無之、廣幡大納言ニテ御下向ニ相成候云々、

二五一　齊彬公御簾中御逝去布告

午九月十日申ノ下刻、池田播磨守様（頼方、大目付）ヨリ板倉主計頭様（勝殿、安中藩主）御一名之以御切紙、内藤紀伊守様御渡候由ニテ、左之御書付写一通被差越候旨、右写一通以御手紙御到来、

内藤紀伊守殿御渡候御書付

御詰衆

大目付へ

松平故薩摩守妻（恒姫君）今暁死去ニ付、

天璋院様（御実子ノ届出）御定式之通、今日ヨリ五十日十三月之御忌服被為請候事、

九月十日

九月二十七日唯今申中刻、池田播磨守様ヨリ内藤駿河守様御一名之以御切紙、内藤紀伊守様御渡候之由ニテ、御書付写一通被差越候付、右写御手紙ヲ以来ル、

内藤紀伊守殿御渡候御書付

大目付へ

天璋院様御忌解之儀田安殿ヨリ被申上、掃部頭（井伊直弼）老中ヨリモ相願候付、明二十八日ヨリ御忌被為解御精進モ被為解候事、

九月二十七日

二五二　齊彬公薨去後ノ形況

八月八日大家家定公薨去、二十六日島津久福往啓宰相公（齊彬公）於高輪邸、前比宰相公得大府告将発之国故託近属此日発邸、由是近属諸侯会議于澁谷邸、晦日奥平侯昌服持公所顧命願書、呈於月直閣老間部下総守詮勝、第九月朔日訃音亦達、戸田侯氏正就内藤紀伊守信親報以其実、三日信親乃召御先手大久保喜右衛門伝之、朝旨以命忠徳君受父服忌趨召於江戸、奥平侯代君拝命、乃四日久福発邸馳国、夫人恒姫君聞公訃音疾愈大漸十日遂卒於芝邸、年五十四、是為芳樹院君、

十月十一日宰相齊興公至自江戸玉里館入、十四日久福還府趨館報事、宰相公乃使国老新納駿河久仰詣重富第、迎忠徳君移自明日居于府城、故十五日久福進謁忠徳君於御座間以報朝旨、君乃拝命受父服忌将趨江戸時、値百日乃二十五日詣福昌寺、特設法筵命許多僧侶虔陳庶奠恭祭于順聖公之霊、其辞曰（上ニ記ス、故ニ茲ニ略ス）

二五三　江戸風説記

編年雑録ニ云フ、此風説書虚事モ多ク相見得候得共、時之風評ヲ認候事ニ相見候ニ付、江戸ヨリ下リ候侭認ムト云々、

此度西丸御本丸ヲ相続之儀ニ付、大変之事出来タリ、其始末ハ水戸隠居三位前中納言齊昭公邪計ニテ、御七男一橋刑部卿慶喜公ヲ西御丸ヘ建ント思召（当時俗論家ノ唱ル所如斯）、阿部伊勢守様（正弘、福山藩主）ニ御同意有之、御同人様御請合被成、御相続之儀ハ一橋殿可然之段、御老若中ヘ被及御相談候処、松平和泉守様（乗全、西尾藩主）其義ハ不宜、紀伊宰相殿能御近親ニ付順道ト、彼是御論ニ相成、終ニ和泉守様御退役ニ相成候程之義故、其侭御延引相成居候内、阿部伊勢守様御死去ニ相成候付、無詮方水戸殿御穏密ニ御上京、御摂家方ヘ御頼向被成、近衛公・二條公・廣幡公・今出川公・鷹司公御親類也、当時異賊渡来之折柄当将軍（家定）病気罷在候上、右　大将軍若年ニテハ政事不行届候付、是非一橋ヘ西丸御相続之上被仰上候由、御聞入有無不相知候得共、御帰府之上又々右之御評定ニ相成候処、大老井伊掃部様中々御聞入ナク、紀州公先達テ御本丸迄御乗込、御披露有之候付テハ、此将軍ヲ失奉候ハヽ、御幼君ニテハ不相済候ニ付、一橋公ヲ

御本丸へ被建候思召ニテ、奥医師岡櫟仙院法印へ申付、糀町御用菓子屋へ申付、毒菓子為拵献備相成候処、先月下旬ヨリ御病気御差発候得共、諸侯方唯一ト通リ之御病気之様存居候処、奥御祐筆志賀金八郎ト申人、右之訳合存被居候由ニテ、当月上旬井伊中将公御登城前ニ右之始末ヲ申遣シ、直ニ切腹被致候、井伊公ニハ早速御登（城脱カ）、御老君ニモ同断、町医師井（伊）東玄朴御呼出、急御用ニ付御城中ノ口迄乗物御免、同所ヨリ若年寄御案内、御次ヘ罷出候迄乍歩行御召抱、直ニ御容体相伺候様被仰渡、御伺申上候処、御毒気ニ相違無之段申上、御断食ニイタシ、御養生ニ相懸候得共、手後レ候ニ付終ニ無御叶、去ル九日被遊薨去候、右荷担之尾州公（徳川慶勝、名古屋藩主）・越前中将公（松平慶永、福井藩主）蟄居、本郷丹後守（秦固、川越藩主）様御役御免、水戸御隠居モ本郷屋敷ヘ堅慎被為在候様、去ル三日被仰渡之、櫟仙院始相加リ候者共成行之程不相知候、近来殿中ハ昼夜無差別御役人方詰切也、右一条加担之類十八大名、井伊公家来ニモ三人程有之由、未タ是等ハ御穿鑿届兼候由、依テ井伊侯ニハ毎朝御登城之様ニ空駕御差出、御自分ニハ殿中ヘ御詰切、蘇鐵之間ヘ服心之御家来三十人程昼夜共御差置被成候由、御老若始御役人方御登城之節ハ、当時柄ノ義ニ付腰弁当ニテ出仕被致候、将又此度又々英吉利・魯西亜賊共神奈川沖ヘ罷越、諸品交易之義相願候ニ付、愛宕眞福寺ヘ御差置、彼是御評論中、右之義出来候付、是非々々御答モ御内輪混雑之事故、不被為出来候ニ付、先一通リ願節御聞届ニ相成、帰船之旨被仰渡候、愛宕下居住之兎ハ、元船三艘品川沖壱里計ノ所ヘ碇入罷在候、都テ両国之船拾艘罷越居折、彼国争戦有之段注進之由ニテ、二三日以前致出帆候、右之御混雑中ニハ候得共、七夕御祝儀モ被為受、穏便成御取計共有之候、万端井伊侯御取揃之由、古今共例鮮キ英才ト一統感心イタセリ、尤新規御出入町人等御差留ニ相成候由、井伊ナクンハ如何程之騒動ニヲヨハンモノヲ、能折柄ニ賢才之御大老出来候モノヤトチマタニ申アエリ候、京大坂御警衛モ先達テ夫々被仰付候、誠ニ井伊侯ニハ足元ニ佞臣有之、薄氷ヲ踏思召左社ト愚案仕候、将又水戸御隠居ニテ悪業毎々有之候ニ付、御当主中納言慶篤卿（御隠居之御嫡男也）種々御諫言申候処、終ニ御確執ト成、空知ラヌ体ニテ御呼寄、御酒宴ニ事寄セ、御肴ニ毒ヲ仕込被遣候得共、異成匂ヒ有之候ニ付、御近習ヘ為試候処無程相果候也、故ニ以後御面会

モ無之由、然処今度右等之悪行相止、終ニ邪計相顕レ御蟄居被仰付候得共、夜分抔折々御歩行、其上法外之事共有之、附々之者ヨリ種々諫メ候得共、不相用候ニ付、御附家老山邊主水正被差殺候由、右ニ付御当主慶篤殿ニハ格別之御咎モ無之候得共、御面目無之、御自害之由風聞ニ候、実説ニ相違ナキノ由ニ御座候、当時御府内上下一統人気不穏当事ニ御座候、何卒平穏之程奉多祈候、

二五四　当時江戸流布ノ説

三国無双邪気払　井伊妙薬　嘉紋散

第一世上ヲ直シ、天下之諸用ヲト、ノヒ、皇国ヲ循環サセ、異人ノハタラキヲト、メ、大人小人ノ悪風ヲハライ、直ニ血ヲ補フ事実ニ神ノ如シ、此ノ薬累代秘伝トイヘトモ、国家安穏ノタメ世上ニヒロメイタシ候、試ミテ利事ヲ知ルヘシ、

常盤橋添地ニテ

売弘所　太田屋

西丸下

取次所　鯖江屋

右太田屋ハ太田備後守、鯖江屋ハ間部下總守ノコトヲ云フナルヘシ、

二五五　三條實萬公ヨリ齊彬公ヘ送ラレシ御下書ノ写安政五年七月（此御書齊彬公御逝去後ニ到達セシナラン、原書三條家ニアリ）

残暑之節愈御安清欣慰之至存候、貴国暑気如何御座候哉、当地今年ハ土用中ニモ雨勝ニテ、暑威ハ薄ク、能凌至此頃同様ノ事ニ候、誠ニ先達テハ御深情ニ御書状被下候テ、大慶之至リ忝存候、昨年不図於陽明御家得拝謁（安政四丁巳四月廿日）、千万大幸ニ存候、其後ハ疎濶ニ打過御無音申入候、預芳翰本懐之至ニ存候、旁以早速御答且御見舞モ申入度存念ニ候処、彼是延滞相成無申状候、別書荒涼乱書失敬之段、偏ニ御宥怒希（知カ）入候、残暑折角御自愛専要ニ存候、万々期後信申残候、不尽、

七月六日　實萬

薩摩守殿

扨外夷之義此頃之模様ニテハ、如何之次第ニ相成可申候哉、何分天下安全所祈ニ御座候、当春以来誠ニ一同痛心候事ニ有之候、当地之義ニモ種々御聞及モ御座候

半ト存候、人々之義彼是ト世上評説致候、尤暴論・書生論ナト可採用事ニ無之候得共、〔頭注〕「浮説ノ説云々」浮説共申唱候、下官儀等モ其類ナトニ御聞取ニテハ甚困苦候、決テ左様ニハ無之、唯々公武御合体国家ヲ不被誤様所冀ニ有之、御照察被下度候、左府公〔近衛忠熙〕トモ毎々御互ニ其辺ノ事共申居候事ニ御座候、将又閣老一二御役御免復役等有之旨伝承候、委細之儀ハ一向難分、何角ト關東ニモ御混雑ト察入候、万々期後便候、以上、

御別書忝拝読候、右ハ天下之御為御書取被仰聞之趣、段々御精忠之義誠以感佩仕候、先達テ夷人申立之儀如御示諭当地ヘモ被仰上ニ相成、下官共ヘモ御沙汰有之致承知、実ニ　皇国之御大事ト御同前ニ痛心候義ニ御座候、於　朝廷深被悩　叡慮、誠以恐入候、關東ニハ不一方御配慮之御事ト存候、列国御方々御苦慮之程実ニ察入申候、国家ノ藩屏夫々要害御手当御座候趣ニ承候得共、於貴国ハ殊更ニ御厳整〔頭注〕「貴国ハ殊更ニ御厳重云々」之趣不誰知者無之、被安宸襟候御事ト存候、右一条ニ付關東江御建白、旧冬御差出シ〔頭注〕「建白書下書参考」御案文為見被下致感悦候、段々御精誠之至不堪欣躍候、且先達テ御内話（安政四年四月廿日）モ御座候

關東之御様子、閣老衆交代之度毎御処置振変化候義ニ付テハ厚御配慮有之、西城ヘ賢明之御養君被仰出候義、当時之急務ト御勘考之由、其段御申立御座候趣、此儀ハ兼テ御同志之御方御申合、御心配被成候旨先達来追々御申立之趣、実ニ以御尤至極ノ御事ト致承知候、關東之御模様ハ難察候得共、右一条ハ実ニ国家之御大事ニ有之、於当地モ深心配仕候、此義内〔頭注〕「宸翰甲第　号参看」勅被仰出候様御懇忠之御内志、誠以感心之事ニ候、尤右ハ左府公ヱモ御申入有之候由、宜敷勘考候様御密示之趣委細御尤ニ致承知候、其以来左府公段々御心配、下官ニモ乍不及精々勘考、左府公御内談申入候事ニテ致周旋居候処、彼是都合モ有之、〔頭注〕「堀田ヘ御沙汰」漸堀田帰府之前御内沙汰ニテ、急務多端之御時節御政務御扶助之為、御養君被仰出候様被仰含候事ニ御座候、委細ハ先達以来左府公ヨリ御申入之御事ト存候間、別段ニ巨細ハ不申入候、然ル処当節關東之御模様伝聞候ニハ、紀州ニ御内定ト申趣、実事ニ御座候ハ如何之御都合哉、幼年之方ニテハ当節御差急之詮モ無之、折角御心配御内志（同カ）之方御見込モ致相違候事ト、甚不堪痛歎義ト存候、彼是御子細有之候事トハ存候、乍併表面御人体ハ御所表ヘハ未申来、先比来

モ左府公ニモ段々御心配、下官共々勘考候得ハ何共六ケ敷次第ニ御座候、内実大老ヘモ申遣候義モ有之候得共、何等之模様モ難分候、彼是嫌疑等御座候テ、扨々当惑候事ニ候、何分国家公武之御為専一ト存候得共、当今ノ形勢無術義ニ存候、猶々貴官ニモ御配慮之御事ト御察申入候、〔頭註〕「関東格別ノ御間柄」関東格別ノ御間柄ハ、更ニ雀躍候事ト存候、唯々天下之御為メ祈入申候、御懇情之御内状千万忝存候、先達以来得貴意度存候義共有之候得共、左府公ヨリ御内々伺候事ニモ有之、別段不労御面倒御無音ニ打過、前条之御答ハ何レニ先頃可申入存居候、彼是心外延引致候、御含容可被下候、先ハ御答旁如此御座候、頓首、

七月六日

西城之義、土佐守（土州侯）ヨリモ先達来被申越、御同意之事ト存候、是モ深心配之趣定テ毎々御往来被申候義哉ト存候、何分関東奥向御都合、閣老之辺モ彼是有之欤、御配慮ノ御事ト呉々御察入申候、

安政五年七月六日

二五六　順聖公御三回忌懐旧詩歌

茂久公（忠義公旧名）

寂々悲秋日碧悟初落辰商声一何切臥病倍思親

典子（ノリコ）（島津珍彦妻）

曇りなき月にむかへとたらちねの
御影は更ニ見へぬ悲しさ

島津周防忠教（久光公旧名）

深かりし恵の露のかす〳〵を
しのふ三とせの袖そかわかぬ

島津樂水忠公

むかひ見る月もこよひは曇なり
過にし秋をしのふなみたに

奉追悼順聖公　島津又次郎忠鑑（珍彦旧名）

昭々令徳理斯民胆仰恩威教化新無那疾風権玉樹三回
秋色転傷神

松壽院（種子島未亡人）

ませし世の光は今に天てらす
月に涙にくもるおも影

島津圖書久治

徳音契濶恨無窮荏苒三秋一夢中懐矣不忘悲不食歔欷
把涙仰仁風　　島津左衛門久徴

なみたのみ袖にしくれてみとせ経し
君か御影をしたふかなしさ　　川上筑後久封

一自英魂天上帰人間無路仰容儀焄蒿悽愴真如在方是
君臣奉祭時　　島津伯耆久福

袖の露かはきもあへすいつのまに
みとせの秋のめくり来にけん　　島津　登久包

久方の月をは世々のかたみにて
雲かくれにし君そかなしき　　川上但馬久連

雄気堂々未半生四方誰不惜英明已逢今日三回忌敬拝
霊帷涙湿纓　　島津大蔵久昌

空たきの煙の末もうちしめり
なきあとしとふ袖の露けさ　　頴娃織部久武

あやにくに君か御影を誘ひきて
涙すゝむる秋の夜の月　　菱刈杢之介隆徴

夢の世と思ひなしても夢ならて
三とせの秋はかへり来にけれ　　諏訪數馬武衛

引かへん世をは待しもむかしにて
仰くかひなき弓張の月　　島津靱負久倫

おもひ出し袖を濡すや秋の雨
おもひあまりかはらぬ袖のいつとなく　　友野市助

三とせのあきにおふや果南
いと早も三とせの秋のめくり来て　　山口直記

露けき袖をまた濡しけり
三とせまて過れて猶も恵みある　　町田内膳

君かひかりを仰かさらめや

三原藤五郎

袖の上にかけし恵みの露の身も
こゝろをしほるうき秋の空

有馬舎人

亡君の三とせの跡をしのふれは
なみたかすそふ秋の夕くれ

蒲生郷右衛門

いつしかと恵の露をかけし袖に
けふは涙の玉そみたるゝ

名越左源太

歎つゝ思へは秋の来るからに
すきしもいまとしたふことの葉

郷山甚之丞

澄月にむかへはませし其侭の
すき行秋をわすれさりけれ

東郷左太夫

袖の露つゝむにたへす澄わたる
つきのもなかも三とせ立けり

伊集院仲二

いと早もめくる三とせのけふは猶
忍ふ涙の袖もかわかぬ

三原藤十郎

こゝろなきあさちか原の虫すらも
あわれむかしお忍てやなく

野村傳左衛門

夢かともかつは思ひし甲斐もなく
三とせのけふときくそ悲しき

鈴木宇左衛門

中々に悲しき物は過し秋を
しのふるけさのこゝろなりけり

平川一二

いけるものいつれか今宵泣さらむ
悲しき秋のめくり来めれは

谷村愛之助

露にのみむすほれつゝなからへて
いつまて絞る袂なるらん

木藤角太夫

十六夜の月に御影の忍はれて
仰は曇るちゝの涙に

指宿雄四郎

なき影をしたふ心のつれなきは
過にし秋にかはらさりけり
田中清右衛門

年月のうとく成るとも十寸鏡
たれか御影を仰かさらめや
田中蘇八郎

三とせ経したからの池の花に猶
君か御影のひかりそふかし
肥後宗之丞

とこやみとなりし其世にかはらぬは
三とせの秋のこゝろなりけり
肝付富之助

さやかなる月に御霊の影見へて
露たにしけき我なみたかな
伊集院

うきなから三とせの秋のめくり来て
いよ〳〵袖を絞りぬるかな
兒玉雄一郎

昔思ふ心の雲は秋の夜の
つきの影さへ照しかねつゝ
右松十郎太

幾秋かかわかぬ袖の露の上に
おきそふものはなみたなりけり
山口彦四郎

三とせ経し君か御影の跡とへは
袂をしほる外なかりけり
伊集院良助

はかなくも雲にかくれし月影を
したふまに〳〵年はへにけり
白石如瓢

嗚呼寥然転患哉光帳如夢已三回恐懐旧事秋風夕涙湿
衣裳心作灰
清水養正

風そよく音たに秋はものうきに
わきて悲しき夕なりけり
河野元中

ことの葉の恵の露は深けれは
みとせのけふも袖はかわかし
上原玄與

山の端に入にし月の跡とめて

むかしをしのふ袖は露けき
平川玄齋

君ませしむかしを忍ふ袖の上に
つよもみたれて秋風そふく
永瀬

思ひきや君におくれて老か身の
三とせのけふにあらんものとは
花野

世にまさはいかに仰かんもろ人の
過し御影をしたふはかなさ
春野本名あつ子

藤衣今はとぬきしこそよりも
今年の露はおきところなき
梅子

手向うと向ふ硯の涙川
かへらぬ秋をしのふはかなさ
はやま

世の人になへてかゝりし御恵の
露のみ残る秋そ悲しき
かへ子

過し世のみとせのけふの秋といへは
猶しのはるゝ袖のしら露
初せ

世に残る光を見ても恋しきは
むかしの秋の御影なりけり
きり子

夢とのみ過にし君は大空の
ほしと成てや世を照すらん
國子

朝顔も露にしほれて古への
御影をしたふ色はみへけり
沢田

松虫になく音をそへて千歳もと
いのりし君を忍ふ悲しさ
なみ子

なき渡る初雁かねも月影の
雲かくれにし秋やこふらん
杉の

蓮葉に涼しく結ふ白露は
きへし御たまの行衛成らん

島おか

ませし世のみとせの秋をしたひつゝ
忍ふなみたに袖そぬれけり

たの子

いにしへの御影をしのふ露よりや
野辺の草葉も色香るらん

せき子

君まさはみと世の秋をかさぬれと
猶かわかぬは袂なりけり

〔表紙〕

齊彬公史料

市來四郎編
安政五年

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事鞅掌史料（紙数七三枚）」の記載あり〕

目録

間部下總守上京照会
無名通信（東久世伯云、此書清川八郎ニヤアラン）
内藤豐後守伺書（伏見奉行職）
無名書牘
巽辻少将書牘
大日本国有志中ノ書（人名ナシ、東久世伯云、有馬新七ナラン）
鎌田出雲京都御警衛御受書（原書近衛家所蔵）
松平大隅守御請書（近衛家所蔵）
松平大隅守近衛家へ上申書（仝上）
鎌田出雲ヵ事蹟、市來四郎演説速記録鈔

二五七　間部下總守上京照会

今般水戸前中納言殿御慎被　仰出候後、別紙之通風聞有之候、一体前中納言殿言行御相違不容易儀モ有之、無拠御次第ニテ、御慎被仰出候儀ニ候処、隔地之儀ニ付、如何様ニ御聞込可有之モ難計、自然相違之儀相聞へ候共、御政務筋ニ付　御口入等決テ無之筈ニ候得共、万一御聞込違ヒ、何等之御沙汰御座候様相成、両御地（京都・江戸）之御場合ニモ相拘リ候御儀ニ至リ候テハ、以之外之儀ト一同深ク心配仕候、尤私上京仕候上、委細之訳柄可申上候得共、此節　公方様（家定）御大病ニテ、彼是延引ニモ可相成、前条風聞之趣モ有之候ニ付、不取敢此段申上候、宜御差含御座候様仕度存候、

七月廿一日　　間部下總守詮勝

廣橋大納言殿
萬里小路大納言殿

右一紙

風聞書塵紙ニ御座候間写取可申処、差急候間其侭差進申候、

右一紙

間部下總守殿　　広橋大納言
萬里小路大納言

貴翰令披誦候、今般水戸前中納言慎被　仰出候後、別紙之通風聞有之候、一体前中納言言行相違不容易儀モ有之、無拠御次第ニテ慎被　仰出候儀ニ候処、隔地之儀ニ付如何様ニ御聞込ニ可有之モ難計、自然相違之儀相聞候共、御政務筋ニ付御口入等決テ無之筈ニ候得共、万一御聞込違、何等之御沙汰御座候様相成、両御地（京都・江戸）之御場合ニモ拘リ候儀ニ至リテハ、以之外之儀ト一同深ク御心配被成候由御尤之義、且貴殿御上京之上委細之訳柄御申上可被成候得共、此節大樹公（家定）御大病ニテ、彼此延引ニモ可相成、前条風聞之趣モ有之ニ付、不取敢此段御申越、宜差含候様被示聞、委細致承知候、

七月廿五日

尚々、別紙風聞書内々令一覧候、於当地ハ右様之風聞ハ一切未承候、猶亦差含可申候、去廿一日之書翰今日到着、先為早速及答候、

右一紙同役執筆

風聞書麁紙ニ付、写取可被成之処、御差急其侭御差越之旨入御念候儀令承知候、

右一紙口上光成卿（広橋大納言）筆

伝奏衆江呈　　書翰候間、早々可被達候、以上、

七月廿一日　　間　下總守

大久保大隅守殿へ

大久保伊勢守殿へ

猶以東海道川支之程難計候間、中山道通宿次差立候事ニ候、且又伝奏衆ヨリ返翰被差越候ハヽ、是又中山道通早々刻附宿次ヲ以可被越候、以上、

右一紙光成卿筆

間部下總守殿　　広橋大納言
萬里小路大納言

一翰令啓達候、愈御勇健珍重存候、然ハ此度勅諚之趣被仰進候、右ハ無拠御次第モ御座候テ被仰進候儀ニ候、先日内々御申越、外々ヨリ風聞等御聞込ニ

相成、御口入ナト有之候儀ニテハ毛頭無之候得共、書取ニテハ角々敷相聞場所モ有之候故、御聞取様ニテ両御地之御場合ニモ拘リ候儀出来候テハ、実以深心配致候、右之通不悪御差含可被下候、猶委細之儀ハ上京之上可申述候、以上、

右一紙正房卿筆

広橋大納言殿
萬里小路大納言殿　　間部下總守

貴翰奉拝見候、益御勇健被成御座珍重之御儀奉存候、然ハ此度　勅諚之趣被　仰進候、右ハ無拠御次第モ御座候テ被仰進候儀ニ候、先日内々申上置候外々ヨリ風聞等御聞込ニ相成、御口入ナト有之儀ニテハ毛頭無御座候得共、御書取ニテハ角々敷相聞候場所モ有之候故、伺取様ニテ

両御地之御場合ニモ拘リ候儀出来候テハ、実々以深ク御心配被下候ニ付、右之通不悪差含可申ト、猶委細之儀ハ上京之上御示談可被下候段被仰下候趣奉畏候、右御請如斯御座候、以上、

八月廿日

右一紙八通（七通現在、一通ハ散逸乎）八月廿五日迄秘蔵

八月廿四日自關東返状到着披露、廿五日御内評、廿六日武伝ヨリ返書如左、尤伺定有之、

猶以此度御沙汰之趣有之廉ヲ以、御中陰中ニハ候得共、下總守儀此節発足上京候テモ、御不都合之儀ハ有之間敷哉、何分其地ニ於テ御模様難相分候間、勘考之上早々申進候様被成度旨被示聞令承知候、下總守之儀ハ元来被召候ニテモ無之、上京之可否并比合等ハ不申進候、自關東被差登候義ニ候ハヽ、忌中ハ参　内等難相成候間、其心得ニテ治定有之候様ト存候事、

二五八　無名通信（東久世伯云、此書清川八郎ニヤアラン）

謹按ニ、方今　幕府世子（家茂）幼冲ニシテ、輔道其人ニ乏ク、奸臣（井伊直弼等之輩）其際ニ乗シ、上ハ天意ヲ奉揚スル事能ハス、下ハ其宗戚ヲ保安スル事能ハス、実ニ天下危安ノ機今日ニ係リ、卿（章）茅ノ士ニ至ルマテ焦思労心仕候、近頃巷間ノ風説窃ニ承及ヒ候ハ、再詔アツテ　幕府ニ下リ、殊ニ水府ニ勅セラレ、列藩諸侯ト同ク　幕府ヲ匡正セシム□（不明）吁嗟、

朝廷幕府ヲ御匡済ノ厚キ、天下ヲ御憂思ノ深キ、誰カ感戴奮励シテ

天意ヲ奉揚セサランヤ、於是乎、更張之御政首ヲ翹テ待ヘキサリ（ナカ）、然テ固陋ノ心窃ニ憂懼仕候事コレアリ、鉄鉞ヲ犯シ、謹テ芻言ヲ陳シ奉ル、蓋シ当今　幕府ノ勢ヒ振ハストハ申ナカラ、奸臣ノ権猶盛ニコレアリ、其愛憎スル所ノ者、黜陟手ヲ翻スヨリモ易ク候、宗戚ノ大藩尾・水二氏ノ如キモ、甘シテ其制ヲ受ケ、唯異議ナキノミナラス、惴々トシテ其旨ニ忤ハン事、是懼候、幕府ト宗戚トノ威権□（不明）軽重後シテ知ラレ候、況ヤ諸侯ニ於ヲヤ、是他ノ故ニテハコレナク、世子ヲ挾ミ候ヘハナリ、今ヤ水府能ク

勅ヲ奉シ候モ、其建議決シテ合ヒ申間鋪、合ヒ申サストキハ、唯用ヒサルノミニテハコレ無ク、従テ其已レニ利アラサルヲ疑ヒ候ハン、水府タルモノ亦一タヒ

勅ヲ奉シ候ヘハ、其合サルヲ以テ黙止セハ、何ヲ以テカ天意ニ奉対仕ヘキ、因テ鋭意其議ヲ主張仕ルヘシ、是ニ於テ百計其奸ヲ構ヘ、コレヲ罪ニ陥レ、其極ハ怨ヲ天朝ニ帰スルニ至リ申ヘク、凡小人ノ常情ヲ然リト仕候、後来

朝廷大ニ

勅ヲ賜フ事アランモ、其人コレアル間敷、幕府ハ天下盛衰□（ニ由カ）□ル所ニ候ヘトモ、方今ノ如キハ尾・水ノ盛衰、天下ノ最関係スル所ニコレアリ候、外藩諸侯ノ如キハ或ハ

特命ヲ承ルト雖、其議行ハレサルトキハ、遽ニ如何ントモ仕候コト能ハス、幸ニ奮励身ヲ率ヒ、又義ニ就キ退テ其国ヲ固守シ、兵ヲ出シテ京師ヲ衛護シ奉リ候トキハ、或ハ能ク成ス事モコレアリ候ハンカ、雖然治平日久ク苟安ヲ好ミ候時ニ候ヘハ、天下響ノ如クニ応スルモ計リ難ク、奸臣其制シ難キヲ知候トキハ、必外夷ニ論シテ言ワク、　幕府通商ヲ欲ストイヘトモ、某藩

勅ヲ挾ミ幕兵ヲ拒ム、汝宜ク某ノ藩ヲ脅嚇スヘシ、彼レ奔走ニ労レ、遂ニ自ラ斃レン、是皆汝ノ功ナリ、然則永ク交親ヲ通ント、外夷コレヲ聞候トキハ、愈其策ノ行ルヽヲ喜ヒ、力ヲ竭シ、軍艦ヲ遣シ、某藩ヲ騒擾仕ヘシ、而シテ内ハ□□□（不明）ヲ遣リ、京師ヲ襲ヒ候ハン、其時ニ方ツテ内外敵ヲ受ケ、兵勢全カラス候トキハ、恐クハ敗ヲ取ルニ至リ申ヘク、天下有志ノ諸侯コレアリ候モ、其覆轍ヲ見、軽々シクハ動キ申間鋪、然ル後

ニ奸臣

天位ニ逼リ、其説ヲ張リ、某藩幕議ヲ拒ミ、外夷ト兵ヲ交ヘ候トコロ、一戦ノ下其国ヲ失ヒ候、外夷ノ抗スヘカラサル事如此ニ候ト□(不明)ベク、

朝廷其不臣ヲ怒ラセラレ候トイヘトモ、下ニ勤王ノ士ナキトキハ、任テ其制ヲ受サセラレサルヲ得ス、

天威一タヒ屈セラレ候トキハ、則チ堂々タル　神州遂ニ左衽ノ辱ヲ受ンモ計リ難ク、窃ニ憂懼仕ル所ニ候、因テ不測ノ誅ヲ顧ミス、叨ニ愚策ヲ左ニ記シ奉リ候、恭惟ルニ、

天勅一タヒ下ル、寔ニ機会失フ可ラサルノ秋ニ候、且大樹公（家定）新ニ薨セラレ、　天使東下ノ時ニ当リ復得ヘカラサル好機会ニ候、伏テ願クハ殊ニ正卿　天使ヲ撰ハレ、江都ニ下サレ、尾・水両侯ノ賢明ナル方ニ手詔ヲ以大ニ勅シテ宣ク、今ヤ天下多難ニシテ大樹新ニ薨シ、世子幼冲恐クハ其任ニ堪ヘサラン、深ク聖慮ヲ悩セラル故ニ、汝ニ太傅ノ職（所謂後見役、豊臣氏ノ徳川・前田両侯ニ置カ如シ）ヲ賜フ、宜ク世子ヲ輔導シ、天下ノ政教汝コレヲ摂スヘシ、而シテ

天意奉揚シ、　神州ヲシテ夷狄ノ辱ヲ受シムルナカレト、

又添ニ別

詔ヲ以テシ、

手詔ノ至ルノ日、直チニ大城ニ入リ、早ク世子ヲ擁護シ、（頭注）「当時有士中ノ形勢ヲ以考フルニ、外藩大諸侯云々ハ薩州ヲ云フナラム乎」

妊臣ヲシテ其術ヲ施ス事ヲ得サラシム可シト、又列藩大諸侯一人ヲ撰□□(不明)

手詔ヲ賜ヒ、政令ヲ参加セシム、是レ外ハ辺防ヲ総管シ、内ハ宗戚ヲ匡持シテ、其権ヲ擅ニスル事ヲ得サラシム、其下閣老ノ如キハ其名ヲ連署シ、

勅ヲ以テ職ニ任スヘシ、其他列藩亦皆明ニ

天意ヲ勅セラル、又別ニ世子ニ

詔ヲ賜ヒ、汝幼冲ノ故ヲ以テ妊臣動モスレハ権ヲ擅ニシテ、

朕ノ命ヲ奉遵セス、且汝祖先ノ法ニ背ク徳川氏□(不明)□日ニ移ラン□(不明)□

朕汝祖先ノ偉烈ヲ泯没スルニ忍ヒス、因テ臣某臣□(不明)ニ

勅シ汝ヲ輔導セシム、汝某ヲ見ル事師父ノ如クナルヘシ、十年ノ後政ヲ還サシムヘシ、宜ク

朕ノ厚意ヲ喪失スル勿レト、如此トキハ　天使ノ至ル其故ヲ知ル事ナク

勅一タヒ下ル、大傅外藩諸侯ヲ率ヒ、　天使ヲ奉シ直ニ

大城ニ入リ、世子ヲ擁シテ後ニ、
勅ヲ以テ閣老ヲ叙スルトキハ、一二日ヲ出スシテ以テ
幕府乃チ定リ、奸臣其術ヲ投スル能ハサラン、奸臣世
子ヲ挾ムスラ猶制スヘカラス候、況ヤ
勅命ヲ以テ世子ヲ擁ス、何者カコレニ抗シ候ヘキ、或ハ
奸臣変アラン事ヲ察シ候モ、何ソ敢テ　天使ヲ拒ミ候
ハンヤ、若拒テ大城ニ入サルトキハ、是
勅ニ違ナリ、而シテ摂職ノ　命一タヒ下ルトキハ明ニ天
下ニ告クルナリ、太保コレヲ以テ其罪ヲ討スルトキハ
誰カ其令ヲ奉セサラン、故此事　天使ヲ下サレ、大ニ
天下ニ明ニセラレ候ハテハ宜カラス候、
前詔已ニ下リ候ヘトモ、水府ノ如キ少ク顧慮スルトコ□〔不〕
□〔明〕アリ、未タ決議仕ラス候ハン、重テ此
詔ヲ下サレ候ハヽ、益感激奮励シテ
天意ヲ奉揚スルニ足リ可申候、若シ今日ノ機会ヲ失ハセ
ラレ候トキハ、奸臣其術ヲ構ヘ、漸〔遽カ〕ヲ以テ有志ノ人ヲ
除キ、
朝廷ヨリ御所置ナラスヤウ致シ申ヘク、〔詮勝、老中、鯖江藩主〕間部總州上京仕
候モ、決シテ
朝議ニ奉従仕ル間鋪、或ハ奉従仕候ヤウニテモ、陰ニハ
旧□〔不〕□〔明〕見ヲ唱ヘ、天下ノ勢復挽回スヘカラサルニ至リ
候ハン、実ニ機会失フ可ラサルノ秋ト愚考シ奉候、
幕府一タヒ定リ候ヘハ、忠賢朝ニ満チ、奸邪跡ヲ絶シ、
公武御一致トナリ、天下皆勤
王ノ兵ニ候ハン、然後ニ外夷ノ御処置ハ万々憂ルニ足ラ
サル御事ニコレアルヘク、天下危安ノ機ハ偏ニ今日ニ
定ル事ユエ、深ク
聖断アラセラレタク仰キ望ム所ニ候、芻蕘ノ言、願ハ御
取捨御建白アラセラレン事ヲ、誠恐誠惶、昧死シテ白
ス、

年月日ナシ、按ニ安政五年九、十月ノ頃ナラン乎、

二五九　内藤豐後守伺書（伏見奉行職）

一私儀此度
御所向御取締被　仰付候ニ付テハ、御附（禁裏付）江モ
打合取計候様被　仰渡候間、
御所御附詰所迄罷越、万事打合候様仕度奉存候事、
一御取締之品ニ寄、関白殿（九條尚忠）初伝奏・議奏其外
堂上方御宅江モ罷越、申談候様仕度奉存候事、

一此外之儀ハ、京着之上伺候様可仕奉存候事、

右両条之儀、兼テ心得罷在度奉存候ニ付、下總守殿（間部）へ書面ヲ以伺候之処、右ハ所司代江（六月廿六日酒井若狭守当職）相伺候様ニト御差図ニ付、此段奉伺候、

以上、

七月廿六日　　内藤豊後守（岩村田藩主）忠縄（正カ）

私儀今度

御所向御取締兼帯（本職伏見奉行）被　仰付候ニ付テハ、京地ニ旅宿御座候テ、イツ何時罷越一宿仕候トモ差支無之様仕度奉存候、右ニ付

仙洞附小屋何レニテモ早々普請被　仰付、出来之上ハ私江拝借、家来先番等差遣、且又長屋之向ヘハ、供廻リ下々迄差遣候様仕度奉存候（旅宿云々、其実兵営ナリト当時専ラ唱ヘタリ、果シテ然ラン）

但右普請出来迄之処ハ、最寄寺院壱ケ所旅宿ニ仕度奉存候、

此段御賢慮奉伺候、即刻御差図被成下候様仕度奉存候、

右伺之通御差図之上ハ、京着仕候ハ、其趣ヲ以町奉行江申談、早々普請ニ取掛候様仕度奉存候、此段奉伺候、

以上、

七月廿六日　　内藤豊後守正縄

所記ノ如ク内藤カ取締ニ着手、以来幕吏ノ暴威日ニ甚シキニ到レリ、

二六〇　無名書牘

○この文書は、無名書牘とあるも、安政五年六月十一日付島津斉彬書翰（松平慶永宛）であって、本巻第二十六号文書と重複により略す。

二六一　裏辻少将書牘

四月以来今以夜々無懈怠祈念仕居、日夜心痛之余毎度瑣細之儀令言上恐入存候、尚御取捨奉願候、何卒呉々モ御腰之折ザル様、十分被仰合御手許ヲ御堅メ置、且人心帰向之事武家江被仰立候上ハ、只今誠以御大事之御場所ト乍恐奉存候得ハ、

此御方ニモ精々人心帰向仕候様、御厚配被為在候様誠専一之御儀ト奉存候、彼是ト風説モ不無之候条、不顧恐怖并一身書副奉言上候也、

酒井役邸（所司代）ニアヤシキ座敷ヲシツラヒ候、

夫故不快之風説仕候、尚々役人衆旅館行向無之様

伏奉願候、

公愛上（裏辻中将）

当時洛中種々ノ巷説流布、中ニハ恐多クモ御譲位ヲ促シ奉ラムト、或ハ遷行、或ハ二條城ニ皇居ヲ移シ守護シ奉ラムト、喋々有志ノ士扼腕スルニ臻レリ、即チ酒井役邸ニアヤシキ座敷シツライ云々モ、巷説ノ一ニシテ、臨機玉座ヲ遷サムノ準備ナリトモ唱ヘタリ、

人モ商量仕カタク候半欤、左候ハヽ、国政共ニ可被仰付候、

然ルニ何レ之大名江可被仰付哉、被仰付候トモ御請不申上候時ハ、何ト御所置被為在候哉、御請可申上家々相考、窃ニ聞繕度存候得トモ、当時ノ振合ニテハケ様之儀出来間敷存候ヘハ、此儀上策トモ難申候欤、

扨又

同前ニ付、宣下之事暫御勘考可被為在候旨被仰出候ハヽ、仰天イタシ、タツテ　宣下ヲ相願候ハヽ、重畳之儀、如何様ニモ被　思召次第之儀被　仰付候テモ宜哉ニ候ヘドモ、若当時外夷何時トナク渡来仕候ヘバ、一日モ此職ナクテハ不相叶儀ニ候間、自然御勘考中追々渡来仕候ハヽ、如何可仕ナト申上候ハヽ、何ト御答可被遊哉、尤他界ニテ継メノ間ハ無職ニ候得共、永続ト相心得候得ハ如何トモ可取計候ヘドモ、相続無覚束ト存候ヘハ、頻リニ難題可申上ト存候、左候ヘハ其節ノ御答振六ケ敷存候ヘハ、是モ上策トハ難申候欤、

扨又

同事　宣下ヲ願候ヘハ、是迄ノ不都合違　勅同前之次第、何モカモ十分ニ書並ヘ、扨ケ様之事故急度御恰モ

二六二　大日本国有志中ノ書（人名ナシ、東久世伯云、有馬新七ナラン）

〔家定〕
将軍他界、新ニ　宣下ヲ可相願ニ付、有志之輩種々ト申居候趣、仄ニ承及候ニ付愚案仕候、此儀ハ誠ニ極々大事ノ御場合ニテ、中々一応二応之事ニハ無之、後々迄之御所置無之テハ不相叶儀ト乍恐奉存候、子細ハ十分御手強ク被　仰出候ハヽ、是迄之取計方ハ征夷将軍ノ職号ニ背、交易通商ヲ唱、其上不従　朝命、無拠場合ト申成シ及調印候事、内実違　勅ニ候、依之他之大藩ヘ可有　宣下、但日本ノ国政ハ於幕府可取計、或ハ国政共ニ他ニ可被仰付欤、

但ケ様ニ二ツニ分レ候テハ、蒙　宣下被　仰付候本

被仰付職モ可被止、尤他江　宣下可被為為〔在カ〕欤、ナン共
三百年来ニモ近キ治世ハ、全東照君〔徳川家康〕ノ遺徳ニ候得ハ、
被為棄候　思召ハ毛頭不被為在、速ニ　宣下可有之候、
乍併何分是迄之外夷取計方ニテハ、被対　神祖御代々
仰分ラレモ不被為在候故、日本ノ大儀、
叡慮ノ相立候様可取計勘要ニ候間、三家・家門・譜代
ノ大名并国主等一同ニ申合、是迄徳川家ノ弊政ヲ改正
イタシ、外夷ノ応接振各相改、国辱後患ニ不相成様ニ
イタシ、奉安
叡慮候様可致、何分ニモ是迄之将軍賢明ハ勿論候ヘト
モ、病身ニテ難行届トカ、自今ハ若年之事故何レ後見
モ可有之候折柄ニ候間、無御隔意被　仰進候事、
扨思召之ヶ条一ツ書ニイタシ可被添欤、是等之儀御請
之後速ニ　宣下可被為在候事、
一ツ書第一ニ
三家・家門・譜代之輩并国主等申合、外夷之事先達テ
被　仰達候様、　叡慮相立候様相可被計候事、
第二
神宮　京師　大坂警衛厳重候事、
扨又
三家・家門・譜代・国主等人別ニ被仰遣候儀、
一是迄徳川家賢明勿論ニ候ヘトモ、病身ニテ（将軍家定ヲ
云）政事向行届カネ候欤、外夷之応接是迄之通リニテ
ハ国辱後患ニ相成候故、被悩　叡慮候儀毎々被　仰達
候事ニ候、今般将軍新補候得トモ、年若ニ付外夷応接
向其方共申合、一心ニ徳川家ヲ補助被致、　叡慮之趣
相立候様可被致候事、

前書副申

謹テ奉申上候、抑井伊掃部頭〔直弼、大老、彦根藩主〕家来長野義言〔ヨシトキ〕ト申者、七月
下旬江戸出立、此頃御当地へ着致シヌ、其子細ハ近日〔詮勝、老中、鯖江藩主〕間
部下総守〔詮豊〕上京ニ付、第一九條殿〔尚忠〕下ヲ取繕ヒ、其外処々ヘ
取入程克相計リ候様、下総守親敷相頼候ニ付、
上京致シ候義分明ニ御座候、仝人事当春以来都テ三ヶ度
出京致シ、島田左近〔九条家諸大夫〕ト相計リ、外夷ト条約調判之事抔ハ
内勅之旨ヲ以テ押張リ、所存申立候有志大名之建言ハ不
取用、且一橋君〔慶喜〕ヲ拒ミ、幼年ノ君〔徳川慶福〕ヲ西城ニ取極メ、尾・
水二家并越前ヲ圧倒シ候事共ハ、紀臣水野土佐守ト相計
リ候次第、皆義言カ所為ニ有之、又此度モ左近ヲ以テ上
繕ハセ、更ニ久我卿〔建通、議奏〕・中山卿〔忠能、議奏〕ヲ始其外処々ヘ取入リ、密

計可施結構有之趣ニ候ヘハ、御油断難相成奉存候、右義言ナル者ハ邪智ノ小人、専ラ阿諛佞弁ヲ以テ近来掃部頭ノ寵遇ヲ得テ出頭イタシ、種々謀計ヲ廻ラシ、遂ニ關東之所置及違　勅候様之基ヲ開キ、恐レ多クモ叡慮奉悩候次第言語道断、実ニ神州一之大逆此上有ヘカラサル者ニ候、右此件々、当時在江戸同志之者ヨリ密使指登シ、左近ヨリ義言ヘ指越ス密書、殿下御直書被進トノ語モ有之候書翰之写迄モ指登シ候、是等之事ハ義言カ謀計ニテ偽作致シ候哉モ難計候得共、何分不容易事共ニ候故、御当□（不明）ニ於テ有志之面々相談之上奉言上候、御賢考ノ上早々御配慮被為在度奉冀候、頓首々々、誠惶謹言、

安政五年八月　　大日本国有志中謹上再拝

（公純、議奏）
徳大寺大納言様　閣下

二六三　鎌田出雲京都御警衛御受書（原書近衛家所蔵）

（頭注）近衛家奥表日記参看

方今内憂外患至テ不容易御時節ニ付、極密之事件蒙御内命、誠ニ以テ武門之冥加難有仕合乍恐感佩奉畏候、万一非常御到来之節ハ、朝廷御警衛向ハ勿論、殊更　尊殿ニハ別段之御由緒柄ニ付、御為筋之儀必死ヲ尽、精忠相励度格護ニ御座候間、内外嫌疑無之様平常勘弁ヲ加ヘ、急々穏便ニ手当仕不被在御配慮　御威光相立候様、尚三位（齊興）トノ江モ遂披露、聊無手抜様仕度、先不取敢此段乍恐御受奉申上候、以上、

八月廿日　　鎌田出雲

斯書ハ近衛家秘蔵一括中ニ在リ（鎌田家々記中ニ扣書在リ）料紙ハ奉書紙半切ニ附従御家老座筆者市來正之丞ガ手ニナレルモノナリ、○市來ハ西郷隆盛トハ近親之続ニシテ、倶ニ国事ニ力ヲ尽シ、同僚薩田傳兵衛・有川七之助ト同志之モノナリキ、○斯書ニ対スル僧月照ガ書翰中ニモ、尋常ノ筆吏ニ非ラサルヲ知ルベシ、

鎌田ハ当時江戸邸在勤中、西郷隆盛・堀仲左衛門等之有志ト倶ニ密命ヲ奉シ、将軍継嗣則一橋刑部卿事件ヲ、越前公（松平慶永）其他各藩有志者中ト倶ニ尽力シ、中ニモ天璋院殿（将軍家定夫人）ニ就テ鎌田・西郷ハ力ヲ尽シ、或ハ朝廷御守護ノコトハ、間部下総守上京ニ就テ、世説喧々タルニ依リ専ラ心ヲ用ヒタリ、然ルニ齊彬公ハ時勢ノ切迫ナルヲ看破セラレ、西郷ニ密命シ

テ大ニ為ス処アラント、鎌田ニ至急帰国ヲ命セラレタルニ依リ、安政五年七月廿一日江戸邸ヲ発シ、中仙道ヲ経テ伏見駅ニ着シタルハ、同八日十七日（途中洪水ニ遮ラレ遅着）ニシテ、近衛公ニ就テ上申スル旨アリシニ、朝廷ハ御困窘ノ際ナル故、清水寺ノ僧月照ヲシテ密示セラルヽ旨アリシニ（忠熙公御書翰参照）、鎌田ハ別紙ノ如ク御請書ヲ呈シ、帰国シテ時勢ノ切迫ナルハ無論、齊彬公ノ遺旨ヲ忠義公ニ申述シ、守護ノ兵ヲ出サムト、昼夜兼行帰国ノ途中病ヲ発シ（元来肺病ノ兆アリタリト云）、着シタルモ登城スルヲ得サルノ重症ニ陥リ、不得已事随行筆吏市來正之丞ヲ以テ国老等ニ告ケシメ、速ニ出兵アラン事ヲ勧告シタルモ、奈何セン忠義公ハ幼弱且相続日尚ホ浅ク、国老等ハ齊興公御帰国モ不遠事故、老公ニ告ケテ決ヲ取ラムト、或ハ俗論ノ為メニ遮ラレ、鎌田ノ所論ハ国家ノ難題ナリトテ用ラレサルノミナラス、市來ヲモ黜斥スルニ至レル故、鎌田ハ憂憤奈何ントモ為ス事能ハス、遂ニ同年十一月八日ヲ以テ病没ス、年四十三歳（文化十三年子四月十五日生）、鹿兒島城南林寺（現在都元墓地）ニ葬リ、知德院殿南山賢明大居士ト諡ス、可惜、忠誠ノ国老ナリキ、西郷・堀等ノ有志モ大ニ力ヲ落シタリト云フ、

二六四　松平大隅守御請書（近衛家所蔵）

一筆啓上仕候、益御機嫌能被遊　御座恐悦奉存候、然ハ夷国一条御所置振之儀被　仰下（御書翰アリシナラン、迭ス）、細々承知仕候、誠ニ以驚歎至極奉存候、就テハ叡慮ニテ被　仰出候御別紙写（水戸ヘ下賜勅書ト同旨）拝見被　仰付、具ニ拝覧申上候、将又非常御手当向之儀（幕府ノ暴ニ備ルノ御深旨ナラン）被　仰付承知仕候、乍恐御尤至極奉存候、右ハ於伏見原田才輔（近衛家御兼中附医師）江被　仰含候趣モ、細々承知仕候間、御請之儀ハ同人江モ申聞置申候、何分不悪様御汲取被下度奉願候、先ハ御報迄奉呈愚札候、恐惶謹言、

九月十三日　　松平大隅守齊興

（忠熙）近衛左府様

〔頭注〕「齊彬公史料安政五年七月ノ部参看、近衛家奥表日記参看」

追啓恐入奉存候得共老年（六十歳ナリ）ニ罷成、手振認兼候間代筆（右筆代書ス）申付候、何卒御高免被仰付可被下候、以上、

齊興公ガ尊王ノ御事蹟ハ、安政二年ノ春近衛公ヲ以テ賜リタル宸詠、武士モ心アハシテ云々ノ御懐紙、オヨビ是ニ御

添附ノ宸翰アリシハ、齊彬公史安政五年ノ正月元日、御一門四家又ハ三重臣ニ拝覧允サレタル云々ノ条ニ詳記ス、○齊興公ガ安政五年九月御湯治ノ為メ御帰国アリシハ、当時ノ史乗ニ記シタルカ如シ、然ルニ同年七月齊彬公薨去、忠義公御相続トナリテ、政務御介助ノ命ヲ奉セラレ、同九月初江戸高輪邸ヲ発セラレ、東海道筋御通行、同月（ママ）日伏見駅ニ着セラレシ際、西郷隆盛ハ在京尽力中、従駕国老島津豐後（久寶）ニ向テ、齊彬公勅命奉セラレシ事実ヲ詳述シ、幕府横暴ノ所為朝廷ノ御困難目下ニ迫レル時情ヲ告ケ、御警衛忽ニスヘカラサルヲ説述シ、然シテ同人ガ齊興公ニ具申スル旨アリテ、斯書ヲ近衛公ヘ奉呈セラレタルモノナリ、○宸詠ニ添ヘラレタル宸翰ハ今存セサル所以ハ、齊彬公遺言ニ依リ、近習山田壮右衛門等カ焼棄シタル御文庫中ニ在リシナラント云フ、可惜、○此時齊興公ニ従駕重立タルモノニハ、国老島津豐後（仝上）、御側役有馬舎人・中江休（永カ）之丞、御納戸奉行御家老座奥掛筆役兼帯伊集院直五郎等ナリキ、

二六五　松平大隅守近衛家ヘ上申書（近衛家所蔵）

（頭注）「近衛家奥表日記参看」

謹テ言上

倍御機嫌克被為　成、恐悦至極奉存候、抑一件（禁廷御守護ヲ云乎）之御模様、如何之御運ニ相成候哉ト乍恐苦心仕候、扨兼テ奉願置候島津豐後（当時国老首席）義上京之事（兵ヲ率ヒテ上京ヲ云フ）、段々之子細有之、先今度ハ止メニ相成候、其訳ハ今朝西郷（隆盛）下阪仕（伏見駅ヨリ下坂滞坂中）委細承知仕候処、守衛方十分之手配出来候由（江戸邸守衛兵交替帰国ノ途次滞坂セシメタルヲ云、其人員上下凡二百名）、其手続具ニ吉兵衛（西郷隆盛旧名）書取申出候故、別紙（別紙迭ス）奉備台覧候、尤右ニ付テハ極内々ニテ、吉兵衛拝謁相願、御直ニ何角相伺且言上モ可仕様ニト、呉々豐後ヨリ申聞ケ候旨（西郷カ堀仲左衛門ニ与ル書中ニアリ）ニ御座候、何卒可相成ハ

御対　面被　仰付候ハヽ、至極之都合ト奉存候、此頃外見之処、別テ御憚モ可被為　在ト乍恐奉存候得共、実ニ皇国之安危存亡之境、御大事之上ノ大事ニ候得ハ、不顧恐奉願試候、最早薩藩ヨリ十分ニ護衛向用意仕候上ハ　御心御丈夫ニ御所置被為　在候様奉願候、将又豐後儀、格別ニ手厚配慮仕居候趣ニ御座候得ハ、乍恐左之通願上試候（西郷カ策略云々、堀ニ与ル書翰又ハ堀カ親

話筆記ニ記ス）

豐後義今度上京相待居候処、無其義帰国之由、併精忠ヲ以守衛方一件、不容易配心之条　御満足之旨、猶此上為国家粉骨有之様　頼思召之御次第、且又三位殿（齊興）ニモ格別ニ　京都御大事ニ被存上、護衛万端厚ク被仰付置候趣等、吉兵衛（西郷）ヨリ被　聞食御満悦之御事、

右之振合ヲ以

御内書（御書迭ス）頂戴被　仰付、又何成共　思召之御品拝領被成下候ハヽ、無限難有カリ、弥忠義尽力可仕候ニ相違有間敷候、右様奉願候モ先日出雲江（鎌田）御内書并拝領物（今ニ至リ保存ノ品ナラン）等仕候事、豐後承知仕居候上、今度上京モ不仕帰国候段、定テ残念ニ存居可申ト推察仕候故、呉々モ此辺御賢察之上、願之通　御許容被成下候得ハ、大辛無上之御事ニ奉存候、前章之次第不得止事不、顧死奉言上候、恐惶謹言、

九月十五日

〔頭註〕近衛家奥表日記参照、中ニ表日記ニ隊長等参殿ニタヲ記ス〕

斯書奉呈セラレシハ、近衛家附従針医原田才輔ナル者ヲ以密呈セラレシト云、当時機密ニ罹ル事柄ナル故、留守居役ヲ以奉呈セラルヽ能ハサルヲ以テナリ、

二六六　鎌田出カ雲事蹟　市來四郎演説速記録

齊彬カ安政五年ノ夏、江戸邸在勤家老鎌田出雲（正純）ヲ至急呼ビ下シマシタハ、福岡様（黒田長溥）ト御内談致シタ事柄ニ就テ、ゴザリマス、其事柄ハ曩キニ西郷ヲ遣シテ京都御召ニ関スル事ニ就テ、ゴザリマス、同人ハ家老ノ中ノ有志者デゴザリマスカラ、何カ尽力致セル積リテアリタト見ヘマス、然ルニ出雲ハ七月中旬過ニ（日ハ分リマセン）伏見駅ニ着致シマシタ処カ、其時清水寺ノ僧忍向ヲ以テ、近衛忠熙公ヨリ御内書ヲ下サレマシテ、京都御警衛ノ兵ヲ出ス様ニト云フ御内意デ御座リマス、コレハマタ戊午変動カ起ラナイ前テ、閣老ノ間部下總守上京ノ前デ御座リマス、是レカ鎌田ノ家ニ伝テ居ル近衛忠熙公ヨリ、鎌田ヘ下サレマシタ御直書デゴザリマス、朗読シマス、

○この文書は、本文第一六七号文書中の一の安政五年八月十一日付近衛忠熙書翰（鎌田正純宛）と同文重複により略す。

其時頂戴物御紙入・御盃・御肴料・御文庫・御懐紙等ニテ、此御懐紙ハ御直書テゴサリマス、御文庫等今ニ鎌田ノ家ニ秘蔵シテ居リマス、茲ニ御文庫内懐紙御歌ノ写シ

ガゴザリマス

祝　　忠燃

日本やこの国ふりのかしこさも
やまと言葉のうへに見えつゝ

是レニ加フルニ、忍向和尚ノ書翰ガゴザリマス、是レハ八月廿一日伏見ノ旅館ヘ送リタモノト見ヘマス、

○この文書は、本文第一六七号文書中の二の安政五年八月二十一日付月照書翰（鎌田正純宛）と同文重複により略す。

如此近衛公ハ忍向ヲ以テ、京都御警衛御依頼ニナリマシタト見ヘマス、鎌田カ日記ノ中ニモ記シテゴザリマス、其事実ハ島津家国事鞅掌史料齊彬公史中ニモ記シテゴザリマス、込ミ入リタル事蹟デゴザリマスカラ茲ニ略シマス、

二六七　鎌田出雲略履歴

旧薩摩藩国老
故鎌田出雲
実名正純　文化十三丙子四月十五日生

〔頭注〕附箋嘉永元年十一月七日江戸ニ出ノ、全四年十月廿日帰国、安政三年十一月九日江戸ニ出ノ、全五年九月　日帰国

出雲ハ始メ刑部又圖書ト称ス、世々島津家ニ仕ヘ門葉ノ地位ナリ、代々大隅国肝属郡南邑千五百石余ヲ領ス、少壮ニシテ英俊ノ名アリ、文ニ通シ武ヲ兼ヌ、累進シテ遂ニ国老ニ班ス、今左ニ国事ニ係ル重ナル事歴ヲ叙ス、

弘化三丙午六月、琉球国ヘ英吉利国船又ハ佛蘭西国船来到シ、事端容易ナラサルヲ以テ、藩主齊興ハ警備トシテ一隊ノ兵ヲ率イ、山川港ニ屯シ、臨機渡海スヘキヲ、家老島津久浮ニ命ス、出雲ハ当職小姓組番頭藩士一組ノ長タリシヲ以テ、同シク指揮役ヲ命セラレ出張ス、八月ニ至リ事ナキヲ以テ之ヲ解ク、

曩ニ弘化元年三月、佛蘭西国軍艦球琉ニ来到シ、和親通商ヲ求メ強要止マス、琉人之ヲ辞スルモ肯ンセス、遂ニ明年ヲ俟チ決答ヲ約シ、佛人一名・清人一名ヲ留メテ去ル、琉球王大ニ愕キ、飛檄ヲ以テ処分ヲ請フ、藩主齊興之ヲ幕府ニ請ヒ、幾多ノ兵ヲ遣シテ警備ス、又本年ニ至リ佛蘭西船再ヒ来到シテ、前年ノ決答ヲ促シ、兵力ヲ以テ遂ニ通信条約ニ調印ス、尋テ英吉利国軍船来到シテ、均シク通信ヲ求メテ止マス、又英人夫妻ヲ留メテ去ル、藩王之ヲ訴フ、藩主事ノ容易ナラサルヲ察シ、予備ノ為メニ派遣セシナリ、

同年九月、藩主齊興出雲ニ異国船掛寄外国船応接ノ職ノ職ヲ命

ス、是レ先年以来、琉球国ニ外国船ノ来到頻次ナルニ由リ、遂ニ内地ニ航行スルモ知ルヘカラス、出雲平生外国処分ニ関シテ意見アルヲ以テ、擢シテ之レニ命スルナリ、

弘化四丁未七月、出雲ニ海岸防禦掛ヲ命シ、異国船掛寄ヲ免シ、更ニ兵具取扱ノ職ヲ兼ネシメ、専ラ軍備ノ事ニ預カラシム、先キニ佛蘭西軍艦琉球ニ来到セシヨリ、海防ノ急ヲ感シ、幕府ハ諸藩ニ令シテ之ヲ準備セシメ、又朝廷ハ

勅シテ之ヲ厳督シ玉フヨリ、漸次防海ノ準備ヲ為スト雖モ、往々偸安ニ流レ、空シク年月ヲ消セリ、茲ニ至テ世子齊彬之ヲ藩吏ニ督シ、之ヲ有志ノ藩士ニ諭ス、国老等乃チ議ヲ決シテ防禦掛ヲ置キ、出雲等ヲ擢テ之ニ命ス、仍テ出雲等相会シテ防海ノ利害ヲ議シ、旧式ニ泥ムヘカラサルヲ主唱シ、速ニ洋式砲術奨励ノ方法ヲ議ス、同年十月更ニ軍役掛ヲ命シ、専ラ軍備ノ事ヲ管スルニ至ル、翌年五月ニ至リ軍役方ノ一職ヲ置クニ及ヒ、兵具取扱ノ職ヲ免シ、専ラ軍備ノ事ヲ努ム、

嘉永元戊申正月、藩主齊興近年外国船頻次内港ニ来到スルヲ以テ、警備ノ為メ砲墩ヲ築カンコトヲ幕府ニ請ヘリ、特ニ藩内大隅国小根占地方ハ、肝要ノ地位ナルヲ以テ、時々臨視シテ防禦ヲ尽シ、懈怠ナカルヘキヲ命ス、当時出雲同地方ヲ管領セシニ依レリ、且ツ此際藩主地方ヲ巡検シ、砲術ノ調練ヲ験ス、出雲其方面已ノ管地ニ属スルヲ以テ、頗ル周旋之レ努ム、且出雲軍賦ノ職ニ当リ、領地要衝ニ在ルヲ以テ、南邑ノ領民ヲ以テ一隊ノ兵ヲ編ミ、他ノ私領主一門大身ノ領主ト均シク兵員ヲ備ヘンコトヲ請フ、藩主其志ヲ賞シテ之ヲ許ス、其軍備ニ志ヲ用ユルノ篤キ茲ニ至ル、

此年十一月、出雲江戸邸ニ勤仕ス、藩務ヲ掌理スルノ傍専ラ時勢ニ注目スル所アリ、時世子齊彬英資ニシテ声望アリ、出雲固ヨリ之ニ服ス、間ニ乗シテ国事ヲ諮ル、齊彬亦其有為ノ才ナルヲ信シテ之ヲ撫ス、出雲益々心ヲ傾ケテ其命ヲ承ク、故ニ後年齊彬ノ志ヲ承ケ、志士ト結ヒ国事ニ竭シ、事半途ニシテ齊彬薨スルノ訃ヲ聞キ、喪心病ヲ為シ尋テ卒ス、之レ其知遇ニ感シタルナリ、

在邸ノ間、軍政其他政務改革ノ意見ヲ陳スルコト数回、皆時弊ニ中ル、為メニ更革スル所アリ、藩老其才幹ヲ憚リシトナム、今嘉永六癸丑四月米国使節浦賀ニ来リ

和親ヲ請フ、幕府和戦ノ可否ヲ諸侯ニ問フ、藩主齊彬亦建議スル所アリ、時ニ預メ外国処分策ヲ藩内ニ下問ス、藩士之ニ応シテ建議スル所アリ、出雲亦之ニ応フ、左ニ其全文ヲ掲ケテ其為人ヲ証セン、

此節浦賀表江北亜墨里加合衆国船渡来、彼主ヨリ公辺江差上候書翰等ノ和解拝見被仰付、存慮可申上旨承知仕候、右ハ不容易　御国体ニ相拘候儀、浅知文盲ノ私式、不敬之文言悪筆誠ニ奉恐入候得共、御国体ニ相掛御一大事、差扣罷在候テハ身構仕場ニ可相当ト奉存、難黙止余計之儀迄モ書加奏呈上候間、御賢察被遊可被下候、此節彼ヨリ差上候書簡之趣ニテハ、専和親通商等ノ事ヲ申立、古今時変之訳且ハ年限迄モ相立、　日本御不益之儀ハ追テ御取止之筋種々理解之旨趣相見得、右ヲ即時御打払有之候ハ、其不礼ヲ西洋諸州江申触、兵船差向候時ハ却テ彼ハ兵ヲ出スノ名義有之、　本朝ニハ只防禦一筋ニ可罷成、乍恐本朝挙テ及奮撃候ハ、幾般引受候テモ容易ニ陸卸等ハ為致間敷候得共、於洋中諸国之通船ヲ妨、就中御領国ノ儀琉球諸島通船之難題差見得、其外国々ノ費人馬ノ奔走何トナク疲弊ニ及、終ニ内外之患手ヲ下スニ処ナク、別テ御一大事到来、右等ノ透ヲ計、種々方便ヲ企自在ヲナスニヲヒテハ、果ハ御再興ノ期六ケ敷、誠ニ危(急)究存亡之御時節ニ相及候半、此度外国ヨリ頓首懇願仕候儀、却テ　本朝之御威光欤ト奉存候、願ニ被応候共、格別　御武威衰候筋ニモ相当申間敷候付、先為御試通親　御許容有之、交易之儀ハ御用余之程不案内御座候ニ付、何共難申上候得共、御用余無之品ハ外邦ヘ可被遊御渡道理無之候ニ付、右ハ御理解有之候ハ異人モ承服可仕欤、尤一国　御許容有之候ハバ、国々ヨリ願出候儀案中ニ御座候得ハ、是以通親迄御免被仰付、交易ハ被応時機候ハ御差支有御座間敷欤、左候テ国々御手当ノ儀ハ弥厳重被仰渡、兵糧・兵器・兵船等十分ニ相備、士気ヲ励シ、武道錬熟為致置、若及戦争連船渡来致候共、国々少モ不致動揺、士農工商職業ヲ不失様万事手配御行届ノ上、万一彼ヨリ不法之挙動於有之ハ、最早彼ニ非義有之義ヲ以不義ヲ打之天討ニ候得ハ、更ニ　御猶予ニ不被為及、速ニ御打払御当然之儀欤ト奉存候、因テ一日モ早ク外国ニ応候永続之御手当十分御行届、依時機ハ是ヨリ義兵ヲ御起、不法之外

国ヲ御征伐有之程ノ御勢、誠ニ
皇国ノ神威ヲ被顕候御機会ニテ、右通之御威風外邦
ヘ相響候ハヽ、自ラ不法等申掛候儀ハ相止候半、百
戦百勝モ未得止事之時宜欤ト奉存候間、不戦テ屈ル
ノ御神策万全之御長久ト乍恐奉祈上候、百拝謹上、

七月廿六日　　正純

前文ヲ一見セハ、其時務ニ通スルノ一班ヲ知ラム、齊彬亦之ヲ嘉納スト云フ、

嘉永四辛亥二月、世子齊彬家ヲ継キ、直チニ出雲ヲ擢テ、大監察トナシ、国老ニ準セシム、同年十月急ニ国ニ帰ラシメ、更ニ琉球産物方掛ヲ命シ、専ラ琉球国通商ノ事ヲ管セシメタリ、

此際藩主齊彬ハ家ヲ継キ国ニ就キ、専ラ琉球ニ関スル処分ヲ画ス、此前幕府ハ琉球ノ処分ヲ島津家ニ委任シ、該地ニ於テ外国ト貿易ヲ開クコトヲ許ス、依テ之ヲ計画スルナリ、出雲固ヨリ齊彬ノ信認ヲ受クルヲ以テ急ニ之ヲ呼下シ、専ラ琉球貿易ノ措置ヲ施サシム、出雲命ヲ承ケ、琉球若クハ大島ニ於テ貿易ノ準備ヲ為セシカ、同六年六月、米国軍艦浦賀ニ来リ和親ヲ請フニ及ヒ、外舶又琉球ニ来ラサルニ至リ之ヲ停ム、

安政三丙辰二月、鹿兒島湾ニ於テ新造ノ洋式軍艦昇平丸ト云水兵召募掛ヲ命ス、尋テ之ヲ幕府ニ献ス、藩主其労ヲ賞シテ物ヲ与フ、

是ヨリ先、齊彬洋式軍艦ヲ造ランコトヲ幕府ニ請フ、之ヲ許ス、仍テ鹿兒島湾ニ於テ二艘ヲ作ラシム、此年成ル、幕府命シテ之ヲ献セシム、是レ日本ニ於テ洋式軍艦ヲ作レル権輿ナリ、然ルニ従来ノ水手未タ運用ノ術ニ慣レス、往々口実ヲ籍リテ之ヲ忌避ス、出雲水手ヲ撰択シテ之ヲ募リ、其職ニ服セシム、遂ニ江戸ニ達スルヲ得タリキ、

同年十一月、出雲江戸邸ニ勤ス、同年十二月、職ヲ小老ニ進メ国老ニ班セシム、此間齊彬ノ命ヲ承ケ専ラ軍政ノ事ヲ講究ス、浪士小野寺庸齋軍学ニ通スルヲ聞キ、親ク之ヲ訪ヒ、爾後互ニ往来シテ軍事ヲ諮詢シ、傍ラ時事ヲ討議スル所アリ、後屢々意見ヲ叙ス、齊彬頗ル其議ヲ採ルト云フ、

安政四丁巳四月、出雲有志ノ藩主ニ齊彬ノ密命ヲ示シテ大ニ国事ニ尽力ス、之ヨリ有志ノ者密ニ　尊王ノ大義ヲ唱ヘ、幕府ノ失政ヲ公議シ、交々事ヲ図ルニ至レリ、

齊彬　尊王ノ志篤ク、幕府ノ非政稍ク人心ニ厭フヲ歎シ、閣老阿部正弘ヲ始メ有為ノ幕吏ニ結ヒ、内驕僭ノ志ヲ矯メ、外朝幕一致シテ外国ノ処分ヲ弁セント欲シ、徳川慶勝・徳川齊昭・松平慶永・伊達宗城・山内豐信等ノ諸侯ト交通シ、大ニ図ル所アリ、遂ニ幕府ノ因亜（篤姫）ヲ固フシテ尊王ノ大義ヲ完セント欲シ、家女ヲ以テ将軍家定ニ嫁スルニ至ル、而シテ常ニ志ヲ近衛家ニ通シ、朝廷ノ声聞ヲ拝シタリ、是以テ

先帝陛下深ク齊彬ノ忠誠ヲ賞シ玉ヒ、密ニ

宸翰ヲ賜ヒ輔佐ヲ託シ玉フ、齊彬益感激シテ其志弥々堅シ、然レトモ将軍家定多病ニシテ、吏属事ヲ用ヒ、事毎乖戻スルコト多ク、幕吏亦因循ニシテ時宜ヲ失ヒ、外国ノ処分亦敢（厳カ）ナラス、海内ノ紛議稍ク起ル、齊彬憂念措カス、偶々将軍継嗣ヲ定ムルノ議アリ、齊彬亦其議ニ同シテ周旋スル所アリ、然ルニ藩吏中当時齊彬ノ密命ヲ承ケテ、其任ヲ果スニ足ルヘキモノナシ、独リ出雲（鍋田正純）ハ深ク依信スル所アルヲ以テ、之ニ命シテ計画スル所アラシム、又有志ノ藩士アルモ、当時多クハ小壮ニシテ未タ要路ニ当ラス、独リ出雲職国老ニ準シテ志亦堅ク、藩主ノ信任ヲ受クルヲ以テ、悉ク出雲ヲ推シテ魁首トナシ、水戸・越前・宇和島諸家ノ有志ト交通謀議シ、専ラ周旋ヲ尽スニ至レリ、

此間藩士ニシテ出雲ヲ推シテ密ニ　尊王ノ議ニ預ル者ハ、前後左ノ人々ヲ以テ重ナル者トス、

岩下佐次右衛門（今子爵岩下方平）　有村俊齋（今子爵海江田信義）
西郷吉之助（故人）　伊知地龍右衛門（故伊知地正治）
樺山三圓（故人）　大山正圓（故大山綱良）
堀仲左衛門（故伊知地貞馨）　蓑田傳兵衛（故人）
奈良原喜左衛門（故人）　市來正之丞（故人）
有川七之助（故人）　日下部伊三次（故人）

外藩ノ人々ニハ

水戸藩　戸田銀次郎（故人）　武田耕雲齋（故人）
越前藩　中根雪江（故人）　橋本左内（故人）
宇和島藩　吉見長左衛門（故人）
尾張藩　田宮彌太郎（故人）

以上ノ人々ト密ニ謀議シテ大ニ為スノ志アリ、偶々安政五戊午四月、井伊直弼大老トナリ大ニ威福ヲ張ル、七月ニ至リ徳川家茂ヲ擁立シテ、徳川慶恕・同慶喜・松平慶永・山内豐信ヲ退ケ、其継嗣ノ議ニ預ルヲ咎メ、藩士ニシテ其議ニ預ル者、并公卿縉紳ノ家人数十人ヲ

捕ヘシム、此時齊彬在国ナリ、先ニ形勢ノ非ナルヲ察シ出雲ニ帰国ヲ命ス、七月江戸ヲ出ツ、九月国ニ至ル、十数日ヲ隔テ齊彬已ニ薨ス、出雲尋テ亦卒ス、此間前後間髪ヲ容レス、遂ニ井伊ノ逼迫ヲ受クルコトヲ免ル、若シ此時齊彬江戸ニ在リ、出雲亦勤仕セハ、齊彬ハ退隠ヲ命セラレ、出雲ハ戊午ノ大獄ニ遭遇シタルナラント云フ、

安政五戊午八月出雲京都ニ至ル、近衛忠熙父子・僧月照ヲ以テ朝意ヲ密示シテ、禁闕守衛ノ兵ヲ出スコトヲ伝ヘシム、出雲其命ヲ領シテ請書ヲ呈シ、倶ニ守衛ノ方策ヲ画ス、尋テ近衛父子密ニ之ヲ召シテ尚嘱スル所アリ、出雲祖先鎌田出雲守政近、慶長ノ比近衛家ニ頼リ徳川家ト和ヲ講シタルノ縁故ヲ陳シ相約スル処アリ、近衛父子其奇遇ヲ感シ、深ク依頼スル所アリ、物（主上御懐中入御鼻紙小菊一帖入赤白菊ノ織物地色紫、御盃二水ニ亀、梅ニ鶴、詠紙忠熙題歌日本や此国ふりのかしこさもやまと言葉の上に見えつゝ）及ヒ金ヲ贈テ其志ヲ賞ス、

此際近衛忠熙ヨリ、出雲ニ贈ラレタル文言ハ左ノ如シ、

○この文書は、本文第一六七号文書中の一の安政五年八月十一日付近衛忠熙書翰（鎌田正純宛）と同文重複により略す。

又、僧月照ヨリ出雲ニ贈リタル文言ハ左ノ如シ、

○この文書は、本文第一六七号文書中の二の安政五年八月二十一日付月照書翰（鎌田正純宛）と同文重複により略す。

文中市來氏トハ來市七之丞ト云ヘル属役ナリ、又末文御由緒云々ハ、出雲ノ祖先鎌田政近、近衛家ニ頼リ關ケ原戦争後徳川家ト和ヲ講シタル縁因ヲ謂フナリ、

○この文書は、本文第二六三号文書の安政五年八月二十日付鎌田正純請書と同文重複により略す。

文中三位殿トハ前藩主齊興ヲ謂フ、此時齊彬薨シ、茂久（今忠義）継クモ幼ナルニ仍リ、代テ後事ヲ聴クナリ、此ノ如ク朝廷ノ密命ヲ奉シ、大ニ計画スル所アラント欲セシ際、偶々齊彬薨去ノ訃音ニ接ス、出雲喪心遂ニ病ヲ欲ス、仍テ夜間大坂留守居平田伊兵衛ト云ヘル藩吏ヲ伏見ノ旅舎ニ呼ヒ、近衛家ノ密命ヲ伝ヘ、後日ノ措置ヲ託シ急装シテ国ニ帰ル、病日々ニ重リ再ヒ事ヲ見ル能ハス、属吏市來七之丞ヲシテ、国老新納駿河ニ京都ノ密命ヲ伝ヘシム、駿河荏苒果タサス、同年十二月八日出雲遂ニ卒ス、年四十三、

出雲卒スルニ及ヒ、藩庁遽カニ因循ノ議ニ変シ、齊彬ノ遺業ハ挙ケテ之レヲ廃棄シ、唯々幕府ノ嫉悪ヲ憚カリ、近衛家密命ノ如キハ、期会ニ投セサルヲ名トシテ之レヲ拒ミ、幾ナク属吏市來（正カ）七之丞ヲ免黜シテ、其途ヲ絶ツニ至レリ、是以テ有志頗ル憤興シ、漸次齊彬ノ遺志ヲ継キ、大ニ

尊王ノ大義ヲ主唱シ、翌萬延元庚申三月ニ及ヒ井伊大老刺殺ノ変アルニ及ヘリ、
此ノ如ク薩摩藩士ニシテ
尊王ノ大義ヲ主唱シ交々興起セシハ、全ク齊彬ノ誠意ニ出ツト雖モ、又出雲ノ統率ニ由リ其志ヲ伸シタルモノナリ、其功蹟寔ニ偉ナリトス、

明治二十五年九月

島津家編集員

寺師宗徳

別紙ニ認メ候分

右故鎌田正純略歴ハ事実確正ナルモノト認メ候、仍テ茲ニ証明候也、

故鎌田正純男

明治二十五年九月　日　鎌田正夫印

●正純

幼名仙千代、後藤四郎藏人（文政八年）、藤馬（天保三年）、刑部（天保十五年）
圖書（嘉永元年）、出雲（安政三年）

○文化十三年丙子四月十五日生、母桂太郎兵衛久郷女名半、
文政三年己辰十月六日妹出生名中、母同前、
同四年壬巳八月十二日父正昌死去、
○同五年壬午正月十五日継目被仰付、御家老町田監物久視ニテ被命之、
同七年甲申六月廿八日妹中夭亡、法名淨連院殿玉露妙珍大禅童女、南林寺江葬、
○同八年乙酉七月廿五日継目之御礼被仰付、御太刀銀・馬代三種二荷進上、幼年ニ付親類桂權七郎久道名代ヲ以、御家老島津但馬久風ニ謁、奏者平田次郎安親取合、且
大御隠居重豪公　御隠居齊宣公　若君齊彬公江、御太刀銀・馬代御銘々進上御礼相済候、
○同年十一月朔日于時十歳、初テ
太守齊興公江謁見、御直元服被仰付、理髪御家老町田監物久視、奏者赤松主水則甫、此時加冠、藏人ト改名被仰付、御折六合御樽三荷、御太刀銀、馬代三種二荷進上、元服之御礼申上着座、御引渡、御土器頂戴、御脇差一腰（波平行安）拝領被仰付、即帯御礼御前首尾能退座、且

両御隠居様　若殿様江御太刀三種二荷進上、
同十年丁亥九月十日御連衆被仰付、御家老島津但馬久風・御用人樺山久太夫資俊取次ヲ以承知之、
同十一年戊子十月廿二日御家伝犬追物稽古、川上十郎左衛門江伝授ヲ受候様、御家老島津但馬久風ヲ以被仰付之、
天保二年辛卯正月十一日不断光院火消被仰付、御家老川上久馬久芳・御用人島津矢柄久計取次ニテ被命之、
同年八月朔日於御書院
太守齊興公江謁見家ニ付、持参太刀着座、御祝儀申上候、
同年八月十九日　太守齊興公御厄年鏑流馬興行ニ付射手相勤候、
同三年壬辰正月三日於御書院
太守齊興公江謁見家ニ付、持参太刀、御祝儀申上着座、御引渡、御土器頂戴、
同年同月十一日御家老川上久馬久芳ヲ以詰衆被仰付候、
同年二月　依願藤馬ト改名、御家老川上久馬久芳御用人島津矢柄久計ヲ以被伝之、
同年四月朔日　太守齊興公御厄年犬追物張行ニ付射手相勤候、
同四年癸巳八月朔日於御書院
太守齊興公江謁見家ニ付、持参太刀着座、「御祝儀申上御引渡御土器頂戴」鎌田正純年譜御祝儀申上候、
同五年甲午正月三日於御書院
太守齊興公江謁見家ニ付、持参太刀着座、御祝儀申上、御引渡、御土器頂戴、
同年同月十一日不断光院火消被成御免、壽國寺火消被仰付、御家老島津但馬久風・御用人島津仁十郎久浮ヲ以被伝之、
同六年乙未正月十一日壽國寺火消被成御免、
同十二日定火消被仰付、御家老菱刈安房隆觀・御用人北郷勘解由久敬ヲ以被伝之、
同年八月廿四日川上十郎左衛門江両度之誓伺〔詞カ〕、馬術三巻之書ヲ伝授ス、右外初度之入門迄ハ繁多ニ付年月略ス、其内奥ノ一伝授ノ分ハ年月是ヨリ跡ニ記ス、
同七年丙申三月下旬領分南方江初テ差入、
同四月初旬帰家、此時ヶ条書ヲ以家中仕置之儀申渡、

同年十一月十九日　少将齊彬公御厄年犬追物張行ニ付、　中将齊宣公　齊彬公御覗射手相勤候、従是前十月廿三日四ツ免ヲ蒙、

同八年丁酉四月六日、和田源太兵衛剣術両度之誓詞ニ及皆伝ヲ受、

同年八月朔日於御書院

太守齊興公江謁見家ニ付、持参太刀着座、御祝儀申上候、

同九年戊戌正月三日於御書院

太守齊興公江謁見家ニ付、持参太刀着座、御祝儀申上、御引渡、御土器頂戴、

同年同月十一日当番頭御役被仰付、御家老島津伊勢久浮ヲ以被命之、

同年同月十九日御太刀・馬代進上、於御前当番頭御役ノ御礼申上、奏者菱刈孫兵衛隆徴披露、且

中将齊宣公　少将齊彬公江御太刀・馬代進上、御礼相済候、

同年己亥正月廿七日奏者番兼務被仰付、御家老島津伊勢久浮・御用人伊木七郎右衛門常誠ヲ以承知之、

同年五月十八日依願定火消被成御免、

御家老島津但馬久風・御用人新納主税久品ヲ以承知之、

同年六月朔日下弓場奉行、大目附島津頼母久武ヨリ承知之、

同年八月朔日家〔脱アルカ〕ニ付於御書院持参太刀、

太守齊興公江謁見、着座、御祝儀申上候、

同年同月十二日、日當山地頭職御家老島津但馬久風ヲ以被　仰付之、

同年同月廿四日、青山善助天山流大炮皆伝ヲ受、

同十一年庚子正月三日、於御書院

太守齊興公江謁見家ニ付、持参太刀着座、御祝儀申上、御渡、御土器頂戴、

同年同月廿一日、奏者兼務番被成御免、御家老島津石見久浮・御用人二階堂右八郎行健ヲ以承知之、

同年同月廿四日逼塞被仰付、若年寄島津將監久品・御用人二階堂右八郎行健ヲ以承知之、同二月廿四日三拾日ニテ赦免被仰付候、右御咎目ハ福昌寺御参詣ニ付御供触間違之儀有之、其節当番ニテ如此候、

同年五月十九日娘出生名鼎、母島津織衛久純女、

同十二年辛丑八月朔日於御書院
太守齊興公江謁見家ニ付、持参太刀
着座、御祝儀申上候、
同年八月廿一日御太刀・馬代進上、於
御前地頭職之御礼、奏者伊集院隼衛久達披露、且同
断ニ付
中将齊宣公　若君齊彬公江同品進上、
同年九月十一日ヨリ領分南邑江差入、同下旬帰家、
同十三年壬寅正月千眼寺火消被仰付、御家老島津但
馬久風・御用人宮之原主計通哲ヲ以承知、
同年三月十三日奏者番兼務再被仰付、御家老島津登
久備・御用人土岐平太夫政守ヲ以承知之、
同年六月廿八日、詰衆ノ内一年皆勤御褒詞、御家老
島津石見久浮・御用人島津要人久寛ヲ以承知之、
同年七月十四日二女出生名豊、母同前、
同年八月廿四日一番御小姓組番頭江御役替、奏者番
兼務是迄之通被仰付、御家老猪飼央尚敏ヲ以被命之、
同十四年癸卯正月十一日千眼寺火消被成御免、御家
老菱刈安房隆觀・御用人吉利仲久包ヲ以承知之、
同年六月朔日御太刀・馬代進上、於
御前御小姓組番頭御役之御礼、奏者鎌田李之丞政典
披露、且同断ニ付
少将齊彬公江御太刀・馬代進上、
同年八月朔日於御書院
太守齊興公江謁見家ニ付、持参太刀着座、御祝儀申
上候、
同年同月二日二女豐夭亡、法名桂光院殿如露幻影大
禅童女、南林寺江葬、
同十五年甲辰正月三日於御書院
太守齊興公江謁見家ニ付、持参太刀着座、御祝儀申
上、御引渡、御土器頂戴、
同年三月六日三女出生名ハ雪、母同前、
同年八月朔日依願刑部ト改名被　仰付、御家老菱刈
安房隆觀・御用人伊集院喜左衛門兼誼ヲ以承知之、
弘化二年乙巳四月朔日ヨリ領分南邑江差入、同十日
帰家、
同年八月朔日於御書院
太守齊興公江謁見家ニ付、持参太刀着座、御祝儀申
上候、
同年十一月十五日当務ニテ御用人兼務奏者番是迄之

通、御家老島津豐後久寶ヲ以被　仰付之、
同年十二月廿四日御厩掛、御家老菱刈安房隆覩・御用人島津要人久寛ヲ以承知之、
同三年(弘化)丙午正月二日御旧例御関符御用掛、若年寄樺山伊織久徴・御用人倉山佐太夫久馨ヲ以承知之、同二月四日旧式於吉野相勤候、
同年依願領分南邑江、家来ノ内ヨリ一所同様郡見廻牛馬役兼務申付候儀被成御免、二月十九日御家老島津豐後久寶・御用人宮之原主計通哲ヲ以承知之、
同年同月娘出生名ハ久、母同前、
同年三月朔日吉野并ニ諸々御馬追御用掛被仰付、若年寄喜入多門久道・御用人伊集院喜左衞門兼誼ヲ以承知之、
五月五日吉野江相勤候、
同年六月十七日、当四月琉球国江暎咭唎国船并ニ佛郎西船来着、難題申掛候付、大頭御家老島津石見久浮江被仰付、一備御預ニ付御小姓組番頭ニテ鑓奉行之場被仰付、山川迄出張、時宜次第渡海可致旨、御家老島津豐後久寶・御用人島津權五郎久包ヲ以承知之、
同年七月二日宗門方掛寄被仰付、御家老島津壹岐・御用人伊集院喜左衞門ヲ以承知之、
同年同月四日福山并ニ諸々御馬追御用掛被仰付、若年寄喜入多門・御用人伊勢雅樂ヲ以承知之、
同年八月朔日、去ル六月十七日被仰付置候琉国江異人渡来ニ付時宜次第渡海之儀、彼表無異儀段申来候付、出張之儀引取被仰渡、御家老島津將曹久德・御用人宮之原主計ヲ以承知之、
同年同月十日、来年十一月
賴朝公六百五拾年御法会、華尾山於御社頭御執行ニ付御用掛被仰付、御家老島津壹岐久武・御用人島津市十郎久誠ヲ以承知之、右江差越相勤候、
同年同月十五日、詰衆之内四年皆勤御褒詞、御家老島津壹岐・御用人入來院平馬ヲ以承知之、
同年九月十五日、異国船掛寄被仰付、御家老島津將曹・御用人島津權五郎ヲ以承知之、
同四年(弘化)丁未、依願領分南邑玄朗寺含粒寺末寺ニテ候処、福昌寺末寺ニ免許有之、六月廿日寺社奉行所ヨリ内用願(願カ)相良清兵衞承知之、
同年七月八日、海岸防禦掛被仰付、御家老調所笑左

衞門廣郷・御用人島津權五郎久包ヲ以承知之、同日御流儀大砲掛、御小姓組番頭之方ニテ被仰付、御家老同人・御用人平田善太夫正賢ヲ以承知之、同日異国船掛寄被成御免、御兵具方掛寄之儀ハ是迄之通被仰付、御家老島津石見・御用人平田善太夫ヲ以承知之、

同年領分玄朗寺、依願一所一ヶ寺同前小本寺触頭同様免許有之、福昌寺ヨリ用願(賴カ)相良清兵衞七月晦日承知之、

同年八月朔日、於御書院

太守齊興公江謁見家ニ付、持参太刀着座、御祝儀申上候、

同年　琴月様　寛陽院様御位牌、私宅位牌所江先代ヨリ奉安置候ヲ、領分玄朗寺江　御遷座奉安置度候付、被聞召置度旨申出、御家老島津豐後久寶被聞召置候旨、八月廿七日寺社奉行勤川上東馬久封ヨリ承置(知)之、同年領分隆香寺含粒寺末寺ニテ候付、福昌寺直末之願申出趣有之、福昌寺直末ニハ免許無之、玄朗寺末寺ニ免許有之、八月廿七日寺社奉行勤川上東馬ヨリ、用願(賴カ)相良清兵衞承知之、

同年十月十五日、当番頭御小姓組番ニ相掛、天保十三寅年一年皆勤御褒詞、御家老末川久馬久平・御用人島津隼人久典・御目付四本湯之助ヲ以承知之、

同年同月十七日、御小姓組番頭之場ニテ御軍役掛被仰付、御家老調所笑左衞門・御側御用人海老原宗之丞ヲ以承知之、

同年十二月八日、給地高御改正ニ付、御小姓組番頭之場ニテ取扱掛被仰付、御家老調所笑左衞門・御用人伊勢雅樂ヲ以承知之、

同五年戊申正月三日、於御書院

太守齊興公江謁見家ニ付、持参太刀着座、御祝儀申上、御引渡、御土器頂戴、

同年同月十一日、別段之以

思召小根占江地頭所繰替被仰付、御家老島津豐後久寶ヲ以承知之、

同年同月十八日、近年異国船折々地方江漂来ニ付、従公辺御手当向品々被仰渡候付、御台場御築立相成其段御届被仰上候付、小根占之儀肝要ノ場所柄故、時々差越防禦筋等之儀所中之者共江致教示、御手当向厳重行届候様被仰付、御家老調所笑左衞門・御用

人伊勢雅樂ヲ以承知之、
同年同月廿日、此節就
御巡見、福山牧内ニヲイテ炮術調錬被遊　御覩候付、
為差引被差越、左候テ　御覩済之上地覩所江奉待上
候様、川上式部・川上龍衛同様被　仰付、御家老調
所笑左衛門・御側役二階堂志津馬ヲ以承知之、同二
月三日ヨリ福山江差越、同六日調錬無滞相済、領分
南邑江立寄、左候テ小根占江差入、同十二日
太守様南邑仮屋御建、十三日小根占地頭仮屋御泊一
日御滞在、同十五日
御機嫌能御立被遊、夫ヨリ指宿之様渡海帰家、
嘉永元年三月朔日十五日ヨリ改元御弘メ、吉野并ニ諸々御馬追御
用掛被仰付、若年寄樺山伊織久成・御用人伊勢雅樂
ヲ以承知之、
同年同月十九日、来酉年就
御下国御礼使被　仰付、勤済之上直ニ詰被仰付候条、
往返日合見合宮之原主計江致交代、左候テ当冬致出
府候様被　仰付、御家老調所笑左衛門廣郷ヲ以承知
之、
同年五月廿五日、此節御軍役方別段被相建候付、御
兵具方掛寄之儀ハ被成御免、御家老末川近江（久平）・御用
人平田善太夫ヲ以承知之、
同年七月朔日、福山并ニ諸所御馬追御用掛被仰付、
若年寄樺山伊織・御用人小笠原轍長照ヲ以承知之、
同年同月十八日、母病死、法名英昌院殿德容淨輝大
姉、
同年八月十七日、依願圖書ト改名被仰付、御家老島
津將曹久德・御用人伊勢雅樂貞章ヲ以承知之、
同年同月十九日、江戸詰ニ付御合力高所務代銀被下
候旨、御家老調所笑左衛門・御勝手方掛御用人二階
堂源太夫行三ヲ以承知之、
同年、依願御軍賦ニ付、私領同様領分南邑ヨリ半手
之人数差出候様被仰付、九月廿三日御家老末川近江
久平・御用人島津隼人久典ヲ以承知之、
同年九月廿九日鹿府宅発足、十月十八日着阪（坂）、同廿
日伏見江着、同廿一日仙誦寺山内玄朗法印墓所江参
詣、來迎院位牌江モ拝礼、尤香奠金進納、左ニテ京（候カ）
都諸所見物、同十一月七日東武芝御屋敷江着、供之
家士役人濱田休左衛門、其外川畑源之助・山次杢左
衛門・角野藤兵衛・肥後平左衛門・神田六郎右衛門・

永山彦太郎、右外中間小者等ニ至、都テ身内足軽共召列候、

同二年己酉（嘉永）闕四月七日

御着城御礼使ニ付、御用番松平和泉守様（乗全、老中西尾藩主）其外御老若（閣カ）様江廻勤、同伴御留守居早川五郎兵衛、供行列鶯籠廻六人・先陸三人、手鎚中柄小者・対挟箱・合羽籠三荷・乗馬沓籠捍（押カ）一人、支度服紗物麻袴、

同年同月十一日　公儀御目付於遠山半左衛門殿宅、駕籠御免ニ付誓詞判元被見居（届カ）、御月付拾軒江御礼廻勤、尤加籠御免　公辺江御願被下、去月廿七日御用番松平和泉守様ヨリ御免被仰付候旨、御家老島津豊後・御用人宮之原主計ヲ以承知之、

同年同月十五日、御礼使勤ニ付登城、同伴御留守居井上逸作ヲ以、於御白書院

将軍家慶公・右大将家祥公江

御目見、御奏者本田中務太輔忠民様（岡崎藩主）・御老中松平伊賀守忠優様御取合、御礼使無滞相済、引次自分之御礼、御奏者松平紀伊守信篤様（丹波亀山藩主）、自分献上物御太刀馬代、且於西丸御奏者森川紀伊守俊民様（生実藩主）江相謁（拝カ）、献上物同断、御礼申上、夫ヨリ御老若中（閣カ）江廻勤、諸事御先格之通無滞相済、供廻初日廻勤通本行列ニテ候、

同年同月十九日、御暇御給ニ付登城、同伴御留守居半田嘉藤次、御老中松平伊賀守忠優様於檜之間御奉書被相渡、且紗綾二巻拝領被仰付、再罷出御奏者

御取会ニテ御礼、夫ヨリ西丸江登

城、老中久世大和守廣周様（関宿藩主）ヨリ御奉書被相渡、左ニ（候カ）テ御本丸御老若方（閣カ）江廻勤、其後四日引続御三家方・御三卿方・日光宮様并ニ御近親様江不残御使者相勤、

同伴御留守居付役ニテ候、

従是前二月廿八日、来戌年琉球人参府付御用掛被仰付、御家老島津豊後・御用人宮之原主計ヲ以承知之、

同年七月六日、御改革御取縮御用掛被仰付、御家老島津豊後・御用人井上逸作ヲ以承之、（知脱カ）

同年八月朔日　公方様江

太守齊興公ヨリ御太刀献上、為御使者登

城、於大広間　御名代相勤、御老中列座、御奏者石（伊）川日向守（勢亀山藩主）総和様御請受取（衍カ）、御老中江向御礼、直ニ退座、同伴御留守居付役立花直記、供廻本行列ニテ候、

嘉永三年庚戌正月二日

公方様江　太守齊興公御太刀御献上、　御名代之御使者相勤登

城、於大広間御老中列座、御奏者番松平右京亮輝聽様御受取之、御老中江向御礼申上退去、同伴御留守居付役仙波市十郎、供廻一本行列（行カ）ニテ候、

嘉永三年八月朔日、御太刀献上御使者　御名代勤ニ付登　城、於大広間末々御老中列座、御奏者番脇坂（亀野藩主）淡路守安宅様請取之、御老中江向御礼退去、同伴御留守居付役立花直記、供廻本行列ニテ候、

同年九月七日、当御役ニテ御側御用人勤、御家老島津石見久浮ヲ以被仰付之、同日来亥年　御下国之御礼使川上龍衛勤済迄ハ当分之通相勤、日々御目見等ハ御側御用人通被仰付、御家老同人ヨリ御側御用人平田直之進正容ヲ以承知之、

同年十一月十八日、琉人献上物為御使者西丸江登城、御目付遠山半左衛門殿出会ニテ候、左候テ退去、供廻馬上本行列ニテ候、

同年同月十九日、王子初テ登

城ニ付跡乗ニテ登　城、供廻馬上本行列ニテ候、

同年同月廿二日、王子御暇御給ニ付登

城、跡乗等去ル十九日之通、同廿六日上野参詣ニ付同様相勤候、同廿八日御老若（閣カ）様廻勤、同十二月二日御三家様江同断ニ付同様相勤候、廿八日・二日之両度ハ乗物本行列、其外馬上本行列ニテ候、

同年同月三日、従

公方様御座（於脱カ）之間御手自朱衣片衝御茶入

太守齊興公御拝領ニ付、同四日御用掛被仰付、同廿八日右御礼被仰上候付、御献上物御使者被仰付登

城、御老中戸田山城（宇都宮藩主）守忠温様於檜之間御出会、御目録御奏者番石川日向守總和様御請取、御老中江向、重キ拝領物為御礼目録之通献上仕候旨御口上申述、可蒙披露旨御答直ニ退去、同伴御留守居早川五郎兵衛ニテ候、

同四年辛亥正月二日

太守齊興公御不参ニ付、御太刀献上之御使者被仰付登　城、於大広間御老中御列座、御奏者番酒井越前（勝山藩主）守忠嗣様御請取、御老中江向御礼退出、同伴御留守居付役勤仙波市十郎、供廻本行列ニテ候、且一橋様・田安様・有馬様御柄（栖カ）居江御使者相勤候、

同年同月三日、為　御名代

少将様年頭御式被遊　御請、於御小書院（謁見脱カ）家ニ付、持参太刀着座、御祝儀申上、御引渡、御土器頂戴、

同四日、於大奥年頭ニ付

御前様　御目見被仰付、御手熨斗被下候、

同年同月九日、旧冬琉人参府ニ付御用掛被仰付置候、

為御褒美銀二枚拝領枚仰付、御家老島津將曹・御用人川上龍衛ヲ以承知之、同日御茶入御拝領御用掛相勤候付、太平布一疋拝領被仰付、御家老川上筑後・御用人川上龍衛ヲ以承知之、

同年同月十一日、大目附江御役替御役料高二百石被下置、席順島津主殿次罷在候様、且此涯相詰、

公辺他所向江相掛候儀ハ若年寄格ト唱、御家老座江致出席、御家老方御用承、表向諸書附等ハ御家老名前ヲ以取扱、於御国許ハ御役持前之通相勤候様、御家老島津將曹久徳ヲ以被仰付之、

同年二月十一日、近々

太守齊彬公　御家督之御礼被　仰上候節、

公辺江　御目見御願被下候処、御願之通被　仰渡候旨、御家老島津將曹ヲ以承知之、

同年同月十五日

太守齊彬公御家督之御礼被

仰上候付登　城、献上物御取仕立ヲ以御太刀一腰・縮緬五巻献上、御家来九人之内若年寄之場ニテ

御目見、御奏者安藤長門守（磐城平藩主）信睦様御披露、左候テ御老若様江御礼廻勤、同伴御留守居付役勤立花直記、供廻加籠脇四人・先徒士五人・鑓小者中柄・対挾箱・簑箱・率添沓籠・合羽籠五荷棹（榊カ）両人、其外用達両人相付候、

同年三月朔日、御座之間江

太守齊彬公御出座、御太刀・馬代進上ニテ大目付御役之御礼申上、奏者御側御用人有馬舎人披露、且合（全カ）断（カ）ニ付

宰相齊興公江同品進上、

同年同月廿七日、今般　御隠居御家督ニ付、従　宰相齊興公鎌倉江　御代参被仰付、御家老川上筑後久封ヲ以承知之、同四月五日芝西向御屋敷発足、

同六日着、同七日

鶴ヶ岡八幡宮并ニ頼朝公・忠久公御廟所、且白旗大明神江　御代参、左候テ相承院江暫着座、夫ヨリ金澤之様相廻、同九日帰宅、同伴御留守居半田嘉藤次・

御家座（老脱カ）書役心添有馬次郎左衛門・清書掛広間小姓兼務落合孫右衛門、用達鎌田傳兵衛、供廻加籠脇四人・先徒士三人・役人・医師・鑓中柄小者・対挾箱・茶弁当・合羽籠三荷・両掛一荷・竹馬二荷・棹壱人ニテ候、（純年譜）（荷抑（鎌田正））

同年四月朔日

太守齊彬公日光

御宮向御修復御用被為蒙

仰候付、御用掛被仰付、御家老川上筑後久封ヲ以承知之、

同年六月廿五日、当正月十一日大目附江御役替ニ付、御合力銀二拾四貫二百二拾五匁被下候旨、御家老川上筑後ヲ以承知之、

同年九月八日、御国許江御用有之、急ニテ出立被仰付、御家老川上筑後ニテ承知之、

同年同月十四日、遠州今切・信州福島・上州碓水乗駕ニテ罷通候儀、

公辺江御伺被下、御伺之通被仰渡候旨、御家老川上筑後久封ニテ承知之、

同年同月十七日江戸出立、同晦日伏見着掛、京都仙（泉）誦（カ）寺内玄朗法印墓所并ニ來迎院位牌江参詣、同朔日着阪（坂）、夫ヨリ小倉江渡海、十月廿日鹿府着、同廿一日出

殿、即日　御目見被仰付候、

同年十一月二日、琉球産物方掛被仰付、御家老喜入多門ニテ承知之、

同年十二月六日、先般日光

御宮向御修復御用被為蒙　仰候御用掛相勤候為御褒美、従

公方様（家慶公）御時服六ツ・御銀五拾枚、於

御城拝領被　仰付、名代井上逸作承知、御老中阿部（福山藩主）伊勢守正弘様御達、御奏者番板倉周防守（備中松山藩主）勝静様御品被相渡、右之御礼御奏者伊東修理太夫（飫肥藩主）祐相様御取合、（済）且御老若様江御礼廻勤迄モ、名代井上逸作ニテ相渡（カ）候旨（到）至来ニテ候、

同五年壬子、依願領分南江竹（邑脱カ）木見廻弐人一所同様家来之内ヨリ申付候様、二月朔日御家老末川近江・御勝手方御用人伊集院喜左衛門取次証文ヲ以被仰渡、用願（願カ）樺山彌兵衛承知之、

同年、南江横（邑脱カ）目役二人一所同様家来之内ヨリ申付度

願出趣有之、内証ニテ申付候儀ハ不苦、表向役名相記候儀ハ不相成旨、閏二月廿九日御家老樺山伊織久成・御用人伊勢雅樂ニテ、用願(頼カ)樺山彌兵衛承知之、

同年三月朔日、去年於江戸日光御宮向御修復御用被為蒙　仰候御用掛相勤候為御褒美、紗綾三巻拝領被　仰付、御家老島津豐後ニテ承知之、

同年五月廿九日、領分南役人(邑脱カ)組頭江一所同様寺社方掛申付、其届寺社奉行所江、用願(頼カ)樺山彌兵衛ヨリ申出之、

同年十二月廿六日、娘出生名ハ富、母同前、

同六年癸丑正月晦日、領分南役人(邑脱カ)郡見廻庄屋江、一所同様御薬園掛・藍玉掛申付、其届用願(頼カ)樺山彌兵衛ヨリ申出之、

同年、南役人(邑脱カ)郡見廻庄屋江、一所同様御製薬掛被仰付度申出、御家老樺山伊織・御側御用人有馬舎人ニテ申出通被仰付候旨、御製薬方ヨリ用願(頼カ)鎌田喜平太承知之、

同年、領分南通行之諸御奉人(公落カ)・送人馬・御用封持夫等、并ニ同所差入ノ御奉公人野菜薪類迄モ、家来見廻ヨリ引受度候付、大姶良宿場人馬立并ニ諸夫仕等之儀被相除度、用願(頼カ)樺山彌兵衛ヲ以願申出趣有之、

同三月廿一日御家老喜入多門・御勝手方御用人伊集院喜左衛門取次、証文ヲ以当年ヨリ先五ヶ年願之通被仰付候旨被仰渡候、

同年、領分南郡見廻一人重之願役人ヲ以申出、六月十一日御勝手方御用人伊集院伊織取次証文ヲ以願之通被仰付候、

同年、南炉楮掛表向申付度役人ヲ以願申出、同月同日御勝手方御用人同人ヲ以同様被仰付候、

同年、同所取納宅(モ)先年之通手沙汰之計、用願(頼カ)ヲ以願申出、同月同日同様被仰付候、

同年冬、肝付表諸所太守齊彬公御巡見ニ付、十一月廿三日領分仮屋　御立場相成候、左候テ家来共調錬(練)之儀モ、同月廿八日於志布志諸郷一所ニ被遊御覩候、尤私領之儀ハ是迄不刀ニテ御目通江罷出来候得共、此節ヨリ大小御免被仰付、領分之儀モ同様之旨、前以御軍賦役ヨリ達有之候、

同年、南役々江(人カ)宗門方掛一所同様表向申付候儀御免

被仰付度、用願（願カ）ヲ以願申出置候処、同七年甲寅二月四日御家老島津石見・御用人倉山作太夫ヲ以、表向ハ御免無之、内証ニテ掛申付取締厳重行届候様、用願（願カ）代鎌田喜平太承知之、

同七年申寅二月朔日、此内南家来之内ヨリ行司壱人申付度、用願（願カ）ヲ以願出有之、御勝手方御用人伊集院伊膳取次証文ヲ以テ願之通御免被仰付候旨、用願（願カ）代鎌田喜平太承知之、

安政二年乙卯四月廿二日嫡子出生、幼名仙千代、母同前、産弓役人森田十郎太親愛勤之、

同年十二月、南枦楮掛一人ニテハ差支候付一人重申付度、役人ヨリ用願（願カ）次書ヲ以、郡方江相付願出趣有之、同三年辰正月十一日御勝手方御用人二階堂源太夫取次証文ヲ以願之通被仰付候旨、郡方ヨリ用願（願カ）名代鎌田傳兵衛承知之、

安政三年丙辰二月朔日、追々御製造被仰付候軍艦江、水軍之兵士被召乗候付掛被仰付、御家老新納駿河久仰ニテ承知之、

同年十月五日、御内用之儀有之候付、仕廻次第急ニテ致出府候様被　仰付候旨、御家老島津下總久徴ニテ承知之、

同年同月十五日、今般江戸出府ニ付、御合力高所務代銀拾八貫五百弐拾五匁被下置候旨、御家老新納駿河久仰ニテ承知之、

同年同月廿三日、鹿府宅出立、十一月二日豊前小倉出船、同七日着阪（坂）、同八日伏見江着、同十九日江戸芝御屋敷江着、翌廿日澁谷御殿江罷出御目見被　仰付候、

同年同月廿一日ヨリ御家老座末席江相詰、末（采カ）御内用之儀何分承知不仕候、

同年十二月七日、依願出雲ト改名被　仰付、御家老島津豊後久寳ニテ承知之、

同年同月廿日、若年寄江御役替、御役料高三百石被下置、席順川上矢五太夫上罷在候様、且守衛方ニテ当詰御座之間之格ニテ、於澁谷御屋敷御殿御休息御直被　仰付候、且又当詰中御家老方御用承リ、御家老名前ヲ以取扱、月番繰廻相勤候様、御用之間之格御家老座ニ於テ、御家老島津豊後久寳ニテ承知之、

安政四年丁巳三月九日、御合力高所務代銀弐拾四貫弐百弐拾五匁、旧臘廿日若年寄江御役替ニ付、右当

日ヨリ御法之割ヲ以被下置候旨、御家老川上筑後久封ヲ以承知之、

同年四月十三日

宰相様御方御用兼承リ候様、御家老島津豊後久寳口達ヲ以承知之、

同年同月、領分夫分来午春迄年数筈合候付、一往願（本ノマヽ）継之儀於御国許用願（願カ）ヲ以願出候処、午年ヨリ先五ヶ年是迄通被仰付候旨、御勝手方御家老新納駿河・御勝手方御用人伊集院伊膳取次証文ヲ以内用願（願カ）承知候旨到来ニテ候、

同年九月十六日、来午春

御前様御登　城ニ付、御用掛被　仰付候旨、国老川上筑後久封ニテ承知之、

安政五年戊午正月廿三日、谷山江地頭所繰替被　仰付、国老川上筑後久封ヲ以、江戸御用之間之格ニテ於御家老座被伝　命、

同年三月廿五日

御前様御登　城ニ付御供相勤候、右ニ付用達二人召列、且供行列先供五人、乗物脇四人、手鑓長柄小者・率馬・対挾箱・蓑箱・沓籠・合羽籠五・荷棹（押カ）二人ニテ候、

〔鍋田正純年譜（東大史料編纂所所蔵）にて校訂〕